
ネギま！～星の申し子～

煌星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！〜星の申し子〜

【Nコード】

N8022V

【作者名】

煌星

【あらすじ】

星の気紛れか、それとも抵抗か……生まれる筈がなかった存在により、徐々に正史からずれていく世界。果たして、行き着く先に何が待ち受けているのか？

魔法先生ネギま！の二次創作です。

オリジナル主人公です。

ヒロインはエヴァンジェリンです。

毎度の如く、独自設定・独自解釈のオンパレードです。

気晴らしに書き出したお話です、余り期待しないで下さい。

8 / 26・27……大幅に改訂しました、内容がかなり変わっています。

9 / 22……第三十章を修正版と差し替えました。

次回更新は10 / 1までお待ち下さい……色々構成を練り直していますので。・・・(ノ、)

第一章↳旅路（前書き）

注意！原作開始よりかなり前から開始します。

ただ、かなり早い展開になると思います。

また、主人公はかなり御都合的な能力を持っています……その詳細は少しずつ明らかになる予定。

第一章 旅路

薄暗い部屋には一人の半裸の男がいた。

夜の海原のような髪は無造作に切られており、右目は血のように赤く、左目は漆のように黒かった。

体躯は2メートル近く、そしてその眉間には微かに皺が出来ており眼つきは鷹のように鋭い……尤も、纏っている雰囲気は柔らかかったが。

『……………うん』

黒い着流しを着終えた彼の後ろで一つの気配が湧き上がった。

そこにあつたベッドから起き上がったのはこれまた半裸の美女。

『……………あら、もう発たれるのですか？』

『ああ、随分と世話になった』

他人が見れば無条件で法悦としてしまふ様な美貌を目にしても、彼は表情を変える事はなかった。

ただ一つ頷く事でそれに応え、唯一の手荷物である白の笛を帯に挿し改めて一礼する。

『いいのですよ、貴方と過ごした日々はこの無情な世界では非常に貴重で温かなものでしたから……………そしてそれはこの子も同様、ね？』

そう言いながら彼女は隣に寝そべっていたソレを撫で付ける。

それに応えるようにその者も無言で一つ頷き、彼に擦り寄って頭を押し付けた。

『……本当に稀有な存在よ、貴方は。私にしか懐かない筈のこの子を、其処まで骨抜きにするのだから……まあ、貴方にとって稀有という言葉は忌み嫌う物でしょうけどね』

自身が顔を顰めている事に気づいたのであろう……彼は擦り寄ってきたソレの頭を撫でながら、軽く首を振った。

『いや、別にいいさ……この広大な世界に居なかったとは言え、諦めた訳ではないし』

『……同属探し、ですか。次に往くのはどちらですか？』

『そうだな……ま、気の赴くままのんびり探さ。時間だけは腐るほどある事だし』

『そう……でも、寂しくなりますわ』

そう呟きながらも、黒いドレスを身に纏い金の冠を携えた彼女は彼を促して外へと出た。

『また、会いに来てくれますわよね？』

『そうだな、目的の一つを果せたならば……その時は』

『ふふ、それはまた気の遠くなるような時間が掛かりそうですわね……それならば一つ、私から贈り物をしましょう』

目的の達成の難しさを知る女性にしてみれば、それは二度と会えないに等しい答えだった。

だからこそ、掛け替えのない絆を得る為に贈り物をする……体での交わりなどとは比べ物にならない物を。

『名前を贈らせて……永い時を生きて尚、名前を持たない貴方に』
『……そうだな、貴女になら』

そういつて彼は女性の前で傅き、騎士のように頭を垂れる……格好は些かアレだが。

『では我が女王陛下、私に唯一無二の名をお与え下さい』

『ふふふ……分かりました、授けましょう。貴方だけが名乗れる名前を』

『……ハ』

『貴方がこれから名乗る名は、リアン……リアン・E・S・グラン
タムール』

『リアン……確かに拜命致しました』

彼、リアンは知る筈もない事だが、この名には彼女のリアンに対する想いと願いが籠められている。

尤も、目は口ほどに物を言う様に、リアンは確かに女性に対してこれまで以上の繋がりを得ていた。

『では、往ってくる』

『ええ、いつか訪れる再会を楽しみに待っていますね』

『ああ、またいつか会おう』

その言葉を最後に、リアンはその場から忽然と消え去った。

『願わくは、かの者に至福の時が訪れますように』

女性は一人となった空間で呟くと、彼方へと想いを馳せた……いつかまた訪れるかもしれない再会を夢見て。

この宇宙には五つの世界が存在すると言われている。

まず主に人が存在する世界……地球、またの名を旧世界。
次に魔やそれに属する者達が住まう修羅界……魔界。

次に神や天使などが住まう天上界……神界。

次に死者が辿り着くあの世……冥界。

そして最後に魔法により創られた幻想世界……魔法世界。
△ンドゥス・マギクス

……尤も、神界と冥界はあくまで想像上のものと認識されているが。

リアンが次の瞬間現れた其処は辺りが真っ白に輝く空間だった。

目を凝らせば真っ白のソレは薄い膜のようなものであり、それを隔てた向こう側には煌めきが散らばった黒い世界が広がっていた……

所謂宇宙空間である。

『……………』

彼はそれを認識するも慌てるような事もなく、右に左にと視線を向ける。

前後左右上下全てを見回していた彼であったが、ふと左側に自身と似通った気配を感じた。

『……………ふむ』

彼は一人頷くと、そちらに向けて念を飛ばし……次の瞬間、またもや消え去った。

彼が見詰めていた遙か彼方には、青い惑星……地球が輝いていた。

時は西暦1500年。

日本は室町時代であり、またブラジルが発見された年でもある……
至極、どうでもいい事だが。

リアンが現れたのはそんな時代の日本、現在でいう埼玉県の一部に存在する大樹の傍であった。
辺りは木々が深く茂っており、大樹は薄い膜に覆われている……どうやら結界の類のようだ。
彼は徐に大樹に向かって一礼すると、その手をその幹に掲げた。

汝、何者ぞ

途端、脳裏に響き渡る荘厳な念。

どうやら彼の目の前の大樹から発せられているようだ。

『俺の名はリアン、リアン・E・S・グランタムール……俺が何者なのかは、俺自身が知りたい。名をくれた女性^{ひと}は精霊に似た存在とだけ教えてくれたが』

汝、自己を知りたいと申すか

『ああ、貴方からは俺に似た気配を感じたものでな』

汝、我と同じ存在では非ず……しかし、原初は同じものなり

『原初……つまり始まりが同じ、なのか』

汝、星と繋がりを持ちし者……曰く、星の申し子

『……星の、申し子？』

瞬間、リアンの周囲に存在する気配が賑やかなものへと変貌した。

『っ、これは……精霊が謳ってくれているのか？』

汝、祝福を得た……自己を認識した事により、盟約は成された

辺りに響く精霊達の合唱。

日光が、清風が、霧雨が、大地が、暗闇が、灯火が、植物が、動物が、何もかもが……リアンを祝福するように謳い合った。

汝、何を捜し求める

『……俺は、俺と同じ存在を得たい。それが孤独を癒す為になのか、それとも種の繁栄の為になのかは判らんが……案外、両方なのかもな』

汝、それは不可能であり、可能だ……汝と同じ存在はあらず、だが似た存在を創り出せるであろう

『っ……俺と同じ存在は、居ないのか？』

汝、星の申し子……あえて同じ存在を挙げるとすれば、この星そのもの

大樹の言葉に意気消沈となるリアン。

しかし、似た存在が創れるという言葉に希望を持つ事にした……絶望など、これまで経て来た永い時の中で幾度となく経験している故に。

『似た存在が創れるというのはどういう意味だ？』

汝、それは自身で確かめよ……世界を周り、知る事から創めるがよい

『っ！……そうだな、自分が欲するものは自分の手で掴まないと、駄目だな』

リアンは己の改めるべき部分に気付き、姿勢を正した。

汝、精霊達の契約者コントラクターなり……彼らが汝の進むべき道を示してくれるであろう

『ありがとっ、大樹の精よ……とりあえず、世界を周ってみるよ』

リアンはそう言って一礼すると、その場を後にした……無数の精霊に見送られながら。

西暦1903年。

リアンは再び日本へと戻ってきていた。

『…………ふう、何とも変化が著しい世界だ』

これまで彼は地球を渡り歩き、その全てを踏破してきたが…………些か、その変化の速さにげんなりしていた。

『それに…………何処も彼処も陰湿とした世界だな』

かつてリアンがいた世界は無情で殺伐とした世界ではあったが、此処まで陰湿なものではなかった…………まあ、戦いに巻き込まれたり、狙われたりはしたが。

『…………俺は本当に何も知らなかったのだな』

無数に転がる腐乱死体も、蔓延る疫病も、生きとし生ける者達の怨念も…………何もかも初めての経験だ。

暗闇に生まれて尚、暗黒を知らずに生きてきたリアンにとってそれは衝撃であった。

どうやら嘗て居た世界では、あの女性に護られていたらしい…………それを心底理解するリアン。

『これは是が非でも、もう一度我が女王陛下に会わねばいかな』

そう呟くりアンが再びこの地に来訪したのは、大樹の精に会う為である。

既に旧世界は余す所なく見聞して回った為、次なる世界へと旅立ち
うと思つたのだ。

まあ、歴史の移り変わりの早さから見聞には事欠かないのだが……
彼の目的を考えれば、余り得策ではないであろう。

『転移していつてもいいのだが、何処に出るか分かつたものではな
いからな……向こうの裏の情勢を考えるに、得策ではないか』

本来、如何なる場所であろうと自由に行き来できる彼であるが……
時代の流れがその行使を阻む事となつた。

これは精霊と盟約を交わしている彼だからこそ知りえた情報なのだ
が……目的地である魔法世界は表面上戦こそ起こつてはいないが、
裏ではかなり切迫しているようなのだ。

そんな時、リアンの様な特殊な存在が公になってしまうと……かな
り不味い事になりかねない。

その為、比較的安易に潜り込めると思われるゲートを使用する事に
したので。

『彼は400年ほど経つが、大樹の精はどうしているかな……ん？』

いつもの如く、姿を隠して人目を避けていたリアンの第六感に触れ
るものがあつた。

大樹の精とはまた違う、しかし似て非なる存在を感じ取つたのだ。

『この感じは、魔法世界まほうせかいに微かに感じる者と似ているな……感じ取
れる力からすると、此方の方が弱いようだが』

それは世界の壁を挿んで尚、感じ取れたある存在と似通つた力の流
れを有する者であつた。

今回向こうに渡る事に決めたのも、それと接触してみようと思つた

からである。

『ふむ、この感じからすると……よし、丁度いい具合に人目を避けているようだ』

対象が人気のない所を選んで歩いている事に気づいたリアンは静かに接触を持つ事にした。

……それが己にとって、一生の中で最も得がたい出会いになるとは思いもせずに。

第一章↳旅路（後書き）

とりあえずそれなりの設定と原作前辺りまでのプロットは出来ています。

まあ、文章に起こすのが非常に遅いので結局は亀更新になってしましますが。・・・（ノ）、（・・・）

アンチは基本しない予定です、多分。

ただ、魔法使いを貶めるようなところはあります……余りにも酷い表現があれば教えてください（、・・・）

今回は基本3000字で進めたいと思います。

第二章へ邂逅（前書き）

注意！無駄にルビが多いので出来ればパソコンでの閲覧が好ましい
と思います。

ごめんなさい、どうしても振りたかったもので（ ; ）

また、独自設定が酷いかもかもしれません。

一部、原作とは違った意味合いを持つ言葉も出ます。

第二章 邂逅

SIDE エヴァンジェリン

アタナシキテイ

私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、最強種の一つである吸血鬼の真祖だ。

ハイ・テイライトウオーカー

魔法世界では『闇の福音』、

ダイク・エヴァンジェル

ドール・マスター

『人形使い』、

マガ・ノスフェラトゥ

『不死の魔法使い』、

あしきおとずれ

『悪しき音信』、

かいんのしと

『禍音の使徒』、

わらへすがたのやみのまおう

『童姿の闇の魔王』などの二つ

名で恐れられている。

私としては他人の評価などどうでもいい事であるが、鬱陶しい雑魚共に纏わり付かれるのは勘弁して欲しいものだ……まあ、少なからず自業自得なところもあるがな。

私は現在大陸の東にある小さな島国に來ている。

永らく住んでいた暗黒大陸も騒がしくなってきた為、各地を転々と回り此処に辿り着いたのだ。

そうしてふとした切欠で出会ったチンチクリンのおっさんに、合気柔術なるものを一通り習った……魔法や糸が使えないと非力な私にとって非常に有用な技法だな、これは。

既に件のおっさんとは別れており、人目を避けるように林道を歩いている所だ……ふむ、これからどうしたものかな？

「ヨー御主人、コレカラドウスンダ？」

私が次の予定を考えていると、抱えていた従者のチャチャゼロが同じ事を訪ねてきた。

「そうだなー……私としては京の都をもう一度じっくり堪能したいところだが」

「無理ダロ、ソリヤ……御主人ノ容姿ジャ、目立ち過ギテ落着ク

事も出来ネエゾ？」

「分かっているわっ、そんな事！」

今更ながらの従者の言葉に、私は苛立ちを隠す事無く叫んだ。

そして改めて自身の呪われた身と平穏とは程遠い現状に唾棄する。

そう……この呪われた身に關しては今更な事なのだが、私を取り巻く現状の悪さにも辟易してしまう。

「まさか、こんな小さな島国に魔法使いの拠点が二つも出来上がるとはな……それも片方は今になって」

「アー、昔カラ在ルラシイ呪術協会ト、ツイ最近出来上ガツタ魔法協会力……本当ニ運ガ無イナ、家ノ御主人ハ」

「ほっとけ！」

だが正直どうしたものか。

はつきり言っで見つかってしまったえば、間違いなく追いかけるのは目に見えている……かと言って、何処か宛がある訳でもなし。

私が思わずしゃがみ込んで唸っていると、不意に影が差し込んできた。

「……何だ？」

私は不思議に思い頭上を見上げると、一人の男がいた……木の枝の上に。

「……は？」

『こんにちは、お嬢ちゃん』

「っ？！ 念話！？」

突如頭に響く声に咄嗟に距離をとる私。

だが、相手は少しも動かず透き通ったオッドアイを此方に向けるだけ……何だ、あの不可思議な瞳は？

『念話？……ああ、そうか、すまない。俺は特殊な成り立ち故に声帯が普通では無くてな、出せない事も無いんだが……正直億劫なんだ』

「……何者だ？」

『俺はリアン・E・S・グランタムール、リアンと呼んでくれ……お嬢ちゃんは？』

……？

知っていて声をかけた訳ではないのか？

しかし、お嬢ちゃんとは……まあ、この形では仕方ないか。^{なり}

とは言え、いい気分がする訳でもないので訂正しようとしたのだが……。

「お嬢ちゃんなどと呼ぶな、それでも貴様の何十倍も生きているのだぞ？」

『……という事は、君は少なくとも5万年は生きているという事か？探った感じそうは見えなかったのだが』

「……は？」

私は再び呆ける事になってしまった。

S I D E O U T

S I D E リアン

俺の眼下にいる金髪の少女は呆けたように此方を眺めている。

まあ、それも仕方あるまい。

「…………ど、どついう事だ？」

『ん？ 君は俺の数十倍は生きていると言っただろ？ 俺はこれでも5000年は生きているからな…………まあ、自我を持ち始めたのは4000年ほど前からだが』

これは事実だ。

俺は魔界深部にある溜まり場から誕生した特殊生命体である。

当初、自我を持っていなかった俺は1000年ほどその空間で彷徨っていた、らしい…………これは自我に目覚めた後、俺をずっと見護つて来てくれた女王陛下が教えてくれた事だ。

それから4000年、俺は魔界を隅から隅まで探索してきた…………同胞を探す為。

まあ、結果はご覧の通りなのだが。

「う、5000年だと?!」

「御主人ノ10倍ジャネエカ?! マジカヨ!?!」

『本当さ…………お陰でこの程度の力は有しているぞ?』

「…………ツ?!?!」

俺は話を円滑に進める為、瞬時に結界を張り隠していた力を解き放つた…………尤も、余り威圧してもしょうがないので直ぐに抑えたが。ふむ、しかし彼女は500歳程度か。

まあ、体から溢れるオーラからしてその程度だとは思っていたが。それに彼女の内に潜む物はやはり俺とは似て非なるの物のようだな、その在り方も。

とは言え、隣人であることに変わりはあるまい。

『それで?君の名は?』

「う…………え、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。こつちは従者のチャチャゼロ」

『ふーん。それじゃ、マクダウエル嬢……俺と行動を共にしないか？』

「な、何で？」

『なあに、俺には目的があつてな……その一つが同胞探しなんだが、君は俺と似て非なる存在だからさ』

「似て非なる存在？」

『一つ訊くが、君は本からそうなのか？』

「いや、10歳の折に無理矢理変えられたんだ……それで、さっきのはどういう意味なのだ？」

俺はマクダウエル嬢の疑問に答えるべく、自身と彼女の在り方について語る事にした。

『ああ、そもそも俺も君も肉体に魂を縛られた人間や亜人とは違い、ある一定の法則を持って凝縮した力の集合体だ……まあ、純正の魔族に近い存在だな』

「力の集合体……私は吸血鬼の真祖だが、お前は何か固有名称はあるのか？」

『……吸血鬼の真祖、か。なるほど、確かにそういう見方も出来るな』

「ど、どういう意味だ？」

『君の場合、魔素と呼ばれる精霊を繋ぎとめる力を持った粒子が集った存在なのだが……その力の性質が吸血鬼のそれに酷似しているのだ』

魔素には繋ぎ止める力……つまり、引力がありそれは物理的な意味合いだけでなく、霊的な意味合いも含んでいる。

魂……つまり命を繋ぎ止める力に秀でているという意味合いが。要するに死に難いという事だ。

「ジャ、ジャア、御主人八吸血鬼デナイト言ウノカヨ?!」

「いや、そうとも言い切れない……何せ、魔素という物を単体で凝縮させる事は非常に困難なのだ。それに、ただの肉体にその様な物をとり付かせたら忽ち崩壊するのが目に見えている」

「……つまり、私は吸血鬼という強靱な肉体にされたと同時に、お前と似て非なる存在に変えられたという訳か？」

「ああ、ちなみに俺はあらゆる精霊が集い融合した存在だ……とある存在には、星の申し子なんて呼ばれたが」

ちなみにこの呼称については現在においても理解できていない。ただ、今の俺にはまだ何か欠けているという事だけは見聞を広めた事で分かってきている。

「当然力の種類が違うからその性質も異なり、俺の場合はあらゆる事象に対応できるという性質に対し……君の場合は、魔素の司る繋ぎとめる力によって停滞する性質も持っている」

「……ッ?! ま、待て! ならば私が成長しないのは!？」

「そう、その性質の為だ……確かに吸血鬼もほぼ不老不死ではあるが、完全なるものではないからな。500年生きてその容姿ならば、間違いなく魔素による影響だろう」

ガーン!

何やらショックを受けたのか、マクダウエル嬢は跪いてしまった……まあ、いつまでも幼子の姿では不便だろうな。しかし、成長か……。

「……マクダウエル嬢、可能性がどれだけあるかは分かんが、もしよければ成長の手助けをしてやるうか？」

「ッ?!?!?! だでで出来るのか?!?!」

『先に言った通り、俺にはあらゆる事象に対応できる力がある……しかし、俺もそれを完全に使いこなせている訳ではない。情けない事だが、力が大きすぎて難儀しておるのだよ』

俺は瞬時に襟元にしがみ付いて来たマクダウエル嬢をあやしつつ、見識を述べた。

縫りつく彼女は外見相応可愛らしく、つい微笑ましくなってしまうが。

『だが、この世界のみならず魔界すら踏破した俺から見ても、これが一番現実的な方法だろう事は間違いない……尤も、直ぐに成果が出るとは思えんがな』

「………………。頼む、私の時を、進めてくれ」

その言葉にどれだけの思いが籠められていたのか、それは永い時を生きた俺を持ってしても分からなかった。

無論、他人の苦しみひとを理解できると思うなどおこがましいにも程があるが。

『…………。ああ、任せておけ、リトル・レディ』

ただ、その儂い姿に俺の心が奮えた事だけは確かだったようだ。

第二章↳邂逅（後書き）

ピローン

キティちゃんは【でっかくなるぞぉ〜】フラグを手に入れた！
ピローン

微笑む変態は【愛しむ存在を失う】フラグが建ってしまった！
ピローン

その他諸々のフラグが建ってしまった！

まあ、直ぐにそうなっちゃう訳ではありませんけど。

ちなみに主人公のリアンは最強であって最強ではありません。

結構万能な存在ではありませんけど。

8 / 26 ……リアンの口調を変更

第三章 大樹

SIDE チヤチヤゼロ

あー、何だか妙な事になって来やがったが……まあ、御主人の願いが叶うんなら構わねえか。

俺的にもリアンの傍たんにいと体の調子が良いし、な……理由はわかんねえけど。

で、俺達が今何処にいるかと言うと麻帆良学園都市って所に居たりする……そう、魔法使い共の巣窟だ。

もつとも、侵入してから既に30分ほど経っているんだが……未だ見付かっちゃいねえ。

「オーオー 真横ヲトオツテイルノニ全ク気付キヤシネエゼ」

「ああ、それに結界が張つてあるというのに全く反応されないとは……何処まで規格外なのだ、リアンの奴」

創設間もないという事もあってか、彼方此方で魔法使い共が飛び交つて作業している。

そんな真っ只中を歩いていくと知った時には、旦那の正気を疑ったもんだ。

まあ、目的地が中心部にあるんだから仕方ねえ事なだけだな。

どうやって誤魔化しているかと言えば、周囲の全精霊に俺らの存在を隠すように頼んだんだ……旦那が。

その結果、風の精霊が俺らの出す音を遮り、光の精霊が姿を隠し、電子の精霊が俺らを覆う事で結界に感知させなくした……本当に、出鱈目な奴だぜ。

で、それをあっさり成し遂げた旦那はと言うと……さっきから難しそうな顔で空を睨んでやがる。

『ぬう、この結界は……』

「どうしたのだ、リアン？この結界がどうかしたのか？」

『……ん？ ああ、この結界は認識障害と魔に対する若干の侵入障害が掛けられているのだが……その障害の度合いと、この力の本の状態が気になつてな』

「ふむ、確かに豪い濃度みたいだが……ああ、心に作用するという意味合いか？」

『そつだ、見たところ大半は一般人のようだからな……彼らにとつては、事を誤魔化す程度というレベルではないだろう』

あー、要するに出来の悪い操り人形になつちまうという事か。

ケケケ、全く碌な事しねえなあ正義の魔法使いつてえのはよー……まあ、今に始まつた事じゃねえけど。

「故意にやつたのか、それとも気付いていないのか……どちらにする、前提からして間違つているのは確かだな」

「アー、秘匿的ナ意味デカ？」

「ああ、そもそも己らの土台がしつかりしとらんと言つのに手を広げすぎなんだ……どうでもいい事だが、な。それはともかく、力の本とは？」

『ああ、それはあの大樹……世間では世界樹もしくは『しんぼく・ほんとう神木・蟠桃』なんて呼ばれているみたいだが……から賄われているようだ。それ自体はどうでもいいのだが、以前は感じられた大樹独自の結界が無いのが気になる』

旦那が言うには、あの大樹には元々独自の認識障害が備わっていたらしい……己のみを覆う程度の物が。

しかし、今はそれが全く感じられないとの事……その証拠に、以前ならその結界を乗り越えないと世界樹そのものが見えなかつたそう
だ。

「それは……この都市を覆っている結界がそれに当たるのではないのか？」

『いや、大樹の結界はこんな禍々しい物ではなかった……もっと清涼で自然な感じがした』

「ふうむ」

『それに……俺が此処まで近づいたのにも拘らず、向こうから声がかからないのも可笑的い』

「……は？」

どうにも旦那はあの太樹と念話で会話出来るらしい、何処まで出鱈目なんだか。

御主人も改めて頭痛がしてきたみたいで、頭を抱えてやがる……まあ、旦那に会ってからのというもの、今までの常識が引つ繰り返されつ放しだからな。

何はともあれ、まずは確認しようという事で太樹の許へと近づいていった。

S I D E O U T

「オー、デケエナンテモンジャネエナー」

「これが世界樹、なんて存在感だ……それで、どうなのだ？」

チヤチヤゼロとエヴァンジェリンが見詰める先で、リアンは一人太樹の幹に手を当て内を探っていた。

しかし、幾ら呼びかけようと反応は返って来ず……逆に、内部の異変に気づく。

『……これは、なんて事だ』

「ど、どうしたんだ？」

『どうやら大樹はこの結界のせいで異変が起きているようだ、それもかなり洒落にならん規模で』

「異変？」

『ああ、本来大樹が纏っていた結界は精霊の出入りを阻害するような物ではなかったのだ。しかし、今この地を覆っている結界は少なからず遮断してしまう性質がある……その結果、常時外に放出される筈の力が内に溜まってしまっている』

リアンが大樹の内部に感じた力とは、魔素であった。

「魔素？ 私が有しているという物と同じ物が？」

『ああ、どういう過程でこうなったのかは解らないが……これでは大樹の精が話しかけてこない訳だ』

「アン？ ドウシテダ？」

『今、大樹の精は内に溜まってしまった魔素が内部で癒着しないよう、剥離の作業に追われている様なのだ』

リアンは言う。

魔素とは繋ぎ止める力・停滞させる性質以外に、変質させる力も有すると。

その魔素が内に溜まり、大樹と融合してしまうと大樹の在り様が変わってしまう為非常に危険なのだ。

『どうやら現在大樹を中心に、周囲に魔素を排出する為の道を創っている最中のようなが……このままでは大樹の精の寿命が磨り減ってしまうな』

「……それは、大樹が枯れるという事か？」

『最悪は、な……無論、俺が居る以上そんな事はさせないが』

リアンはそう言うと、大樹の幹へと手を当てエヴァを振り返った。

『悪いが、少し中で看病をしてくる……それほど時間は掛けないから、待っていてくれ』

「……は？ って、ちょ」

エヴァが呆け、待ったをかける暇もなく……リアンは大樹の中へと埋もれていく。

「……旦那ハモウ何デモアリダナ」

一人と一体だけが残されたその場に、何かを諦め達観したような声が響いた。

約十分後、リアンは埋もれていった時の逆再生のような感じで戻ってきた……その手には形容しがたい何かを抱えながら。

「リアン！ ……何だ、その繭のような物は？ ……まさか、それが」

『ああ、これが大樹の中に溜まっていた魔素の塊だ……かなり圧縮してあるが、な』

「こ、こんな物が私の中にもあるのか?!」

見た目のおぞましさに、つい鳥肌を立ててしまうエヴァ。

そんなエヴァに苦笑しながらも、リアンはあえてそれに答えなかった。

『……どうだ、大樹の精よ?』

汝、心より感謝する

『ふむ……調子は取り戻したようだが、結果は戻らんか』

『……どうした？』

黙ってしまった大樹の精に訝しむリアン。

その様子を見ていたエヴァ達もリアンに近づき、大樹を見上げると……辺りが一変した。

『っ?! ……これは？』

「……この场景は、もしかや大樹の記憶か？」

そう、辺りには先ほどまでの学園都市風景ではなく……嘗て、深い森に覆われていた時の场景が広がっていた。

そして、その场景はその地に魔法使い達がやってくる事で急激に変化していく……まるで塗り潰すかのように。

「……酷いものだな、こうも容易く自然を駆逐するとは」

『……なるほど、そういう事か』

「? 何か、解ったのか？」

『何故、大樹の境界が無くなったか……それは、周囲に茂っていた眷属の木々を伐採され、調和を乱されたからなのだな』

そしてもう一つ、眷属たる木々が伐採された事で、精製される魔素の濃度と自然へと溶け込む排出量の関係が崩れたという事。

これは大樹のみならず、この地に住むようになった人間にも影響を及ぼす問題だ。

何せ、大樹すら蝕む濃度の魔素が周囲に放出されていたかもしれないのだ……只では済むまい。

「……なんともお粗末な物だな。しかも、その危険性は未だ健在と

「というのがまた」

「旦那ガ取り出サナイト、ブチマケルシカネエモンナ……コレカラドウナル事ヤラ」

『……いや、可能かどうかは分からんが結界の修復を試みてみようと思う』

リアンは大樹を見上げつつ、視線を横に向け麻帆良を包む結界を見つめる……そこに些かの険を宿しながら。

「可能なのか？ ……いや、可能だとしても魔法使い共にはれないか？」

『バレはするだろうが、どうにも出来ないようにするさ……それに丁度いいし、な』

「？」

リアンはエヴァを見つめると、ニヤリと笑った。

『約束しただろう？ 時を進める、と……丁度目の前に、都合のいい環境があるからな有効活用させてもらう』

「……っ、リアン」

『まあ、とは言え……暫らくは大樹の中に籠る事になるだろうから、チャチャゼロは暇を持て余す事になるだろうよ』

「ウゲ?! ツテ事八、俺ラモコン中二入ルノカ!？」

『大体、一世紀近くな』

「マジカヨ ツ?!」

嘆きの悲鳴を上げるチャチャゼロを宥めつつ、リアンは大樹を見上げる。

『そういう訳だから、暫らく厄介になる……いいよな?』

汝、我が盟友故に隔てる物なし

大樹の精の念と共に、光に包まれるリアン達。

リアンはやや緊張しているようなエヴァと項垂れているチャチャゼ
口の手を取り、溶け込むように大樹の中へと消えていった。

第三章↳大樹（後書き）

リアン、原作の要素を破壊するの巻

8 / 26 …… 修正

第四章　幻想

△ソドウス・マギクス

魔法世界、それは現実世界と異なる位相に存在する幻想世界である。火星を触媒に誕生した幻想世界の起源は紀元前にまで遡るらしい。そんな魔法世界だが、現在は大規模な戦争が展開されていた。後に『大分裂戦争』と呼ばれるそれは、東のヘラス帝国と西のメゼンブリーナ連合によって開かれたものである。

「……ふむ、大分押されているようだな」

「ツートモ数バカリノ烏合ノ衆ダゼ、御主人」

「馬鹿者、その数が洒落にならないか………どうするのだ、リアン」

辺りに魔法艦隊や鬼神兵が飛び交う中、リアン達は静かに森に潜んでいた。

旧世界において約80年近く大樹の中に潜んでいた彼らだったが、リアンが精霊より受け取った情報を基に此方へと出向いたのだ。

『無論、先を急ぐさ………その為に出向いたのだから』

リアンは大樹に籠っている最中も、情報収集は怠らなかつた。

引き籠もっていたにも拘らず、どうしてもそのような事が出来たかと言うと………大樹の内にあるゲートの開閉と共に流れ込んでくる、向こう側の精霊に尋ねていたのだ。

その結果、戦争の激化と『黄昏の姫御子』の存在を知り………また、それが嘗て感じた存在と連なる者であるという事も知った。

そして、その時分には大樹の境界も甦っており………麻帆良を包む世界の認識阻害レベルも大幅に下げる事が出来ていた。

もつとも、大樹に魔素が蓄積していく事は改善出来なかつたが。

『む、どうやらあそこが目的地のようだな』

「そのようだな……ところで、助けるのはいいがその後はどうするのだ？」

『どうもしないさ、キティと違って向こうは家族がいるから……まあ、彼女がそれを望むなら話は別だが』

「……そうか」

エヴァにとってリアンの考え方は眩しかった。

自分の目的・欲望・理想の為に、他人の犠牲を厭わぬ自分とは違つと……そして、そんな彼が自身を求めてくれる事が心地よくもあつた。

ちなみに、現在リアンはエヴァの事をキティと呼んでいる。

彼女が彼のみ許す呼称として、そう呼んでくれるように頼んだのだ。

……チャチャゼロなどは主のでれっぷりに些か戦慄していたが。

『キティ、俺が塔の周りを分厚い石壁で覆うから……派手にやってくれ』

「……ふ、派手にだな？」

『ああ、精霊にもアシストするように頼んでおくから』

「分かった、ダーク・エヴァンジェル闇の福音』の名に相応しい魔法で魅せてやるう！」

艶のある笑みを浮かべるエヴァに微笑み返しつつ、リアンは塔の真上へと陣取った。

それを近づきつつあった魔法使いが気付き、魔法を放ってくる！

ウエニアント・スピート
ヨウイス・テンベスター
来れ雷精 風の精！！
雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐
雷の暴風！！！！

ドン！！！！

『無駄だ……精霊は我が敵に非ず、故に汝が法は我が前に消え行く』
荒れ狂う雷の嵐は、しかしリアンに届かず……まるで、解けるように消えていった。

「なっ?! ま、魔法が!?!」

『さあ、大地に根付く石の精よ……我が呼びかけに応え、かの者を護る絶壁となれ!!!』

キンッ!

ズゴゴゴゴゴゴッ!!!!

リアンの呼び掛けに、空気が一瞬震えると……次の瞬間、巨大な石の壁がせり上がってきた!

それはそれまで放たれていた精霊砲を容易く弾き、天高く聳え立つた。

ちなみに壁は塔を覆う円柱状に展開されている。

それを見たエヴァは一瞬呆気に囚われるも、次の瞬間には喉で笑った。

「……くっくくく、流石リアンだ! 私も負けてられんな、チャチャゼロ! 私をしつかり護れよ!」

「アイサー、御主人!」

「いくぞ! リク・ラク ラ・ラック ライラック! ト・シユンボライオン 契約に従い

ダイヤ・コネット・セキユスタリネ・パズビザネ・テ・タイオーニオン 我に従え エレボス 氷の女王 来れ とこしえの やみ! ハイオーニエ・ク えいえんのひ リュスタレ ようが!!」

エヴァが壁の向こう側に目標を定め、呪文を唱えると……それに呼

応ずるかのように、幾多の精霊が集い始める。

それは彼女が想像していたよりも、遙かに強大な力を感じさせた。

「なるほど、これが精霊の加護か……素晴らしい」

ギシィー！！

空気が軋みを挙げ、鬼神兵と魔法艦隊が次々と凍りついていく様は
圧巻としか言えなかった……ハツキリ言って、200フィート以上
は四方に及んでいるだろう。

幸いというべきか、惜しいと言っべきか……魔法使い部隊は緊急回
避でその場を離脱している。

まあ、周囲の環境変化ゆえに早々戻っては来られないであろうが。
そんな中、エヴァの目がある存在を捉えた。

「(む……アレは?)」

もっとも直ぐに興味を無くし、詠唱を再開したが。

「(まあ、どうでもよいか)………パーサイス 全ての ソーサイス 命ある者に バラクセノース・フイ 妙なる氷牢
ラケスクリュスタリナー・ホイトシモ アタラクシア に閉じよ 其は 安らぎ也」

エヴァは見遣る、眼前に築かれた白銀の世界を。

そして思う、以前の自分ならばこの後どうしたか。

「まあ、女子供ではないとは言え、不埒な輩の軀で埋め尽くす事も
ないか……感謝しろよ、馬鹿者共………コスミケー・クリュスタロビキア “こおるせかい”」

キィィィィィィィン！！

甲高い音が鳴ると同時に、石の壁の向こうは氷の世界に閉じ込められた。

塔内部では事態を掴めない魔法使い達が混乱に陥っていた。ただ一人、『黄昏の姫御子』のみが静かに虚空を見ながら佇んでいる。

……と、その前に一人の男が降り立った。
リアンである。

「……………」

「な、なんだ貴様?! 何処から入ってきた!?!」

『ふん、態々敵を追い払ったっていうのに酷い言い草だな……目の前の壁が見えんのか?』

「なっ?! こ、これは貴様がつ?!」

喚く魔法使い達を他所に置き、リアンは『黄昏の姫御子』を繋いでいる鎖を取り払い、口許の血を拭う。

それに対して更に煩く喚く者達を、一睨みして黙らせるリアン。

『俺の名はリアン・E・S・グランタムール、リアンと呼んでくれ……お嬢ちゃんの名は?』

「……………なまえ? ……アスナ、アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア」

『っ……………ふむ、ではアスナと。もう、敵は追い払ったからゆっくり休みな』

「……………もう、いいの?」

『ああ、あったかいご飯食べてあったかい風呂入ってあったかいベツドで眠りな』

アスナと視線を合わせて言い聞かせながらも、周りにいる者達にのみ重圧を掛けていくリアン。
もっともリアンとて自分が此処を離れた後、アスナがそれにより付けるとは露ほども思っていない……それでも、言わずにはいられなかった。

『今は、お別れだ……またな、アスナ』
「……………うん」

無表情ながら、しっかりと頷いたアスナに微笑むリアン。
立ち去る彼の後姿を、アスナはただ見送るのであった。

S I D E ナギ

俺の名はナギ・スプリングフィールド。

またの名を千サウザンド・マスターの呪文の男、最強の魔法使いだ。

俺は今、自分のパーティを引き連れて王都オステイアへと急行していた。

俺達は魔法世界で起こった戦争を止めるべく、連合側に付き各地を転戦してきた。

そんな中、ヘラス帝国が王都オステイアへと侵攻。

対するウエスペリタイア王国は『黄昏の姫御子』とか言う子供を前面に押し出し、陣地を護ろうとしている。

俺はそれが気に入らず、それを阻止する為に現地へと向かっているという訳だ。

「見えてきましたね、あそこが王国側の最前線のようです……そして、あそこにいるのが」

「『黄昏の姫御子』って訳か！ しかし、その子はまだ小さくて王

族だろ?!」

「歴史と伝統だけが売りの小国ですから、他に手はないのでしょ
う……あ、それとその少女ですが見た目通りの年齢とは限りませ
んよ」

そんな事、関係あるか!

「むっ? いけませんっ! どうやら精霊砲が効かない事に業を煮
やしたのか、物理的に襲い始めたようです!」

「なにい?! まだ結構距離があるぞ!? 詠春! 斬撃をぶつ放
せ!」

「無茶言っな?! どんだけ距離があると思っっているんだ!? こ
ういう時はお前等魔法使いの出番だろうがっ!」

「チッ」

「冷静になれ、ナギ……間に合うと信じる」

馬鹿野郎っ、信じて救われるぐらいなら世話ねえだろうがっ!

俺達が何しに來ていると思っつてやがる!?

俺は思わず、詠春を罵倒した……心の内でだが。

流石にそんな事の為に、無駄な時間をとる訳にはいかんからな。

俺が必死に空を駆ける遙か先では、先を争つかのように鬼神兵が聳
え立つ塔を目指して進んでいる。

くそっ!

あそこに、あそこに居るのは分かっているってえのにつ!

俺が齒を食いしぼり、手が届かない事態に苛立っていると……突如、
塔の周囲に石の壁が出現した!?

「なっ、何だ?! アレは!?!」

驚く俺達を他所に、石の壁は呆れるほど空高くまで聳え立った。その壁は鬼神兵を、精霊砲をまったく寄せ付けず、ビクともしなかった……なんて強度だ!?!

「アレは地系の魔法なのでしょう。私も見た事のないものですよですが」

「アルも知らない魔法か……むっ、どうやらアレだけではないようだぞ?」

詠春がアルも知らないと言う事実には驚く中、壁の周囲に巨大な魔法陣が浮かび上がる……今度はなんだ?

「っ、アレはまさか氷系最大呪文?! っ!?!」

驚きに目を見開くアル。

俺が問いかけるより先に、その口からとんでもない言葉が洩れた。

「ま、まさか……アレはエヴァンジェリン?」

エヴァンジェリン?

っつて、闇の福音の事か?!

俺は驚き、アルの視線の先を凝視すると……そこには悠然と空に浮かびながら、明瞭に詠唱する……幼女がいた。

「……は? アレが?」

「……ふう、どうやら間違いなく彼女のようですね。ええ、アレが闇の福音です」

「信じられん、あのような少女が……」

魔王と呼ばれる存在の意外な正体に呆気に囚われる中、幼女の呪文が完成する！

「なんつー広範囲、しかも何て威力だ!？」

「むっ、以前より遥かに強力になっていますね………どういう事でしょう? いえ、そんな事より何故彼女が」

眼前で展開する魔法の威力に度胆を抜かされる俺だったが、漸く目的地に近づきつつあった。

「どうやら、向こうも此方に気づいているようだな」

「ナギ、とりあえず私が話しかけますから余計な茶々は入れないで下さいね?」

「……分かったよ」

さて、噂に名高い悪の魔法使いと御対面といくか。

S I D E O U T

第四章↳幻想（後書き）

8 / 27 …… 大幅修正

第五章 姫君

SIDE エヴァンジェリン

魔法を放ち白銀の世界を構築した私は、現在三人の人間と相對していた……その内一人は、人間かどうか怪しい奴だが。

「ほう、珍しい奴がいるではないか……何をしに来たのだ、アルビレオ」

「やはりエヴァンジェリン、貴女でしたか」

奴の名はアルビレオ・イマ、古くより知り合いの変態だ。

「変態とは酷いですね」

「心を読むな！ ……いや、自覚があるだけか」

軽い挨拶代わりのやり取りの後、奴から此処を訪れた目的を聞くと、やはりと言っか……『黄昏の姫御子』を護る為だと言っ。

「ふん、態々ご苦労な事だな……もっとも、それも見ての通り無駄になつた訳だが」

「それです、何故貴女が『黄昏の姫御子』を護るような事を？それにこの石の壁は一体？」

くっくくく、やはり奴にもこの壁の原理は分らんか……いい気味だ。

「何故、か……私にとって、それが当然の行動だからとしか言えんな。それとも何だ？ 悪の魔法使いが他人を護るのは気に入らんか？」

「い、いえ、そういう事では」
「まあ、どうでもいいが……ん？」

ついつい反応が面白くてアルの奴を弄くっていたが、リアンと繋がったパスが疼くのを感じる……どうやらこっちに来るようだな。

ああ、そうそう。

パスと言っても、契約の類を結んだ訳ではないぞ？

リアンが私に繋げたパスはあくまで私の内にある魔素を薄める為の物で、魔法的な物ではなく霊的な物だそうだ。

まあ、その効果が表れるのもう少し先のようにだが……後、3〜4年といったところか？

それにどうせ契約を結ぶなら大きくなつてからの方が好いし、な。

「どうかしましたか？」

「いいや、ただ私のパートナーが戻ってくるようなのでな」

「……は？」

呆けるアルを他所に、リアンが壁をすり抜けてやって来た……中々、ホラーなものだな。

「……なっ?!」「」

『む？ キティ、彼らは？』

「おかえり、リアン……こいつらはアスナ姫を護りにきた連中だよ、無駄足になつた訳だが」

『ほう？ そのような奴らもいたのだな。念話で失礼……初めまして、俺の名はリアン・E・S・グラントムール……リアンと呼ばばいい、君達は？』

「あ、はい。私はアルビレオ・イマと申します……此方にいるのは」
「俺の名はナギ・スプリングフィールドだ！」

「私の名は青山詠春」

ほう、ナギと言えば最近連合で噂になってる奴だったな……確か『紅き翼』とかいう、こいつがそうなのか。それに青山と言えば、神鳴流の……なるほど、劣勢の連合にとって切り札となりうる存在だな。

「ところで何故念話なのですか？」

『俺は声帯が普通のそれと違うのでな、悪いが念話で我慢してくれ……それと、アスナなら塔の中にいるぞ』

「おう、そうか！ あんたのお陰で助かったぜ」

『気にするな、不遇な彼女を放っておけなかったただだからな。ああ、そうだ……もし、君達に王家と掛け合う機会があるなら、彼女の生活環境改善を訴えておいてくれ』

「……そんなにヒデエ扱いだったのか？」

『それは現状の扱いを見れば明らかであろう？』

そう言いながら、石の壁を地中に戻していくリアン……後始末が楽な魔法だな。

塔の方を見れば、アスナ姫と思われる幼子が此方を見上げていた……その手首に鎖をぶら下げながら。

「……なるほど、確かにな。ふざけた連中だ」

「まあ、可能かどうかは分かりませんが掛け合ってはみます……ところで、先ほどの壁は貴方が？」

『ん？ ああ、そうだが……アレは俺にしか出来ん魔法だぞ？ あと、原理は秘密だ』

あはははは、アルの奴あれは絶対悔しがっているな

『さて、それではお暇させてもらおう』

「なあ、あんたら！俺達と一緒に行動しねえか？」

「お、おい、ナギ！？」

ふむ、私を闇の福音と知って尚、このように接するとは……面白い奴だ。

詠春とか言う奴も止めようとしているが、嫌悪の類は見受けられないな。

『悪いが、俺達は此方の世界を自由に見て回りたいのでな……誘ってくれるのは嬉しいが、遠慮させてもらおう』

「何だよ、つれねえなー」

『ふ、また会う事もあるう……では、な』

「さらばだ」

「ええ、また会いましょう」

こうして、私達と『紅き翼』の邂逅は終わった。

さて、次に奴らと会うのは何時になるかな？

S I D E O U T

S I D E ナギ

結局俺達はリアン達と別れ、姫子ちゃんと面会した後再び各地を転戦する事となった。

そんな中、俺の師匠となるゼクトと出会ったり、帝国からの刺客ジヤック・ラカンと戦ったり、いつの間にかラカンが仲間になったり……まあ、色々あったな。

んで、グレートブリッジ奪還作戦での大活躍……この戦いで、敵味方係わらず有名になった。

「ふう、しっかし……追っかけだけは勘弁して欲しいぜ、碌に休め

やしねえ」

「ふふふ、人気者は辛いですね、ナギ。ラカンもファンが大勢いますが、あちらは節度を守る方が大半ですからね……静かなものです」
「ちえ、向こうの方が大人だって言うのかよ」

「さあ？ ふふふ」

そんな感じに弄られつつ、仲間も増え……時は過ぎていった。

そしてある日、最近仲間となったガトウに呼び出されて本国首都に赴いた俺達は一つの出会いを果たす事となる。

「何だよ、ガトウ……態々本国首都まで呼び出してさ」

「会って欲しい人がいる、協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「っ、マクギル元老院議員！ 貴方が？」

「いや、わしちゃう……主賓はあちらのお方だ」

そういつて後ろを振り返ったマクギル議員の視線の先に、彼女は現れた。

「ウエスペリタティア王国のアリカ王女……このお方が君達を指名したのだ、この戦争を終わらせる為にな」

帝国と連合、二つの巨大勢力に挿まれて翻弄され続けてきた王国の王女……アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。
彼女が俺達に接触してきたのは、ある意味当然の事だったのかもしれない。

片や自ら調停役として戦争を終わらせようと奔走している王女、片

や戦争を終わらせる為前線で活躍している俺達……利害は一致しているからな。

まあ、おっかねえ女だけど……中々胆の据わった姫さんだぜ。

そんな俺達と姫さんが主に探りを入れているのが『完全なる世界』という秘密結社。

帝国や連合のみならず、オスティアの内部にまでシンパがいるって言うんだから始末に負えねえ……戦争したいんだったら、自分達だけですいているってえの！

「まるで世界全てが彼らによって操られているかのようですよ……やはりこれは、思っていた以上に根が深い」

そんなアルの呟きを証明するかのように、依然として奴らの真の目的とやらは判らなかつた。

で、そんな奴らの懐を探る事になったんだが……どういつ訳か俺はそれに参加出来ず、姫さんと一緒にいるのが通例になっていた。

まあ、つまんなくはなかつたけどよ……度々、頬に紅葉を付けられるのには参ったぜ。

そして……。

いつもの通り、姫さんと休暇を共にしていた時の事だ。

突如、俺達は襲撃を受けた。

しかも、街中だって言うのに、デカイ魔法をぶちかましやがったらしく辺りは騒然としてやがる。

ズズンッ

「大丈夫か、姫さん？」
「うむ」

何とか姫さんを抱えてその場を脱出した俺は、現場から遠ざかりつつある反応に目を向ける。

「ちっ、本当に碌でもない奴らだぜ！」

「やはり、今は……」

「ああ、奴らの刺客だろ……アンタか俺か、どっちを狙ったかまでは知らねえけどな。けど、ようやく尻尾を出したな……逃がさねえぞ！ 姫さんは皆の所に帰っている、俺は奴らの本拠地をぶっ潰しに……ぐえっ」

「私も行こう」

「ああ?!」

「此処に私を一人残して行く方が、危険だと判らぬか愚か者が……それに私の魔法は役に立つぞ、忘れたか鳥頭」

「……………。ハッ、いいぜ姫さん！ ついてきな!!」

澄ました顔でとんでもない事を言い出すもんだから、正に俺にとっちやビツクリ箱みたいな女だ。

で、結局それを気に入った俺は姫さんと一緒に敵の本拠地（下部組織の拠点だったけど、な）をぶっ潰しにいった。

……………んだが。

そこで見たのは、崩れ落ちる廃墟同然の建物と無数の呻き声だった。

「おいおい、こりやどういうこった？ ツ！ 誰だ!？」

「ヨー、コンナトコロデランデブーカ？ ワリイガ観客八全部俺ガ食ツチマツタゼ？」

「お前は、確かチャチャゼロ？」

「オー、チャチャゼロ様ダゼ。ソッチハオステイアノ才姫様ダロ？」

ヤルジヤネエカ、色男」

「……………何じゃ、この人形は？」

流石の姫さんも想像外の事態に困惑気味のようだった。

んで、紹介した訳だが……………その正体を知ると、姫さんは彼女（？）の小さな手を取る。

姫さん？

「御主がエヴァンジェリン殿の従者だったか、先日はよくぞアスナを護りきってくれた……………心より、感謝する」

ハッ、まさか礼を言うとはな。

魔法世界の奴らだったら、まず恐怖を抱く代名詞の従者だって言うのに……………大した女だぜ。

「ヨセヨ、俺ガヤツタワケジヤネエ……………礼ライウナラ、御主人ト旦那ニイナ」

流石のチャチャゼロも若干照れているようだ。

「って、そう言えば何でこんな所に居たんだ？」

「アン？ 何デモ何モ、俺八情報収集シテイタダケダゼ……………コウイウナ、ホレ」

渡された手紙にはとんでもない情報、MM元老院の執政官コンスルがテロに
関与しているという物だった。

「こいつはっ?!」

「旦那ヤ御主人ハアンマリ派手ニ動ケナイカラナ、俺ガコウシテ怪シイトコロヲ探ツテイルトイウワケダ……………最近ノ御主人ハスツカリ

大人シイカラナ、中タイイストレス解消ニナツテイルゼ」

大小のナイフをジャグリングしながら、楽しくそう言う彼女(?)は何処か煤けていた……何か、詠春と被る所があるな?

そうして帰り際、思い掛けない情報が彼女(?)から齎された。

「オツ、ソウダッタ。王女サンヨ、アンタノトコノ国王……アレ、奴ラニ関与シテイルゼ」

「っ?!」

「アスナ姫ノ安全ヲ第一ニツテ、旦那ガイウモンデナ……ネンイリニ調べタ結果ダ」

驚く姫さんに証拠となる品を渡した彼女(?)は、そのまま帰っていった。

んで、仲間の許に帰ったら詠春に怒られた……ちえ、せつかく情報も手に入れたって言うのに。

……まあ、その後自分達が反逆者になるなんて、この時は思っても見なかったけどな。

S I D E O U T

第五章 姫君（後書き）

8 / 27 …… 大幅修正

第六章 決戦

SIDE リアン

俺達は紅き翼の面々と別れてから、各地を転々としていた。

途中、キティが情報収集を理由にチャチャゼロを送り出した事もあったが……まあ、些細な事だろう。

現在はまたもやアスナの危機と知り、戦場へと出向いているところだ。

もつとも、今回は精霊の情報も不確かな所があり出遅れたようだが。

『……どうやら、アスナは『始まりの魔法使い』に捕縛されてしまったようだな』

「なるほど、規格外の傍故に精霊達の能力も減衰したという訳か…

…間に合うのか？」

『間に合わせるさ、これ以上彼女が苦しむ必要など無いからな』

その対処の準備もある程度は出来ているから、後は『紅き翼』とアリカ女王の動き次第だ。

まあ、アリカ女王に関しては不安要素があるが……それも巡り合わせ次第だな。

ちなみに、俺達が今までしてきた事は世界を回って見聞を深める……と言う、これまでと変わらないものであったが、そこに現地人の治療及び手助けという要素が加わっていた。

何の事はない、ただ往く先々で怪我人や困っている者達が大勢居たというだけの話だった……戦時だから仕方ない事か。

そんな行為を繰り返していたからか、何時しか俺は『星の癒し手』と呼ばれるようになっていた。

キティは特に呼び名はついていない、ただ俺の傍に居ただけだからな……もつとも、闇の福音の姿は知られていない為か、アイドル的

な存在になりつつあるが。

「オー、中々壮大な眺メジャネエカ」

「ふむ、やはり召喚魔や自動人形の多さゆえに劣勢のようだな……見たところ、例の物は使われていないようだが」

「後に控えている物の事を思えば、そこまでする必要なしと思っているのだろう……さて、出遅れる訳にもいかないから急ぐぞ！」

「うむ、では予定通り」

そういつて、俺とキティ達は帝国と連合そしてアリアドネーの混成部隊が戦っている場へと躍り出る。

当然、闖入者の俺達は殺気立った彼らの視線に晒されるが、部隊の中には俺達を知る者もいたらしくそれほど混乱は起きなかった。

「貴方は……確か『星の癒し手』のリアン殿？」

「知人であるナギ達の参戦を聞き、助太刀に来た……受け入れて貰えるかな？」

「そ、それは勿論です！ リアン殿の優れた魔法が加わって貰えたら、劣勢の我らも持ち直すでしょう！」

「すまんが、俺はナギ達の支援に行く……こっちはキティが受け持つ。安心しろ、キティは俺の弟子だから……ではキティ、程々にな」

「うむ、任せておけ師匠」

呆けている部隊長を他所に、俺達は行動を開始した。

俺はアスナの居る『墓守り人の宮殿』内部へ、キティ達は苦戦している外部の応援に。

待っているよ、アスナ。

S I D E O U T

S I D E エヴァンジェリン

リアンが宮殿へと向かった後、部隊の長が控えめにどうするのか訊ねてきたので実際行動する事で示す事にした……こういう奴らは実力を示せば大人しくなるだろうからな。

「何、そう心配するな……師匠の名に傷をつける訳にはいかんからな。チャチャゼロ、お前は自動人形の編成を崩せ」

「アイサー！」

「私は超大型の召喚魔を仕留める！」

さあ、今度は手加減無し of 全力だ！

精霊達よ、我が友よ！

私に力を貸してくれ！！

S I D E O U T

エヴァ達が外で活躍している頃、ナギ達はフェイト達相手に奮戦していた。

ラカンが炎を纏う大男を、詠春が雷を迸らせる軽装の男を、ゼクトが水を操る細身の男を、アルビレオが巨大な召喚魔を使役する仮面の男を……そして、ナギが地を支配する男を。

実力はほぼ拮抗していたが、勢いの乗ったナギ達は次第に圧倒していった……そして。

「見事、理不尽なまでの強さだ……」

「はあ、はあ……黄昏の姫御子は何処だ、消える前に吐け」

相手を下したナギがアスナの行方を問い掛けるが……。

「フ、フフフ……まさか、君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん、だと？」

バスッ！！！！

その言葉に怪訝な顔をした直後、ナギは敵諸共謎の攻撃に貫かれていた。

「ッ！？」

「ナ、ナギイツ！！！！」

倒れ伏すナギへと駆け寄る面々、その時ラカンが不穏な気配に気付く！

「誰だっ！？」

現れるのは揺らめく黒い影。

それに怖気を感じたのであろう、ゼクトが前面へと出て片手を翳す。

「いかんつ、クラティステール・アイギス最強防護！！！！」

展開される複数の重複した魔法陣、そして唐突に目の前に現れる魔力の砲撃……それは容易く防壁を砕き、援護に回ったラカンの両腕すらも消し飛ばした。

そして、倒れ伏すナギへと迫った瞬間……！！

『ふう、無粋な攻撃だな』

巨大で凶悪な砲撃はその場に現れた男の片手で受け止められ、霧散

させられた……言うまでもなく、リアンである。

「あ、貴方は……ッ?!」

「リアン殿?!」

ナギ同様、砲撃に晒されなかったアルビレオと詠春が驚きの声を挙げる。

アルビレオなどは眼前の敵に対する驚きすら忘れて、だ。

『ふ、魔法世界に名を馳せる『紅き翼』の面々が酷い様ではないか……精霊よ、癒しを』

そんな彼らに笑いかけながら、消え行く影の存在に視線すら向けず癒しの波動を放った。

辺りに現れた光の煌きは、瞬く間にナギ達を癒した……流石にラカンの腕は無理なようだったが。

「おお?! スゲエ!?!」

「むう、この魔法は!?!」

その魔法の威力を始めて目の当たりにしたラカンとゼクトは揃って目を見開いた。

「へっ、相変わらずいい所を持っていくな……リアン!」

『何、今回もまた必然さ……護るべき存在であるアスナが囚われたようなので、な』

「姫子ちゃんか……アンタの事だ、どうせ居場所は掴んでいるのだろっ?」

『無論だ……当初はそっちに急行するつもりだったのだが、あまりにも危険な気配が此方でしたのでな』

「なら、そつちは任せるぜ？」

ナギの言葉にリアンは彼の顔をジッと見つめるが、直ぐに結論を出すと背中を向けた。

『……ふむ、お前なら何とかするか』

「しかし、ナギ……アレは我らが東になっても勝てるかどうか。いえ、生き残れるかどうかも」

「馬鹿か、俺達がどうにかしなかつたら世界が消滅するかもしれないんだぞ？」

「そうだの、例え無理でも往くしかあるまい……まあ、ワシより年寄りのアルビレオは此処に残っていてもよいぞ？ああ、両腕のないジャックもな」

「へっ！ ナギが往くつてのに、ライバルたるオレが往かないなんて選択肢があるかよっ！ 腕がなけりゃ、生やせばいいんだしな！」

「そんな事が出来るのはお前だけだ……ふう、私の剣が届くかどうか判らんが、試してみるのもよいか」

そんな面々のやり取りを聞きつつ、リアンは呟く。

『まあ、どの道既に世界を無に帰す術式は完成したようだからな……

…アレを軽減出来るのはオレだけだ、往かない訳にはいかない』

「っ、そうですか……判りました、此方は何とかしましょう」

「あつちは俺に任せな！ だから、あの子の事は頼んだぞ？」

『言われずとも』

そうしてリアンとナギ達はそれぞれの目的地へと向かうのであった。

SIDE リアン

現在俺は囚われの身となっているアスナの眼前に居る。

既に術式は完了している為か、見張りなどはおらず一人アスナが拘束されていた……見たところ、意識はないようだな。

『ふむ、やはり術式を止める事は不可能だな……空間に作用する精霊も、時を支配できる精霊も、この反魔法場ではほぼ無力と化すかな……アレを遣えば打ち消す事も出来るだろうが、その場合アスナが無事ではすまんし』

まあ、考えるまでもないな。

恩を売る為にも、精々旨く立ち回って魅せよう……全ては俺と身内の平穩の為に。

俺はアスナの拘束を解くと、発動しつつある術式と彼女を分断しその効力を薄めにかかった。

『流石に、精霊と相反する力だ……やはり、俺でもあまり抑え切れんか』

ある程度薄めた瞬間、これ以上触れるなとばかりに弾かれてしまったが……まあ、この程度なら何とか他の奴らでも抑えられるだろう。俺はそう判断すると、静かにその場から立ち去った……その時である。

ズズン……

ズン、ズズン……

ズドドドドツ……ドンツ！！！！

地響きが辺りに響き渡った。

『ふっ、どうやら何とかしたみたいだな……とは言え、少しは問題

も残ったか』

まあ、それは彼らの問題だ……俺が関与する事ではないか。
俺は心中でそう呟くと、広がりだした反魔法場から逃れる為にその
場を後にした。

S I D E O U T

第六章へ決戦（後書き）

8 / 27 大幅修正

第七章 災厄

SIDE アリカ

世界が無に帰る反魔法場が徐々に広まりつつある。

もつとも、アルビレオ・イマからの報告で大分軽減されているらしい……そして、それを実行したのがかの『星の癒し手』だとも。

おそらく、かの者ならばあそこに囚われていたであろうアスナも救ってくれている筈……ならば、この情報はなんとしてでも漏洩させる訳にはいくまい。

「全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め！ 魔導兵団、大規模反転封印術式展開……全魔法世界の興廃、この一戦にあり！ 各員全力を尽くせ、後はないぞ！」

「……ハッ！」「……」

「よろしいですね？ ……女王陛下」

ガトウが聞いてくる……とは言え、此処で少しでも平静を晒す訳にはいかない。

故に、唇を噛み締め無念を顕わにする。

「よろしいハズが……ないッ」

精々、災厄の元凶を演じてみせようではないか……それが、彼らを巻き込む私の罰だ。

どれほど咎められようと、恩人たる彼らに報いねばならんからな。

ナギ達の受勲式も終わり、私は庭園で一人佇む。

これから待ち受けるのは、国民にこの上ない苦痛を与える地獄のよ
うな現象。

既に出来る限りの準備と対応は済ませてあるが、物事に万全など
ある筈もなく。

「陛下！」

やって来たのは『紅き翼』のガトウとクルト。

「時間です、まもなく崩落の第一段階が」

「進捗状況は？」

「アスナ姫封印直後から、全艦艇全力で当たっており……現在40
%！陛下のお考えどおり、式典と称し、この離宮島に全市民を誘導
しております。情報統制により混乱もこれまでのところありません
が、崩落が始まればその限りでは……全市民の救出は困難を極める
かと……！！」

「ッ……わかった、妾も直接指揮に当たる！！」

私は状況の悪さに唇を噛み締めるが、それで状況が好転する筈もな
く……指揮を執る為はその場を離れようとした。
そんな折だ、彼女が現れたのは。

「ふむ、中々に気迫の籠った良い眼差しだな……アリカ女王陛下？」

「誰だっ?!」

現れたのは白いドレスに身を包み、此方に優雅に歩んでくる少女で
あった。

「初めまして、と言っておこうか……私はエヴァンジェリン・A・
K・マクダウエル、世に悪名高い闇の福音だ」

「っ、闇の福音?!」

「……そうか、そなたが。以前アスナを助けてくれた事、感謝する」
「なに、構わんよ……私は私の信じる者の為に力を尽くしただけだ」

何の事も無いように答えるが、私は知っている……彼女とその従者が前線を支える為、獅子奮迅の働きを魅せた事を。

そして、アスナを救ったであろう存在が『星の癒し手』であり、彼女のパートナーである事も。

「へ、陛下？ 彼女とお知り合いで？」

「うむ、私の恩人だ……それだけでなく、決戦時助太刀もしてくれた」

「なっ?! そ、そうですか」

ふむ、どうにもクルトは考えが硬すぎていかんな……私を慕ってくれるのは、純粹に嬉しいが。

「まあ、私は自分がどう思われていようと構わんよ……そんな事よりも、私はアリカ女王に好ましい一つの情報を渡そうと思ってる」

そういつて彼女は私に一枚の紙を差し出す。

それには確かに情報が書かれていた……但し、その内容は二つだが、一つは私が知りたかった事……アスナの行方。

これは例の『星の癒し手』が匿っているらしい。

既に容態は安定しており、目も覚めている様だ。

どうやら彼はアスナの存在を隠蔽すべく、色々手を打っている模様……確かにこれはありがたい。

そしてもう一つは……。

「ッ（なるほど、これが本命か……確かに、望外の情報だ）」

「陛下？」

「……どうやら『星の癒し手』殿が崩落を半分ほどに抑えてくれるようだ」

「なっ？！ そ、そのような事が！？」

「原理はよく解らんが、どうやら失われる魔力を維持する事である程度食い止められるらしい……もっとも、その大きさから全てを護る事は不可能との事だ」

「流石のリアンもそれ以上は無理と言っていた……だが、それでも好ましい事態であろう？」

「うむ、全ての民に代わり心より感謝を」

「言っただろう？ 私は私の信じる者の為に力を尽くしたと、そして私は自分がどう思われようと構わないと……だから安心しろ、その坊主」

彼女は後方に視線を向ける。

そこには些か厳しい眼差しで彼女を見つめるクルトがいた。

「私は何も要求しないし、何をする気もない……精々、リアンの手助けをするだけだ」

「い、いえ、私は別に……」

「では、な……ああ、そうだ。リアンの予測では、大体一時間ばかり崩落を緩める事が出来るそうだ……上手く立ち回れよ？」

そんな言葉を残し、彼女は去っていった。

「……よし、得難き時間を与えてくれた彼女達に報いる為にも！犠牲者など一人も出さんぞ、いいな！！」

「ハッ！！」

エヴァンジェリン、そしてまだ見ぬリアンよ……そなたらに感謝を。

S I D E O U T

1983年。

反魔法場を封印した代償に王都オステイアが未曾有の危機に晒されるも、アリカ女王の指揮の下……死傷者は0。

王都オステイアも陰ながらのリアンの活躍によって完全な崩落は免れた。

ただ、オステイアにあったゲートは閉じられる事となり……国民も狭まった領土で窮屈な思いをする事となる。

まあ、当人達はそれほど苦には思っていないようだが。

だが、そんな苦境にもめげない彼らに悲報が舞い降りる。

アリカ女王がMM元老院に逮捕され、即座に2年後の処刑が決定したのだ。

当然、オステイアの住民はそれに憤った……彼らは先頭に立って国民を救っていた事を知るが故に。

それは死傷者が出ていない事でも明らかであり、崩落が半分で済んだ結果女王の姿を目にした者も多数いたのだ。

そんなアリカの罪状は以下の通り。

「父王殺し」「オステイア周辺状況報告の虚偽改竄」「完全なる世界への関与」……そして、「闇の福音に関する情報改訂」。

そう、アリカは秘かにエヴァンジェリンを取り巻く環境を改善しようとしていたのだ。

そして、それは議事堂で断罪される時も必死に語り、押し通した。

「あの者は決して人と相容れぬ化け物などではない！ それは決戦時戦線を支え、崩落時に救援に参加した事でも明らかであろう！

その事実を以ってしても、この情報改訂を認めぬのならば……そ

の者は性根の腐った人非人じゃ！！」

このような事を大々的に言われてしまえば、幾らその発言者がどういふ者であろうと無碍にする事など出来る筈もなく……結果、申し訳ない程度ながらも魔法世界全土に情報改訂のニュースが放送された。

しかし、元老院の苦し紛れの抵抗など知らぬとばかりに情報は全世界へと浸透し、元々彼女の世話になった者達などの証明で更にしっかりと認識が変わっていった。

アリカ女王がケルベラス無限監獄に収容されてから2年の時が経過した。

この間にナギ達は各地の紛争地域を回り、傷ついた者を癒し……クルトはそんな彼をアリカ女王救うように促すも、応えられずに失望。そして、そんなクルトに接触したのがリアン達であった。

「ふふふ、以前にも増して熱血漢になっているではないか……なあ坊主」

「あ、貴女はエヴァンジェリンさん……と、貴方は？」

「俺はリアン・E・S・グラントムール、世間では『星の癒し手』なんて呼ばれている」

「あ、貴方が……その節は女王陛下に御助力頂きありがとうございます……」

「構わんよ……そんな事より、今回此処に来たのはそのアリカ女王に関する事を話す為にきた」

「……え？」

リアンは話す。

彼女にはキティの事で世話になったから、最大限の協力をすると。しかし、現時点で彼女を世間的に救うのは不可能でもあると。

「現時点ではMM元老院の屑共をどうにかするのは困難だ、物理的には充分可能だが……そのような事、あの気高き女性が納得する筈もない」

『処刑当日はナギ達も動くだろう……今は意固地になっているようだが、な。その時は俺も秘密裏に手助けする、だから今は雌伏して時を待て……いずれ、裁きの時は来る』

「し、しかし……しかしっ」

『納得など出来ないだろうが、今は力を蓄えろ……愉悦に浸る愚か共を捌くその時まで、な』

「こういう事はあのナギ達には出来ない事だ……武を誇ろうとも、知を深めよう」と

静かに諭すリアン達に、自身も意固地になっていた事を悟り姿勢を正すクルト……その瞳には確かな力が宿っていた。

「……解りました、今は時を待ちます。僕はこれから元老院に潜り込み、その実態を掌握しましょう」

『ふむ……ならば、今後とも連絡を密に持った方がいいな』

「うむ、あの老害が一度の失敗で悔い改める事などありえんだろうし……」

『……よし、では俺の友を一体付けよう』

そう言うと、リアンは己の内に宿している風の精霊を一体顕現させる。

「っ、これは……風の最上位精霊!？」

西風のゼピュロス、此処に……リアン殿、此度はどの様な御

用で

『すまないが、此方の少年の手足となつてやつてくれないか？俺の身内を作為的に貶めていた連中を裁きたいので、な』

なるほど、御依頼確かに承りました……少年よ、名はなんと
言う？

「あ……ぼ、僕はクルト・ゲーターと申します！」

では、クルトと……以後、君の助力となる事を此処に誓おう

「あ、ありがとうございます！」

礼を尽くすクルトに一つ頷くと、ゼピュロスはそよ風を残し静かに消え去った。

呆然とそれを見送るクルトを他所に、リアンは今後の事を考えて彼にある程度事を明かす事にした。

『クルトよ、彼は名を呼べば何処であろうと現れてくれるだろう…

…それよりも、一つ君に知らせておく事がある』

「何でしょうか？」

『アスナの事だ……彼女は今、俺達が匿っている』

「なっ……それは真ですか!？」

「ああ、今は私達の拠点で従者と留守番している……あと、アリカ女王もこの事は知っているぞ？」

「っ……そうですか、好かった」

『無論、この事は誰であつても秘密だぞ？彼女は未だ狙われているからな……MM元老院に、そして『完全なる世界』に』

「?!」

リアンが齎した情報に目を剥くクルト。

あのナギ達在必死の思いで倒した勢力が、まだ健在と言われたのだから当然なのだが。

『残念ながらあの組織はまだ健在だ……これから残党狩りも行われるだろうが、生き残った幹部は闇に潜み力を蓄えるであろう』

「……そんな」

『まあ、今度現れた時は私も全力で対抗するさ……アスナの為にも、な』

「だから、クルトよ……お前も力を蓄えよ、愛する女王陛下の御心を救う意味でも、な」

「なあ?!」

くつくつく、と笑うエヴァに頬を紅潮させて慌てるクルト。

場が一気に緩いものへと変わってしまった。

『まあ、何だ……各自、自身が信じる者の為に全力を尽くすとしようではないか』

強引に纏めようとするリアンであったが、彼もまた肩が震えるのを抑えられないようであった。

女王の処刑日が迫る中、この場は温かな風が祝福するかのようには舞い踊っていた。

第七章「災厄（後書き）」

次章も出来上がりました。

8/29の0時に更新します。

第八章　救出

1985年、某月……アリカ女王の処刑が執り行われる事となった。既にケルベラス渓谷には幾人者もの兵士、魔法使いが陣取っていた……それらはほぼ全てが、ヨハネと言うMM元老院の執政官の私兵である。

そんな中にクルトは一人佇んでいた。

「（……ッ、アリカ様ッ）」

これから行われるのは茶番であると解ってはいる……しかし、それでもいい気分になれよう筈がなかった。

そして、そのアリカ本人は……渓谷の一角に設けられた飛び降り台に立っていた。

「（恐怖はない……民を一人残らず救え、アスナの行方も誤魔化し通せた、またその恩人にも少なからず報いる事が出来た……意味を見出せぬまま、奪い奪われる日々を過ごしてきたが、その終着が此処だというならば、それもよい……民を救えたとは言え、困難を押し付けた事には変わりないのだからな）」

槍で追いやられずとも、一人先へと進むアリカ。

「（ただ、一つだけ心残りがあるとすれば……ナギ、そなたの顔をもう一度だけ。主と過ごした日々だけが、何故か温かだった）」

心を満たす死という名の闇も、彼女の心に宿った一点の光だけは消せはしなかった。

「（……………人の生もこの世界も、全ては儂い泡沫の夢に過ぎぬ……………かなれば、きつとこれも……………ただの悪い夢）さらばじゃ、ナギ」
「ぐっ……………アリカ、様ツ（リアン殿……………ナギ、頼みますよ?!）」

そうして墜ちて行くアリカ……………クルトはただ、それを呆然と見るしかなかった。

SIDE ナギ

俺は今、ケルベラス渓谷の谷底付近にいる。

無論、谷底には魔獣が蠢いているからその魔手が届かない壁に張り付いているのだが。

正直、かなり辛いものがある……………そりゃ、泣き言なんて言えた立場じゃねえけどさ。

そう愚痴を言い始めた時であった。

「っつと、来たな！」

空から墜ちて来るのは、俺好みの美女……………これで張り切らなきゃ嘘だろ。

何せ、ゲット出来りゃ物に出来るんだからな！

俺はやがて手が届きそうなほどにまで墜ちて来たアリカに向かって飛翔する……………魔力の強化など一切ない状態で。

「へっ、コイツはお前等の腹には勿体無い上玉だ……………一欠けらだつてやるものかよ！」

俺は何とかアリカを抱えると、魔獣の隙間をぬって地底に舞い降りる……………と、その衝撃で復帰したのか、意識の戻ったアリカが声を出す。

「……え？ ナ、ギ？ え？ 何故、主が地獄に……？」

「バーカ、アンタを助けに来たんだよ……アリカ」

「え……？ 何故じゃ？」

おい……この状況下でそう返すか、普通？

つと、流石にヤベエな……呑気に会話している暇はなさそうだった。

「答えよつ、何故じゃ、愚か者?! いくら主でも自殺行為じゃ!」

へっ、確かにこれは不味いな……足場は不安定、周りは強力な魔獣の群れ、おまけに気も魔力も使えねえと来た。けど……。

「クリアの景品がアンタなら、このスリルも悪かねえぜ!! 寧ろ大歓迎だ!!!」

「なっ、何を言うておるのじゃ!? 妾は何故かと聞いているのじゃ! 何故これほどの危険を冒してまで、妾を助ける必要がある!」

まーた、この女は……あんなだけ、俺を自分の物扱いしたくせによお。

『諦める、ナギ……それがアリカという女だ。それにお前も、人の事どうこう言えた性格じゃないだろう?』

「なっ?!」

「……え？」

突然のありえない事に、目を見開く俺……見れば、俺達の前方に一人の男が立っていた。

つて、ありゃ、リアンじゃねえか?!

「リ、リアン!? こんな所で何してやがるんだ!」

「ふ、そら見る……自分の事を棚に挙げて、そんな事をのたまうのだからな」

「ぐっ?! お、俺はただアリカを助けたかったから!」

「それならば、俺も一緒だ……キティの恩人を救うのは当然だから、な」

うぐっ!?

くそっ……口では敵いそうにねえな。

いや……この場では力も、か。

「それに、俺ならば例え此処でも力を存分に揮う事が出来るからな……万人を救う事が出来る勇者様が、ただ一人の女性を救うので手一杯なのを手助けするのも……乙なものだ」

「ア、アンタなあ……なんか性格悪くなってないか!？」

確かにこの地獄のような場所では、ありがたい救援だけども……もう少し、オブラートに包んだ言い方をして欲しいぜ。

「……そ、そなたがリアン?」

「初めまして、アリカ様……俺がリアンです。先日はうちのキティが大変世話になりました……今回の事は、それに対するささやかな恩返しですよ」

なんか、俺に言うのと口調が違わねえか?

「残念ながら、キティはこの場に来られませんでした……貴女様のご好意を万が一にでも無にする訳にはいきませんでしたから」

「……いや、気にするでない。そなたらにはこの上なく救われた……」

…それに今も、このトリ頭の為に尽力してくれている」

おい、そりゃねえだろ!?

『くつくつく、ザマアねえな……サウザンド・マスター殿? まあ、今は俺の事など気に留める必要はない……折角、ウジウジしていた顔を上げたんだ……大事な見せ場を取り上げるような事はしねえさ』
「ぐっ?!」

くそっ!

ああ、そうですか!

そんなに俺を弄れて楽しいですか、チクショー!

「アー、クソッ! 分かったよ、精々派手に言っつてやるっじゃねえか! 端からこっちは覚悟完了しているんだからな!」

俺はリアンが拓く光への道を必死で駆け上がる。

俺の腕の中では、いきなり吼え出した俺に目を白黒させるアリカが……クソ、しっかり聞いているよ?

「いいか!? 一度しかいわねえぞ! 俺がアンタを助けに来たのは……ッ!」

もう辺りには魔獣の影すら存在しない、ただ夕焼けに染まる空だけがあった。

「俺が、アリカを……好きだからに、決まっただらろおが!!」

「は……?」

ミア・ウィルガ

「杖よ! ……って、オイ。何だよ、その予想にもしていなかったような面は……傷つくぜえ」

マジで、傷つく。

「ったく、何が世界を救えだよ? 好きな女一人救えねえ男に、世界なんて救える筈ねえだろ?」

「……………」

「で? アンタはどうだ?」

「な、何がじゃ!?!」

へっ、こつからは俺のターンだぜ!

早々、何度もいい所をリアンに持ってかれて溜まるかってえの!

「アンタは俺の事どう思っている?」

「な、何故、妾がそのような事を言わねば……………」

「俺が言ったんだから、フツー言うだろ? あー、言っておくが……」「王族」だとか「災厄のなんたら」だとか言うのは無しだぞ? そんなもんは今さっき死んだんだから……アンタはもう自由だ、もうアンタを縛るものは何一つない」

クソみてえな世間の柵も、面倒な掟とかも……そんな物はもう一つとしてない。

「だから、今のアンタは他の誰でもないただのアリカ……ただの一人の人間だ」

「一人の……人間」

「そ！ そーゆーアリカさんとしては、俺の事をどう思っているんだって聞いているんだ」

「な……う、そういう意味でなら……まあ、嫌いと言つ訳でもないが」

「あー？ 何すかー？ 聞こえないっすー」

「き、嫌いではない」

「んあん？ 声が小さいッス」

ふっ、そんな言い方で許す筈がないだろうが！

さあ、曝け出すがいい！

「ぐっ……ああ、そうじゃ……この二年間一日たりとも、主の事を考えぬ日はなかったわ……それがどうした、悪いか……？」

「いや、悪かねえ」

ああ、本当に悪かねえ。

俺はアリカを引き寄せ、そっとその唇に口付けを落とす。

その刹那、二人の顔を夕焼けの光が照り隠した。

暫らくそうしていると、アリカが震えているのに気付く……無理もねえ、ただ一人で迫り来る悪意と闘っていたんだからな。

「うっ……ふっ、くっ」

「アリカ……遅れて悪い、この瞬間ときしかなかったんだ」

くっ、泣きながら震えるアリカは何て破壊力を持っているんだ！

「あーもー、可哀そうに……こんなに痩せちまってよ、よしよし」

胸だけは健気に成長していたみたいだけど、な……俺の為に。

ゴッ！

「ぷろっ?!」

ぐえ、どうやら邪念を感じ取られちまったようだな……くっ、相変
わらず王家の魔力は半端ねえ。

つと、まだ大事な事を言っていなかったな。

「なあ、アリカ」

「うむ？」

「結婚すっか」

「……え？」

「アンタの罪も後悔も、まだ残る民への責任ってやつも……全部一
緒に背負ってやるぜ、なっ」

「む……。……、はいっ」

……っ。

ああ、やっぱり俺こいつに参っているぜ。

つと、その時、遠方から爆発音やはかい音が響いている事に気づ
く。

「……って、そついやあいつらの事すっかり忘れていたぜ」

派手にやってんなあ、よっぽど鬱憤が溜まっていたって事か。

「手伝わなくてもよいのか？」

「大丈夫じゃね？」

『ああ、大丈夫だろう……彼らはそんなに柔ではないからな』

つて、リアン？！

……その手に持っているのは何だ？

『ふっ、中々絵になる情景だったぞ？』

「そうか、それで……それは何だ？」

『ん？ 何か？ これはお前の一世一代の告白を、あらゆる角度から撮影したものだ……細かな表情の動きも、言葉一つも取りこぼしはないぞ』

こ、こいつは……っ！

『アリカ様、ナギの凛々しい表情を、台詞を堪能したくはありませんか？ これは後でちゃんと編集して渡しますから、楽しみにして置いて下さいね』

「……はい！」

「ね ……じゃねえー！？ 何やってくれてんだっ？！ アリカもいい笑顔で頷くんじゃねえー！」

『はっはっは 何、二人の間に子供が出来たら見せてやるっと思つて、な？』

「なっ？！」

『では、さらばだっ！』

「あっ、こら待ちやがれっ！ マテエ

ッ……！」

くっそー！

今度会ったらぜってえぶっ飛ばす！

結局、その場はなんとも締まらない空気です幕を閉じるのであった…
…くそ、折角の告白が台無しだった！

SIDE OUT

第八章↳救出（後書き）

何故だかりアンが壊れてしまいました

こいつこんな性格じゃなかった筈なんだけど……？

次回、また舞台を移します

8 / 30の0時更新します。

第九章 禍崇

SIDE 近右衛門

わしは近衛近右衛門、麻帆良学園の学園長にして関東魔法協会の理事を務めておる。

つと、自己紹介なぞしとる暇はなかつたわい。

現在、此処麻帆良では非常に不味い事態に見舞われておる。

それと言つのも、麻帆良の象徴たる世界樹が異常発光し始めたのじや！

その報告を受けたのは昨日の深夜。

当直に当たっていた魔法先生が、見回りの最中に気付いたのじや。

「ううむ、以前突如消失したと思われた時も騒然としたものじやが……今度のこれはそれ以上じやな」

そう、以前も世界樹関連で騒動があった。

前回……と言つか、今に至つてもじやが……麻帆良に施していた大結界の効力が弱体化したのじや。

そののみならず、世界樹がその姿を消失させたりもした……まあ、そっちは誤認じゃったが。

まあ、最終的に麻帆良に施されていた認識阻害はほぼ機能しなくなり……世界樹もその周辺に発生した結界を越えない限り、認識される事はなくなつた。

もつとも、越えようにもそれなりの実力がなければ無理なんじやが。当時は世界樹関連の誤魔化しで大童だったのう。

「……しかし、今回の発光現象はその結界すら越えて現れ始めておる……か。どうすればいいんじやろうなあ？」

現在はまだ裏に通じる者ぐらいにしか認識されん程度じゃが、光度は少しずつ増してきておるし……何故こんな事が起こるのじゃ？ わしが頭を抱えておると、学園長室にノックの音が響いた。何じゃ？

「誰かの？」

「が、学園長先生、例の事で相談事があると……ほ、星の癒し手殿が」

「っ？！ わ、分かった、通されよ」

『星の癒し手』と言えば、向こうで名を馳せた者の二つ名ではないか……それに噂レベルじゃが、王都オスティアの崩落を抑えた功労者とも伝えられておる。

その魔法は人知を超え、幾多の傷つきし者を救ったと言っ……彼ならば、この問題もどうにか出来るかの？ そんな思考に埋もれていると、来賓室より連れてこられたのか客人の到着を告げるノックが響いた。

「どうぞ」

『声帯の関係で、念話にて失礼する……俺はリアン・E・S・グラントームル、世間では『星の癒し手』などと呼ばれている』

「お初にお目にかかる、関東魔法協会の理事を務めておる近衛近右衛門じゃ……今回はどの様な御用で？」

ふむ、噂通り念話で話すか……まあ、わしらには使い慣れた技能じゃから違和感はないが。

それに身に纏う覇気の強大さは目を見張るのう。

『ふ、既に幾らかは察しがついておられるだろうが……大樹の異変を治す為にやってきた』

「……何故、と聞いてもいいかの？」
『簡単な事、かの大樹とは盟約を交わした仲だからな……友を救うのに理由など要らんであるう？』

友？

いや、それよりも盟約じゃと？

一体どういう事じゃ？

『まあ、とりあえず大樹の異変を除去する方が先決であろう……後々、此方から頼みたい事もあるしな』

「ふむ、確かにそうじゃな……御主なら確実に治せるのじゃな？」

『無論、今までやってきた事だ……本来なら、今回も話を通すつもりはなかったのだが』

「何じゃと？」

『それについても後で話そう……今は時間が惜しい』

「……分かった」

これは、思ったよりも大変な事を聞かされそうじゃな。

まあ、よい。

今は一般人への漏洩を防ぐ方が先じゃ。

わしは魔法先生達に麻帆良一般区域の異変調査……発光現象による怪異の発現がないか……を命じると、リアン殿と連れ立って世界樹へと向かった。

世界樹の結界内では発光しているのがハッキリと分かる。

そんな世界樹の傍には三つの影があり、聞けばリアン殿の身内だと言う。

もともと、まさかその身内の一人がかの闇の福音だとは思わなんだ

……まあ、現在の彼女は悪の化身と認知されておらんが。

「来たか、そろそろ大樹の方が不味いようだぞ？」

『ああ、急いで治療する……キティは俺が何をするのかを、軽く説明しておいてくれ』

「分かった」

リアン殿はそう言うと、なんと世界樹の幹へと溶け込んでしまった！
エヴァンジェリン殿が言うには、世界樹と一体となり内に溜まった
毒素を回収しているとの事。

また、もしその毒素が世界樹より自然解放されてしまうと……精神
に強制的な契約効果を及ぼし、人の心を変化させてしまうと言う。

「なんと、そのような……まるで呪いではないか！」

「ふん、呪いか……言い得て妙だ、な。おい、ジジイ……崇り神の
性質は知っているだろう？」

「む？ うむ、勿論じゃ……それがどうかしたのかの？」

何だか嫌な予感がするのじゃが？

「簡単な事だ……お前等関東魔法協会の所業故に、大樹がこういう
現象を起こすようになったのだよ。私は永く生きているから、この
地の元の姿も知っているが……豪く様変わりしてしまったものだな」
「……この地に学園都市を築いたから？」

「そう言っている。この地の、大樹の周りにいた眷属の木々達が伐
採された為……自然と浄化される筈の毒素が蓄積するようになった
のだよ」

「……っ、もしや……先ほどリアン殿が言っていた事は」

「ん？……ああ、今までも治療してきたという奴か？ そうだ、こ
の地に住んでいる一般人に被害を及ぼさせない為だ……まあ、リア

「ンのには大樹の苦しみを癒すついで、らしいがな」

「何という事じゃ。」

「それが事実なれば、わしらは彼に頭が上がりんぞい。」

「知らぬ事とは言え、自分達の都合をこの地に押し付けたのじゃからな……うう、どうしたものか。」

「ああ、リアンには逆らわない方がいいぞ？ 基本、穏やかな気性だが……身内を汚された時は、烈火の如く暴れるからな。私でさえ、怒ったリアンは止められんぞ？」

「旦那八素デモ理不尽ノ塊ノヨウナ存在ダカラナ、精々気ヲツケルコッタ」

「しよ、承知した」

魔王の呼び名で恐れられた彼女をして、此処まで言わせるとは……わし、生きて明日を迎えられるかのう？

それから暫らくして、結界内ではハッキリと視認出来た発光現象は

……嘘のように鎮まり、代わりにリアン殿が幹から現れた。

……その手に一抱えもある大きな黒い繭を持って。

「アレが毒素なのかのう？」

「っ、流石に大きいな……大樹は大丈夫だったのか？」

「ああ、何とかな……かなり内部が痛んでいたが、暫らく養生させれば問題なかるう」

「どうやら、最悪の事態は避けれそうじゃな……まあ、それもこの後の交渉次第か。」

『さて、それでは説明会と行くつか』

「うむ」

『まず、先ほど俺がやっていた事はもう聞いたであろうが……大体、アレは20年毎に行ってきた事だ。もつとも、今回は向こうに居た為遅れたがな……大樹には悪い事をした』

なるほど、そういう理由じゃったか。

『あと、連絡を入れずに治療を施さなかったのは……俺の願いを聞き入れて貰う為だ。まあ、後で報告してもよかったかも知れんが……信じない可能性もあったから、な』

そういう事じゃったか。

まあ、確かにこのような事早々信じられはせんな。

『次に、盟約の事に関してだが……これに関しては秘密だ、安易に口外していい物ではないからな』

ガクッ

「リ、リアン殿……」

『まあ、俺の事は大樹の番人とも思っていてくれたらいい……近しい存在である大樹の精は、俺にとって護る対象だからな』

「……っ」

近しい、それに精……とな。

もしや、彼は……。

『さて、あまり疑問は晴れていないだろうが……構わないだろう？』

「う、うむ」

げ、言外の圧力は勘弁して欲しいのう……老骨の身には堪えるわい。

『では次に、交渉といこうか……と言っても、そう大した事ではない。麻帆良の地に俺達の家を構える許可と、ある程度経つてからある人物を学校へと通わせて欲しいのだ』

「……ふむ、そういう事なれば問題ないかの。その人物の詳細は？」
『それについては、まだ決定していない……場合によっては複数になるかも知れんし、な。まあ、早くても数年後だ』

「合い分かった……では、事の詳細はその時に」

『ああ』

それほど問題がある事ではない、か？

学校に通わず人物と言うのが気にならん事もないが、子供なればそう問題もあるまい。

それに恐らく、リアン殿の傍にいる幼子がそうであろう。

赤みを帯びた金髪に、藍色の瞳をした女の子じゃが……纏っている空気からして、戦災孤児か何かかの？

まあ、彼ならば身寄りが無くなった子供を引き取りもするじやろう。

「ところで、何処に居を構えるつもりかの？」

『ふむ……本心を言うと、この結界の中が一番なのだが。まあ、近隣の森の中に一軒家でも建ててるさ』

「なら、ログハウスがいいな……近くに川なんかが流れていると尚いい」

「……おさかな？」

「ヨーヨー、此処ツテ襲撃トカアルンダロ？ ナラ、結界ノ端ノ方ニシテクレネエカ？ 最近暴レタリナクテ、鈍ツテキテナダヨ」

「馬鹿者、それでは落ちつけんだらうが！ 私は静かな風情溢れる

所に住みたいんだ！」

「横暴ダゼ、御主人！……タマニ八従者ノ意見モ聞イテクレヨ」

「……おさかな」

『ああ、おさかなのいる所だな……ゼロ、諦める』

「旦那　　ッ?!」

何やら、家族談義に花を咲かせておる……わしを除け者にせんで欲しいのー。

結局この日はこれで解散となり、リアン殿達は泊まっているホテルへと帰って行くのであった。

それに対して、わしは……突如異変の治まった世界樹についての説明で大童だったりする。

……わしにも休暇をくれえ！

S I D E O U T

第九章↳禍崇（後書き）

次回も更新します。

更新時間はいつもどおりで、8/31の0時です。

第十章〈密談（前書き）〉

第二部開始です。

これから原作時間開始までが第二部に当たる予定です。

話のやり取りに結構無理矢理感があると思いますが、ご容赦を。

また、話の中にオリジナルキャラの名前が出てきます……今後も名前のみの登場だと思われれます。

あと、あとがきに主人公の簡易設定を載せておきました。

第十章 密談

SIDE アスナ

私はアスナ、アスナ・N・A・グランタムール……少し前までは違う名前だったけど、何だかこっちの方が好き。

パパが一生懸命考えて、私に付けてくれた名前だから。

パパはリアン、ママはエヴァンジェリン……ママは見た目お姉さんぐらいにしか見えないけど、本当はすっごくお年寄り。

……口で言うつと怒るから言わないけど。

まあ、パパの方が更にずつとずつと年上なんだけどね……私も人の事言えないし。

あと、チャチャゼロって言うママの人形がいるんだけど……ゼロは私の付き人みたいな感じ？

そんな変わった家庭の一人娘である私は、現在小学校に通っている。

「アスナ、今日の分の宿題はもう終わったのか？」

「うん、終わった……ママは何しているの？」

学校は現在夏休み。

私は日課の宿題を片付けた後、居間でテレビを見ていた……内容は録画しておいたお菓子作り、今度パパに食べて貰うんだ。

そんな私に話しかけてきたママは、向かい側のソファで裁縫をしている。

「ん？ これか？ ほら、お前の体操服のゼツケンだ……この前、雪広の娘とケンカして破いただろ？」

「あ……忘れてた、ゴメンなさい」

「構わないさ、こういうのも中々いいものだからな……それにあの娘とも仲直りしたのだろう？」

「うん、あいかとは友達になれたよ」

「なら、いいさ……子供は元気であるのが仕事だから」

スツスツと、流れるように糸を通していくママの姿は様になっていくと思う。

ちなみに今のママの外見は、16・7歳程度……肉体年齢的には14歳らしいけど。

メリハリがあつて、それなりに長身なママは同性で娘である私から見ても、綺麗な人だと思う……正直、羨ましい。

パパが言うには、肉体年齢が20歳程度になつたら成長は一旦止まるとの事。

いつまでも若夫婦な両親は格好良くて素敵だけど、その内私が追い越さないかしら？

「……何百面そうしているのだ、アスナ？」

「う、ちよつと成長の事で……」

私が懸念していた事を話すと、ママは苦笑した。

「なんだ、そんな事で悩んでいたのか？確かにいつかは老いて行くだろうが、この先お前も嫁に嫁ぐのだから……不都合がなくていいだろう？」

「よ、嫁つて……お嫁さん!？」

「くつくつく、何だ？ずっと此処に居つく気なのか？まあ、それならそれで構わんが……リアンはやらんぞ？」

ママはパパにベタ惚れだからね。

「べ、別にパパの事狙つたりはしないけど……でも、出来るかな？」

「確かに、アスナを取り巻く環境は厳しいものがあるが……それを

改善する為に、今もリアン達が奔走しているのだ。今は静かに信じて待て……家族を、な」

いや、それは信じているけど……。

「パパが許してくれるかな？」

「……あー、まあ、大丈夫だろ。アスナの事は猫可愛がりしているが、束縛しようと思っっている訳ではないようだしな……お前に相応しい男なら、文句は言うまい」

「……私を護れるレベルの男の人かあ、ゼロが嬉しがって斬りかかったりしないかなあ？」

「……だ、大丈夫だろ、多分」

流石のママも断言は出来ないみたい。

まあ、でもいつか……どんな風になろうと、私達が家族である事に変わりはないんだから！

S I D E O U T

そんな感じにアスナとエヴァが和気藹々としている頃、話題のリアンとチャチャゼロは……遠く京都にある、関西呪術協会に居た。

此処を訪れたのは、幾つかの懸念事項があったからだ。

まず一つ、自分達がいる関東魔法協会との関係故に。

……と言っても、別に潰しに来た訳ではない。

寧ろ、此方は自然と成り立っている組織だけにもっとしっかりして欲しいと思っているのだ。

まあ、要するに協会内に溜まった悪素を蒸留する為に来た訳だったりする。

次に挙げられる理由は、この地に封印されている大鬼神・リヨウメ
ンスクナノカミの調査……実はこれ、本来ならば4年前に行われる
筈だった。

……が、当時は大樹関連の事で慌ただしく、とても手が回らなかつ
たのだ。

そして、最後に……詠春の娘・近衛木乃香。

その身に宿る魔力は、かのサウザンド・マスターや闇の福音すら凌
ぐ大器だと言う情報を手にした為である……まあ、知らぬ仲ではな
いから祝福しに来たとも言えるが。

そんな存在が、今後どう扱われるかは……今の組織関係から見
て、火を見るよりも明らかであろう。

もつとも、最初に述べた懸念事項にも被る事であるから対処するの
は当然なのだが。

S I D E 詠春

その日も私は慣れない組織運営に四苦八苦していた。

元々、只の一剣士である自分にこういう事が上手く務まるとは思っ
てもいなかったが……それでも、何処か安易に見ていたところはあ
ったのだろう。

一人娘である木乃香を産んでから、体調を崩しがちな妻の事も気が
かりだし……どうにかならないものか。

そんな事を思い、一人執務室で溜め息を吐いた時だ。

『ふむ、前にも増して苦労性のようだな』

「っ?！」

その時、声を上げなかった事は賞賛に値するであろう。

ハッキリ言って、今の組織は空気が張り詰めているからな……下手
な騒ぎを起こそうものなら、どんな風に突かれる事やら。

『ふつ、心配せずとも此処で立てられた音が外に洩れる事はない……
久方ぶりだな、詠春』

「ケケケ、旦那……コイツマツタク気付イテイナカタゼ？ 腑抜
ケテイルンジヤネエカ？」

「っ、リアン殿ではないですか?!」

『まあ、そう言ってやるな……腑抜けているのは事実だろうが、な
……ナンダカンダデ、旦那モ結構ヒデエナア』

私の背後に音も立てず忍び寄ったのは、嘗て大戦で知り合った知人の
リアン殿であった……傍には、エヴァ殿の従者もいた。
あの時と同じで、黒い着流しを着こなしている。

そしてその相貌は些かも老いは見えず、スッキリしたものであった
……まったく、羨ましい事だ。

『随分と煤けた顔立ちになってしまったな、詠春よ……やはり、上
に立つ仕事は性に合わんか？』

「ええ、仰るとおりです……こんな事なら、戦いに明け暮れていた
方が万倍マシですよ」

『それはそれでどうかと思うが……まあ、いいか。今日此処を訪れ
たのは他でもない、その組織について煮詰めようかと思ってな』
「？」

『お前は知らなかっただろうが、今俺は関東魔法協会の方に居るの
だ』

「そつなのですか？」

そのような事は義父さんから聞いていないのだが？

聞けばそれも当然で、彼自身が情報の秘匿を徹底させたとの事……
まあ、周知になればのんびり暮らす事など出来ないか。

「まあ、俺としては別に関東と関西がどれだけ畦み合おうと構わないのだが……それに巻き込まれるのは勘弁して貰いたいので、な。こうして手を打ちにきた訳だ」

ははは、相変わらずハツキリ言う方だ。

ナギも何やら彼には弄くられたらしいからな、あまり逆らわない方がいいかな？

「そういう事ですか……まあ、未熟な長である私と致しましても、それは非常に助かりますが」

「……ふむ、大事な事は幾つかある。そして、それを可能にする為の協力は惜しまないつもりだ……さっきはああ言ったが、基本闘争は嫌いだからな」

「解りました、お聞かせ下さい……貴方の考えを」

そうして話し合う事となる私とリアン殿。

この時は分からなかったが、確かにこの時私は変わったのであろう……この地を導く者として、そして何より子を持つ親として。

まず、リアン殿が仰られた事は協会内における幹部との意見交流の重要性だった。

先の大戦の折、西洋魔術師に利用される形となって死亡した術者は結構な数に上り……その関係で、東西の関係は一気に悪い方へと傾いてしまっていた。

その賠償責任も有耶無耶の内に流されてしまい、その後長について私は義父との関係であり快く思われてはいない。

その部分をとにかくする事がまず肝心と、リアン殿は言った。

『向こうの謝罪云々は俺から話を付けておこう……魔法使いが無私の心で世界の人々の為に力を尽くす事を使命としているのなら、異なる世界の戦争で犠牲を払った協力者に頭を下げるのは当然の事だからな』

まあ、近右衛門の謝罪で全てに収まりがつくほど、簡単な問題ではないが……そう呟くりアン殿。
確かに、そうかも知れない。

この協会内に蔓延る東への怨み辛みは、かなり深く浸透しているからな。

『まあ、それでもしない訳にはいかん……このような物を次代に受け継がせる訳にはいかんからな』

「！……確かに、そうです」

木乃香に辛い思いをさせる訳にはいかない。

そうさせない為にも、今自分が動かないと駄目ですね。

『あと、近右衛門から遺族に対する戦後補償を、元老院から戦争賠償を払わそう……これもまた当然の事だな』

「……義父からはともかく、元老院からのそれは可能ですか？」

『何、伝手はあるからな……幾人か、その立場を追いやって浮いた金で支払わせればよからう。奴らの裏事情には、事欠かないからな』

そういつて、ニヤリと嗤うリアン殿に私は背筋が凍る思いだった……やはり、この方には逆らわない方が無難だな。

『俺が直接手を出すのはこれぐらいか？　まあ、苦手だからと一人で考えていないで、きちんと話し合う事だ……それが出来ねば、子に負債を背負わすだけだぞ？』

「……はい」

とは言え、最悪東に逃がせばどうにかなるか？
義父さんもいるから、護ってくれるだろう。

『……言っておくが、娘を東に遠ざけるのは悪手でしかないぞ？』
「っ！」

『時期を見極めれば、それ自体は構わんが……その前にきちんと幹部達と話し合い合意を得て、娘に西の長の娘としての教育を施す必要がある。でなければ、今度はその娘が火種となつて……不運に見舞われるぞ？ ……この程度の事、少し考えれば分かるであろう』

……そんな。

『お前はどうぞせ、娘に血生臭い裏に関わらせたくない……等と思っているであろうが、そのような事お前の娘として生を受けた時点で絶対的に不可能だ』

「ッ」

『お前に出来る事は、自分に出来る限りの教育を施し可能な限りの生存術を身に付けさせる……それくらいだ。後は、娘自身の意志をきちんと聞き……向き合う事だな、これは幹部連中にも言える事だが』

……私は何も言えなかった。
そして、心底思い知った……今まで自身が、どれほど考え無しでいたかを。

結局、その後は如何にして木乃香を教育するかで大いに語り合い……リアン殿が帰った後、幹部達との話し合いをどうしようかで頭を悩ます事となるのであった。

S
I
D
E

O
U
T

第十章 密談（後書き）

以下に主人公の現時点における詳細を載せておきます。
まあ、覚書程度に書いたものですが。

名前：リアン・E・S・グランタムール
アイン シュテルン

二つ名：『星の癒し手』……あらゆる怪我や病気を癒し、穏やかな
笛の音で荒廃した心を慰めた事からついた呼称

身長：2メートル

格好：黒の着流しが基本。魔界で世話になった女性から貰った白い
笛を帯に挿している。夜の海原のような色をした髪をざっくばらんに
切っている。赤と黒のオッドアイ。

好きなもの：自分と同じ、または似た存在。魔界で世話になった女
性。キティ。家族。平穩。たまにする旅。

嫌いなもの：鬭争。平穩を乱すもの。家族を害するもの。

能力：

・ 魔法……あらゆる属性に精通し、最大呪文を軽く凌駕する威力
を持った魔法を行使する。但し、自然に害するような行使は控えて
おり、その為その魔法を目にする者は滅多にいない。

・ 魔眼……二つの魔眼を所持、傍目には只のオッドアイにしか見
えない。この二つの魔眼はほぼ常時使用されており、ある特殊な目

の劣化版でもある。詳細は不明。

- ・ 戦闘技能……多くの技能を永年の旅の内修得しているが、専ら使用するのは縮地ぐらい。剣技はそれほどでもない。纏っている覇気が尋常ではない。

- ・ 家事技能……それなり以上には出来るが、エヴァンジェリンが頑張り出してからはそれに任せている。

- ・ 学力……広大な魔界全土を踏破した旅、地球での400年程度の旅、魔法世界での旅などで見聞を広め……その結果、必然的にあらゆる分野に対して博識になった。

家族関係：

アタナシオティ

- ・ エヴァンジェリン・A・K・グランタムール（旧姓マクダウエル）……恋人。そろそろ身を固めたいと彼女の方は思っている。リアンならば子を成すようにする事も出来るのでは……と、考えているが、とりあえずアスナがいるので保留にしている。

ネオン アストライヤ

- ・ アスナ・N・A・グランタムール（旧姓ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア）……嘗て、『黄昏の姫御子』と呼ばれた存在。現在はリアンの娘として振舞っている。学園長も彼女の事は戦災孤児と認識しており、アスナ姫と分かってはいない。完全魔法無効化能力はリアンによって封印されている。その影響で髪は赤みを帯びた金髪、瞳は藍色になった。

- ・ チャチャゼロ……最近ではゼロと略称で呼ばれている、エヴァンジェリンの従者にして殺戮人形……だったのだが、最近は主に影響されたのか、のんびりしている事が多い。基本、アスナの身辺警護に精を出しており過去彼女に近づいた不審者は地獄を見ている。

・ 大樹の精……グランタムール家にとってお隣さんの存在。よく根本の広場をピクニツクの場所として提供している。

・ 精霊達……基本、全ての精霊を身内と思っている。彼自身の内には特に力を持った存在が幾つか内包されている…… 西風のゼピュロス もそんな一体。

その他の関係

・ 学園長……リアンにとってはどうでもいい存在だが、家族の為にある程度協力体制をとっている。学園長にとっては頼れる存在であり、目の上のたんこぶでもある。

・ 詠春……家族の平穩の為に協力した知人。その魔力によって翻弄されるであろう娘の方にはそれなりに気をかけている。

・ ナギ……割と弄り甲斐のある友人。それなりに認めてはいる。

・ アリカ……アスナの家族として、キティの恩人として気に掛けている。

・ アルビレオ……???

・ クルト……アリカ関係で協力している知人。自身が信を置いている風の最上位精霊 西風のゼピュロス を補佐につけている。度々連絡を取っている模様。

第十一章 節目

SIDE 近右衛門

関東魔法協会と関西呪術協会の関係は少し前まではそれほど悪くはなかった。

その証拠にわしと言う関西の人間がこつちで理事をしとれるんじゃないの。

『人間かどうかは怪しいが、な……人間（？）』、と言っておくべきじゃないか？』

「酷いのう、傷心気味のわしに塩を塗らんでくれんか？」

『何を言うかと思えば……俺がお前に促した事は当然の事ばかりだし、お前にも嬉しい事はあっただろう？ 保険も掛けた事だし、な』
「いや、それはそうなのじゃが」

リアン殿に促されて関西へ赴いて以来、わしはこうして彼と語り合う事が多くなった。

まあ、彼にしてみればわしの所にいる事は不本意らしいが……これも未来の平穩の為と割り切っておるらしい。

……わしとしては、リアン殿が来る度に胃が痛くなって堪らんのだ
がのう。

わしが関西へと赴いてした事は主に二つ、謝罪と私財による補償じや。

正直懐がかなり寂しくなったが、仕方あるまい。

とは言え、事はそれで終わる筈もなく……向こうでは猜疑の眼差しや罵詈雑言に晒され、投石や呪いを仕掛けられた事もあった。

まあ、呪いに関してはキツチり返しといたがのう……ふおふおふお。

ただ、近衛家からの離縁には参ったがのう……お陰で今のわしは近衛ではない。

可愛い木乃香の爺様でいらなくなったのは寂しい、どうにか出来んものかのう？

せめてもの慰みは、死病に罹っておった娘の木乃葉が全快した事か……これはリアン殿のお陰じゃが、益々頭が上がらんわい。

もつとも、木乃葉復帰は関西呪術協会にとつても非常に喜ばしい出来事だったので、リアン殿に関しては向こうでも好意的に受け入れられておった……あのわしに怨み辛みを溢しておった遺族の方達が受け入れたのじゃから、その程度は知れよう。

……まあ、リアン殿とわしに対する視線の温度差には本気で泣きたくなつたが。

で、帰ってきたら帰ってきたで……部下から容易な謝罪に対する苦言を申し付けられ、上部組織である元老院からも非難決議が行われる始末。

もつとも、これは魔法使いの基本方針である無私的心云々を前面に出し押し切つてやったがのう……奴ら、苦味を含んだ顔をしておつたわい。

「奴ら、納得いかんとばかりにわしの給金を減らしおつたのじゃ……わし、悪い事はしておらんに」

『ふん、その程度の事……次代への投資と考えるおけば安い物だろ』

「……リアン殿、もう少しわしに優しくしてくれんか？」

『俺が優しさを向けるのは、キティを始めとする家族と大樹……後は力無き幼子ぐらいだ。胡散臭い妖怪爺に向ける優しさなど、一片たりとも無いわ……ドアホウメ』

うう、爺虐待じゃよ。

「ところで、世界樹の方は問題ないかのう？」

『ん、平穩無事だ……傷んでしまった部分も治療は完了した』

「そうか、それは何よりじゃ……そのついでに麻帆良の結界もどうにかして欲しいのじゃが」

『やる訳がなからう……そもそも、それは元々無かつた物だぞ？

俺としては図書館島やらを撤去して欲しいぐらいなのだが、な……

アレが無ければ、あと護らないといけないものは限られてくるであらう？』

うぐつ、やはりアレも快く思われておらなんだか……まあ、世界樹に絡んでおるからのう。

とは言え、撤去しようにも規模が規模じゃから不可能じゃし……不可能じゃよな？

「それは、そうかも知れんが……わしらにも色々あるのじゃよ」

『それこそ知るか。ま、老後を平穩に暮らしたいなら今の内にしっかりした部下を育成しておけ……正義だ、何だと叫ぶような奴らばかり量産するなよ？』

リアン殿はそう言うと、静かに部屋から消えていった。

老後って、もうわし老人なのじゃがなあ……ハア。

正義の魔法使い。

そう、確かにそう名乗る魔法使いが増えてきているのは事実じゃ……

……まあ、大方は魔法世界生まれの者達じゃが。

Magister マギステル Magi マジのMagister、そもそもこれに問題が

あるのじゃろう。

これの意味である指導者と言うところから、立派だの偉大だの言った意識がされ……そこから更に正義という言葉が生まれたのじゃろう、な。

で、それに繋がっておる魔法使いという言葉が正義と同一視されて……驕り昂る奴らが誕生するのだろう。

まあ、人の心は複雑怪奇なものじゃからなあ……それだけとは限らんが。

NGOなどで活躍しておる者達の大半は、そのような思想には囚われておらんだろうが……魔法世界の者達はのう、まず力ありきじゃからなあ。

「そういう意味では、リアン殿みたいな者が導いて性質改善してくれば助かるのじゃが……無理じゃな、彼の性格からして」

……勝手に驕って滅びるとか言いそうじゃ。

とは言え、時代はどんどん進んでいくからの。

向こうはともかく、此方でもそれでは取り返しのつかない事になってしまう恐れがあるじゃろう。

関西の方はリアン殿のテコ入れて徐々に変わってきておるが、どうせならこっちも助けて欲しいわい……と、願ったところで。

「……無理なんじゃろうなあ、ハア」

どうしたものかのう。

SIDE OUT

SIDE アスナ

今日から新学期。

夏休みにはあいかの家にお呼ばれして妹さんのあやかちゃんを愛でたり、クラスメイトの子と遊んだりして、それなりに楽しんだ。

まあ、パパが忙しそうにしていたのが若干不満だったけど……仕方ないか、私や家族の為だもんね。

そんなパパも一段落したのか、夏休み最終日近くには家に戻ってきて私に構ってくれたりした……そんな私達を見て、ママが拗ねていたのがちょっと可愛いと思ったのは秘密だ。

そんなママは私や成長した自分用の衣装づくりに余念が無く、家中は結構すごい事になっていたりする。

……ただ、あんまりフリルたっぷりなドレスとか着せないで欲しいと思う。

この前なんて……。

それは夏休みも終わりがけの頃、パパ謹製の涼虫君（部屋を快適な温度に保つ、魔法道具）のお陰で涼しい居間で行われた事だった。計画通り宿題を終わらせ、後は余暇を楽しむだけとなった私はパパの帰りを心待ちにしていた……と言うのも、先日用事が済みそうだという連絡が入ったからだ。そんな私はママと話でもしていようと、居間に赴いた訳なんだけど……結局それがいけなかったのだろう、後になってそう思ったものだ。

「っ、ママ……これを着るの？」

「ああ！ 中々の出来だぞ 裾のレースなんて会心の作だ」

居間に来ると同時に手渡された純白のそれは、所謂ウエディングドレスであった。

何だか言外に、とつと嫁にいつてリアンとイチャラブさせる……って、言われているみたいだと思ってしまったのは仕方ないだろう。

「……………何でこんなものを？」

「ん？ いや、何となくだ。まあ、理由をつけるとすれば……………いずれは私もリアンと式を挙げるつもりだからな、それ用の練習作と言ったところか。ふふふ、結婚かあ……………ああ、新婚旅行は京都なんかが好いなあ」

あー、駄目だ……………ママってば、トリップしちゃったよ。

こうなったら私じゃ止められないから、大人しく従うしかないんだよね……………ハア。

しょうがない、着ますか。

「音無^{おんむ}、着付け手伝って？」

「はい、お嬢様」

私は傍で控えていたママの魔法人形の一体、音無に着付けをお願いした。

ママの魔法人形はゼロや音無を筆頭に結構居るのだけど、主に表に出てきているのは先に挙げた二体だけなんだ……………ちなみに、あの子達は別荘『ダイオラマ魔法球』内で控えているの。

んー、ドレスの類は結構着せられているから慣れている筈なんだけど……………流石にこういうのは勝手が違うのかなあ、ちよつと違和感があるかも。

まあ、お嫁さんになる訳でもないのに着るのは可笑しいからね……………きつとそのせいだ、そう思っておこう。

で、何とか着付けも終わって……ママの前に戻ると。

「オー　なんとも可憐じゃないか　そうだろ、リアン？」

『……………』

「へエ、中々様ニナツテイルジャネエカ　流石、姫様ダナ」

何故か、パパとゼロと一緒に居た。

「え……パパ?!」

帰ってきてたの……とは、繋げられなかった。
何故か、パパが呆然と此方を見ていたから。

『……………だ、誰だ』

「え？」

『誰が相手なんだ！　誰が家のアスナをつ！』

「ちよつ、リアン?!」

『許さんぞ　　ッ!』

「旦那ガ御乱心シタ!？」

その後はもうてんやわんやの大騒ぎだった。

最終的にママがパパを首出しの氷漬けにして、何とか説得したけど……その決定打がママの願望で、その後イチャイチャし始めたのは参ったわ。

「……………つ、疲れた」

「ゴクロウサン……マア、旦那ノアレハ才嬢ヲ思ッテノコトダ、許シテヤツテクレ」

「……………うん、分かってる」

パパが私を、家族を大事に思っている事なんてこの上なく理解している……その為なら、どんな苦勞も厭わない事も、でもね？

「もうちょっと自重して欲しいと思うのは、贅沢かなあ？」

「……マア、ガンバレ」

ゼロの励ましが心に沁みる一幕であった。

あんなに疲れる事はもう勘弁して欲しいと思う。

家族との触れ合いは楽しいし、嬉しいけどね……あれは少し違うと思うんだ。

「アスナさん、どうしました？」

「あー、あいか……うん、ちょっと儘ならない現実から逃避していただけ、ふふふ」

「ア、アスナさん？」

ちょっと引いてしまったあいかに慌てて釈明する私だった。

S I D E O U T

第十一章 節目（後書き）

とりあえず一区切り（？）という事で此処で更新は一時停止します。

いいかげん他の作品を手掛けなければならぬので。

何か御要望があれば、御意見下さい。

可能であれば、採用させて貰おうかと思えます。

ではー（．．．）

9 / 2 ……恋歌 音無に変更

第十二章 封印

西暦1993年、その年魔法使い達にとある悲報が舞い込んだ。

偉大なる魔法使いである千の呪文の男ナギ・スプリングフ
マギステル・マギ
サウザンド・マスター
イールドの行方不明、そしてその死の噂。

当然、その圧倒的な強さを知る魔法使い達は早々信じなかった。しかし、それから一年ほど経って尚発見されないと知れ渡ると……噂の信憑性が増し、落胆と共に受け入れられていった。

……ごく一部を除いて、だが。
そんなごく一部とは彼の仲間であり、仮契約をしていたアルビレオ・イマであった……もともと、その彼も現在は行方知れずなのだが。だが、それ以外にも真実を知る者はいたりする……それは、リアンだ。

彼は大樹の精の報告によつて、それを知った……その経緯についても。

それはいつもの通り大樹の健診をしようとした時であった。

友よ、汝に知らせがある

『ん？ 珍しいな、何か遭ったのか？』

いつもはリアンが問い掛けない限り、沈黙を守っている大樹の精から話しかけてきたのである。

そのいつもと違う様子に異変が遭ったと察し、聴く態勢をとるリアン。

友よ、我が内に異物が数匹潜り込んだのだ……どうにも、我が力を遣い何かを封印しているらしい

『何？』

途端、険を蹙わにした顔つきになるリアン……友の力を勝手に拝借する輩がいた事に対する怒りと、それを見逃してしまった自分に対する自責の念故に。

友よ、汝が憤る事はない……我は世情には詳しくない故に、それが意味する事を理解できないが……潜り込んだ輩の在り方は、そう不快ではなかった

『……貴方に異常はないのか？』

、若干根元が冷えているが……その程度だ、問題ない

『っ……本当に、問題はないのか？』

友よ、汝は心配性だな……では、見せよう……以前と同じように

どこか嬉しそうに大樹の精がそういつた瞬間、辺りの景色が一変した。

突然の場面変換に戸惑うも、以前感じた感覚だけに今度は慌てず観察するリアン。

そこはカナダ滝さながらの場所であった。

そして周りが滝壺に囲まれた湖の中央には、一つの塔が聳えている。

『此処は、何処だ？』

友よ、此処は私の根と地底湖が融合した場所……最も私の力が集う場所の一つでもある

そうこう言っている内に、塔の頂に三つの影が舞い降りた。

『！……………あれは、アリカ女王にアルビレオ……………それと、始まりの魔法使い?!』

敵対していた筈の存在と連れ添うように舞い降りた彼らに、戸惑いを覚えるリアン。

しかし、時をそう置かずに場面は進む。

三人は塔の内部へと赴き、その最深部で話し合っていた。

「……………では頼む、アルビレオ」

「はあ……………頼まれたからには全力を尽くしますが、本当によろしいので?」

『ああ、もう俺もこれ以上抑えているのは無理だ……………直に精神を制御されちまう』

「心残りはあるが、これも我が務め……………何、妾は一度死んだ身じゃ……………覚悟は出来ておる」

『……………すまねえな、アリカ。ネギを産んだばかりだと言っのに……………いや、俺が言っつていい事じゃねえな……………アル、ネギに例の遺言を頼む』

「……………ふう、まったく。アリカ様といい、貴方といい、嫌な役目ばかり押し付けてくれますねえ」

『……………わりい』

最深部の空間は大樹の根が辺りを覆っており、奥まった場所には壁から水が滝のように流れ落ちていた。

始まりの魔法使いと思われる人物はその水が溜まった場所へと赴き、一身を晒す。

「……………では、女王陛下……………その御力を彼に向けて解放して下さい

い

「うむ」

『遠慮はいらねえ、思いつきりやってくれ……あいつに少しでも猶予を与えてやれるように』

「分かっておる……さらばじゃ、ナギ」

『ああ……また、な』

ナギと呼ばれた始まりの魔法使いはその身にアリカの王家の魔力を受け、やがて巨大な氷の棺に覆われた。

大樹の力が籠った霊水と王家の魔力が反応して、嚴重な封印が施された為だ。

対するアリカは、魔力を放ちながら……アルビレオによって、魔法をかけられている。

時の大秘法、エターナル・コフィン『悠久の枢』

それは対象者の時を止め、半永久的にその状態を維持する本当の魔法だった。

もともと、この魔法は術者自身も半ば囚われてしまうが。

やがて魔法が全てを覆いつくし、その場の全てが完全に停止した……時の流れと共に。

『……そういう事、か』

リアンは全てとは言わずとも、大体を把握する事が出来た。

ナギがした事、若しくはしなくてはならなくなった事。

アリカがその特殊な力を遣い、始まりの魔法使いが憑依しているのであろうナギを封印した事。

アルビレオが人ではなく、古より存在する魔導書の精であろうとい

う事。

……そして、いつかあの封印が解かれるであろうという事。

『……そう言えば、さっきネギがどうとか言っていたな？……あいつらの子供か？』

リアンはもう一度、時の止まったその空間を見遣ると……暫らく、その光景を目に焼き付けるのであった。

暫らくの後、リアンの周りの場景が元に戻る。

『ふう、それにしても……結ばれてから10年と経たず、あのようにな事になってしまつとは』

リアンはアリカの身の不幸に、同情を抱かずにいられなかった。

友よ、どうだ？ 何も異常はなかったであろう？まあ、その様子では……我の事など忘れていたかも知れんが

『……あ』

リアンが憐憫の情に駆られていると、大樹の精が話しかけてきた……何処かからかうように。

彼はまったくの凶星を指され、気まずげに視線を外すのであった。もっとも、リアンにしてみれば面白い事なので……すぐに、大樹の精をからかい返す事にした。

『しかし、友よ……貴方も流暢に話をする様になってきたなあ？』

、……ふん、世話焼きな誰かさんのせいだ

それに返す大樹の精の音が、何処か慄然としていたのは……気のせいだろうか？

リアンはナギとアリカの真実を知ってから、とりあえずどうしようかと考えに耽るようになった。

リアンにとって、必要なものは既にある程度揃っているのが現状だ。愛する存在であるキティ、護るべき存在であるアスナ、親しき隣人である大樹の精や精霊達……そしてある程度、約束された平穩。完全に満たされぬ事などない以上、現状を保つ事こそ彼にとって大事であろう。

だが、それでも心の何処かでそれに対して異を唱える自分がいる。

『……ま、一人で悩んでいても仕方ないか』

とりあえずその大事な家族と話し合おうと、エヴァンジェリン達の許へと赴くのであった。

SIDE キティ

此処数日、リアンの様子が変だ。

まあ、変と言っても……う、浮気したとか、私に見向きもしなくなっちゃったとかじゃないと、思うけど……ち、違うよな？

……うん、違う筈だ。

今の私の胸はマシユマロのように柔らかで、メロンのようにたわわに実っているのだ……欲情せぬ筈がない。

……でも、相手はリアンだしなあ。
寧ろ、ロリな私の方がす、好きだったとか。
いや……それなら成長などさせようとは思わないだろう。
むむむ、今の私は大体肉体年齢で19歳程度の筈……もし20歳で、
という事ならフライングになってしまうが。

……っ、構うものか！

私は悪の魔法使いにして、闇の福音と恐れられたエヴァンジェリン
だぞ！

「リアンを押し倒すなど、造作ないわ！」

『……へえ、俺ってばキティに押し倒されるのか？』

……え？

「オー、遂ニ御主人ガ攻勢ニ出ルカ?! ツーカ、百面相ガ面白カ
ツタゼ、御・主・人」

「駄目だよ、ゼロ……ママが折角やる気出したんだから」

……へ？

『まあ、アレだ……キティがその気なら俺も覚悟を決めるぞ？ 出
来れば、記念すべき二十歳の時に色々貰い受けるつもりだったが…
…こういつのも悪かない』

「……あ、ああ……い、いやああああああっ?!」

こんな私を見ないでええええええええええ！？

S I D E O U T

SIDE アスナ

あーあ、行っちゃった。

せっかく、妹か弟が出来たかもしれないのに。

『……ふむ、からかいが過ぎたか？』

「駄目だよ、パパ？ ママはああ見えて繊細なんだから……きつと今頃、自分の部屋でお尻隠さないでベッドに突っ伏していると思うよ？」

「……エラク詳しい状況予測だな、笑エルケド」

「前もあつたのよ、こういう事……あの時は、私の目の前でパパとキスしてた時だけだ」

『……あの時か、そっぴや同じような状況だな』

あの時は部屋に入ってきた私に気付かず、甘々な雰囲気で大人数キスしていたのよね……で、私に気付いたパパが雰囲気読まずに私に声をかけちゃったのよ。

その後は、さつきと一緒……泣きながら走り去っちゃたの。

私はママが心配で後を追ったのだけど、ベッドの上で頭隠して尻隠さずな体勢でいたのよね……あんまりな姿だったから、声をかけずに戻った私は気遣いの出来る良い娘だと思う。

『ふむ、少しキティに聞きたい事があつたのだが……失敗したな。

まあ、先にアスナに聞いておくか』

「何？」

『唐突な質問で悪いが、アスナは今の生活に満足しているか？ 何か不満とか、願いとかなないか？』

「不満なんかないよ？ パパとママ、ゼロに友達のあいか……空っぽだった私が、これほどまでに満たされているのはパパ達のお陰」

牢獄のような生活から、化け物として道具として扱われる日々から

助けてくれたのはパパ。
温かな眼差しをくれたのは、温かな場所をくれたのはパパとママ。
気に掛けてくれる人達、笑いかけてくれる人達とこれほど巡り会えたのは……間違いなく、パパ達のお陰。
だから、不満なんてない。
思いつきもしないよ？

「まあ、パパ達以外で笑いかけてくれたアリカ姉様やナギ達と会えないかなあ……って言う願いはあるけどね」

こっちに来てから、会う機会なんて無くなったから……久しぶりに会いたいなあ。

『……そうか。なら、その内会いに行かないと、な』

「……？　パパ、どうかした？」

『ふ……いや、なんでもないよ』

「ふーん……あ、それはいいけどママの事慰めないと駄目だよ？」

『ああ、分かっている……愛する未来の妻だから、な』

はいはい、あー熱い、熱い。

んー、何だかパパ変だったけど……まあ、ママがいれば大丈夫かな？

S I D E O U T

第十二章↳封印（後書き）

今作品では、

- ・アルは魔導書の精である。
- ・アスナはアリカの事を姉と慕っている。
- ……としておきます。

色々不明点が多いので、これからもこつこつ事が多いかと思われるま
す……ご容赦をm) —— —— m)

今回は9/4の0時に更新します。

第十三章 経緯（前書き）

ちょっとナギの扱いが酷いかもしれません。

こんなのナギじゃない！と思われるかも知れませんが、ご容赦を。

第十三章 経緯

SIDE リアン

結局、俺はアリカ女王（と、ついでにナギ）を救う事を決意した。あの後、拗ねたり恥ずかしがったりで急がしそうにしていたキティを落ち着かせ……今後の事を話し合った。

まあ、キティは俺の迷いを察していたようだが……俺もまだまだ、だな。

で、こう言われた。

「ふむ、リアン……お前の悩みが何なのかまでは分かんが、迷うくらいなら動けばいいだろう」

『いや、だからこうして……』

「だから、さ……私達の意見を大切にしてくれるのは嬉しいが、最後に決めるのはお前自身だぞ？」

『……………』

「さつき現状に不満はないか、と聞いたな……そう聴く事自体、リアン自身何かを感じている証拠ではないか？」

まあ、何に対して何と思っているかは分かんが、な……片目を瞑りながら、そう呟くキティだった。

その後、俺以上に俺を解ってくれているキティが愛おしくなってきた……ちょっと過激に、キティの 自主規制 で 自主規制 を 自主規制 してしまったのは反省すべきか？

キティは息も絶え絶えに、蕩けきっていたけど……一線は越えてないから、セーフだよな？

「り、りにゃんによ、ばかあん……あん、垂れてきちゃう」

……ゴクリ。

【閑話休題】

(〓 ^ . . ^) ノ ヽ トイレットペーパーにゃー

【閑話休題】

ん、ん、ん！

……さて。

アリカを救うと決めたのはいいのだが……生憎、直ぐにどうこう出来る訳ではない。

まず、封印を解く訳には行かないという事が第一点。

ナギやアリカの頑張りを無にする訳にはいかないという理由ではなく、単純に開封してしまえばナギの精神が乗っ取られて不味い事に

なってしまうからだ。

俺ならそれを相手にしても立ち回る自身はあるが、ナギを殺す訳にはいかんからな。

次に、あそこに封印するに至った経緯を聞かなければならないという事が第二点。

それはいずれ解放されるアルビレオに聞けばいいが、それにはまだ時間がかかる。

時の大秘法『エターナル・コフィン悠久の柩』は術者すら巻き込む、厄介な魔法だ。

だが、何事にも抜け道はあるもので……術者に限れば、制限付きとは言え目覚める事も可能だったりする。

まあ、それも俺みたいないな存在やアルビレオのような魔導書の精である必要があるが。

俺の記憶が確かなら、一年ほどもすれば目覚めるであろう。

最後に、アリカを救うという事は魔法世界の問題にも協力した方が良いでしょうという事が第三点。

まあ、アリカとナギなら放っておいてもどうにかするかも知れんが……確率的には、余り期待はしない方がいいだろう。

それに条件付とは言え、俺に解決する為に手段がある以上……黙って見捨てるのも気分が悪い。

向こうのそれは幻想とは言え、それはそれで一種の生命体だからな……幻想種って言う。

それを神の如き行いを踏襲する事で、失うのは惜しいと言うものだから、それをなす為に今は力を蓄えるべきであろう。

アリカを救い、諦めない道を築き……再び、この平穩に戻ってくる為に。

『その為に、今は力を蓄えよう……後悔など、したくはないからな』

無論、下準備の方も怠ったりはしないが。

SIDE OUT

リアンが予測した一年という時は瞬く間に過ぎ去った。

その間リアンは力を蓄えるだけでなく、各方面に働きかけ念入りに下地を整えていく……懸念事項を一つでも減らす為に。

それは家族の安全の更なる向上から始まり、魔法世界の現状改善にまで事は及んだ。

もともと、それらが実を結ぶかどうかは判らず……時もまだまだ必要であったが。

そんな先の事はさて置き、目覚めの時を迎えた者の話と行こう。

場所は地下深く、大樹と地底湖の狭間にある塔……後々の名称は封印の塔と言われる事となる、その最深部。

そこに彼、アルビレオ・イマはいた。

一年前と寸分違わぬ姿で、目の前にいるアリカを支えるように。

……と、次の瞬間！

なんと、アルビレオの姿が目に見えてぶれだしたのだ……まるで、二つに分かれるように。

「……っ、ふう」

遂には二人が増えた彼は固まったままの方の自分を見つめると、一息を吐いた。

「……大分、残して来てしまいましたねえ。仕方がない事とは言え、これでは後々困る事になりそうです」

抜け出た方の彼は色素が抜けたように薄く、存在感がまるで無かった。

アルビレオは目の前のアリカとナギだった存在を暫らく見詰めた後、その場を後にする……今の彼にとって、その場は息が詰まる場所であつたから。

そうして出てきた塔の頂き、その何の変哲も無い場所で暫し思案した後……力なく、扉にもたれ掛かるのであつた。

「ふう、やはりまだ無理は出来ませんね……とは言え、こうして無為に時間を潰すのにも限界がありますし」

『当たり前だ、あまり無理をするものではないぞ？』

「」

アルビレオは彼にとっては在り得ない、自分以外の存在に一瞬思考が真っ白になつてしまった。

『くっくっく、何て顔しているのだ……俺だ、リアンだ』

「なっ？！ な、何故貴方が此処に!？」

『ん？ 俺は一年前からこの時を待っていたぞ？』

「ッ?!?!?!」

驚きから覚める事すら出来ず、寧ろ驚きのみで思考が塗り潰されるアルビレオであつた……合掌。

あの後、何とか落ち着いていたアルビレオだったが、流石に限界だったのかその場に座り込んでしまった。

「やれやれ、この私がこんな無様な姿を晒す事になるとは……やは

り、貴方は私にとって鬼門ですね」

『ふ、無理に気取る必要も無かるう……それよりも聞きたい事がある』

「……ナギの事、ですね？」

『正しくはそこに至った経緯、だな……俺にとっては、恩人たるアリカの方が重要なのだから』

「……それでも貴方ならナギもついでに助けしてくれるのでしょうか？」

『……ついでに、な』

素直じゃないですねえ……と、苦笑するアルビレオ。

その後、リアンが何処まで把握しているのかを聞き……その理不尽なまでの情報源に頭を抱えるのであった。

「まったく、真にバグキャラと言うべき存在は貴方なのでしょうねえ……貴方に比べたら、ナギやラカンも単なるチートキャラですよ」

『おいおい、俺のこの力は永年磨き上げてきたものだぞ？まあ、土壌からして優れているのも確かだろうが……まあ、そんな事より、だ』

「ええ、あの状況へ至った経緯ですね……お話しますよ、貴方なら何とかしてくれそうですね」

そうして語られる、ナギとアリカの物語。

開幕。

大戦の決戦時、師ゼクトの体を敵の首領に奪われたナギは幾多の戦場を渡り歩いた。

しかし、行く先々でそれらしき影は見付からず……いつしか、自身

を英雄と讃える声すら疎ましく思うようになっていった。

何も出来なかつたんだ、何も成せなかつたんだ……そんな俺を、英雄なんて呼ぶんじゃないじゃねえ！

そんな彼のささくれ立った心を癒したのは、他でもない妻のアリカだった。

二人は心を重ね、体を重ね……戦乱の時とは違い、静かに逢瀬を楽しんだ。

しかし、実質彼らが静粛に過ごせた時はそう永くはなかつた。

西暦1993年、遂にナギは師ゼクトの手がかりに繋がる情報を得たのだ。

始めの内は再び相対した『完全なる世界』と戦いながらも、アリカの許へ帰ってきていた。

しかし、アリカが身籠ったと知った後……戦いが激化した事もあり、早々帰れなくなってしまった。

そうしてアリカが臨月を向かえ、出産した時もナギは傍におらず……死闘に明け暮れていた。

それは戦争に身を投じた故なのか、戦乱に愛されてしまった一人の男は……子を産む愛する女の震える手を握り返してやる事すら出来なかつた。

そして……。

「追い詰めたぞっ、ライフメーカー！ 師匠の体、今度こそ解放してもらおうぞ！」

『……武の英雄よ、それでお前は満足か？』

「貴様がそれを言うなあああああああっ！！！！」

ぶつかり合う、ナギと始まりの魔法使い。
長時間続いたそれは、決戦時の焼き回しの如く……ナギの勝利で幕を閉じる、筈であった。

『……流石は武の英雄、二度も私を倒すか』

「諦めねえ人間のしぶとさを思い知れ!!」

『……では思い知ろうではないか、その人間という物を』

「ッ、何!？」

始まりの魔法使いはナギの渾身の一撃を受けると、その身を霧状に変化させた。

「チィ、往生際が悪い……なにっ?!」

『お前の体、私が有効に使ってやろうではないか』

「っ、ふざけんじゃ、ねえ　　ッ!……!」

霧となった始まりの魔法使いは、ナギの体に纏わり憑き……その支配権を奪おうとする。

対するナギは、精神を強く持って対抗しようとするが……如何せん、経験した事の無い攻撃手段だけに旨くいかない。

あわや囚われてしまうか、というその時であった!

「妾の夫に何をするかっ!!」

『ぐおっ?!』

突如、虚空から現れた女性が……ナギに纏わり憑いていた霧に向かって、ピンタをかましたのだ。

「ア、アリカ?!　それにアル!？」

「情けないぞ、ナギよ……一度勝った相手に遅れをとるとは何事じや！」

「間一髪といった所でしたね、ナギ？」

現れたのは、アルの魔法によって転移して来たアリカとアル本人だった。

「ど、どうして此処が？」

「妾に夫の居場所が分からん筈がなかるう、勘じゃ！」

「勘かよ!？」

「まあ、私がナギの魔力をパクティオーカード越しに探ったのがね……って、聞いていませんか、そうですか」

一気に場が弛緩したかと思われたが、やはりそのような事は無く。

『ふ、ふふ……ウエスペリタティア王国の者に魔導の者か、ご苦勞な事だ』

「！」

「死に掛けていたようですから、陛下のビンタで無に帰ってくれると思ったのですが……そう簡単にはいきませんか」

少し離れた場所に、元の状態に戻った始まりの魔法使いが悠然と立っていた。

直ぐにナギはアリカを庇い立ち、その瞳に強い意志を乗せる……そして。

「アリカ、身重だった筈のお前が此処に来て……その姿でいるという事は」

「ああ、産んできたぞ……可愛い男の子だ」

「……そうか」

一瞬目を閉じ、再び敵を見据えた時……そこにあつたのは、覚悟を決めた男の顔であつた。

「アリカ、アル……俺が奴を何とか抑えてみせる、だから後の事頼むぞ」

「……ナギ？」

「……っ！ ま、まさか、ナギ?!」

「問答の時間はねえぜ、アル！ いくぞ、根性無しヤロウ!!」

ナギはそう叫ぶと、始まりの魔法使いに向かつて突撃していった。

「これが全てです。この後、ナギは再び融合しようとした『始まりの魔法使い』を気力で押さえ込み……膨大な力が眠るこの地で、眠る事になったのです」

『……家族を省みない、大馬鹿野郎だな』

リアンは最後の時まで表情を崩さなかつたアリカを想い、ナギを罵つた。

「そう言わないで下さい、ナギの仲間を思う気持ちも……」

『男は女を、惚れた相手を護つてなんぼだ……それが子を生じた妻なら尚の事、な。異論は認めるが、俺にとってはそれが真実だ……全て、とは言わないが』

アルビレオの言葉もバツサリ切り落とすリアン。

もつとも、アリカの事を想いそれ以上は罵る事もなかつたが。

『まあ、詳細は判った……それでは行動を起こすとするか』
「……………何をやる気ですか？」

出来れば、まず私の居城を造ってくれると嬉しいのですが……と言
う、アルビレオの言葉は無視するリアン。

『何、アリカの心配事を少しでも減らしてやるうと思っただけだ…
…少しばかり、場を台無しにしてやるのさ』

そう答えるリアンの顔はこの上ないほど、愉悦を湛えていた。

第十三章 経緯（後書き）

次回は9/5の0時です。

第十四章 転機

リアンがアルと再会してから少しの時が過ぎた。

既にリアンは次の一手を打ち終わり、今はこれまで仕込んできた種が芽吹くのを待っているところだ。

そして今日、その内一つの結果が訪れる事となる。

『次は、麻帆良学園中央駅 お降りの際は、足元にご注意下さい』

「ふむ、此処が麻帆良学園都市 か」

「師匠、此処は学園内ですからタバコ吸ってちゃ不味いですよ」

「つれない事言うなよ、俺からタバコ取ったら何も残らないぞ？それに今は長期休暇中だから、学生さんはいないからいいだろ」

その日の昼過ぎ、麻帆良学園中央駅に二人の男が降り立った。

一人は長身の白い背広をキツチリ着こなし、タバコが良く似合うハードボイルド……ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

一人は同じく白い背広を着こなしつつも、何処か青さが隠せない青年……高畑・T・タカミチ。

そう、『紅き翼』の一員であった彼らだ。

「駄目です！ 僕達は教員として此処に招かれたのですよ？ それなのに、喫煙で指導されるなんて見つとも無いじゃないですか」

「いや、そこはタカミチ君が困になって……」

「何言っているんですか っ！」

麗らかな春の日差しの中、人気の少ない駅前に青年の叫びが空しく響いた。

麻帆良学園本校女子中等学校。
彼らはその敷地内にいた。

「やれやれ、何故一番奥まった場所に学園長室があるのだから……妖
怪爺と名高い学園長の趣味か？」

「そんな事言ったら駄目ですよ、師匠……でも、正直針のむしろで
すね」

春休みという事で人影は疎らだが、それでも部活動をする者もあり
……そんな中を歩く二人の成人男性は、この上なく注目されていた。
そんな彼らの前に一人の女性が姿を現す。

「ようこそおいで下さいました、ミスター・ガトウ……それと、高
畑君」

「刀子さん!？」

現れたのは葛葉刀子、神鳴流の使い手だ。

「ほう、貴女が……詠春から聞いていますよ、中々の使い手だとか」

「まあ、長がそのような事を？ お恥ずかしいですわ」

「な、何故、刀子さんが此方に？」

ガトウと刀子が朗らかに会話する中、タカミチは問いかけずにはい
られなかった。

何せ、彼女は関西にいた筈なのだ。

「ふふ、そうね……私の現状を少し、話しておきましょうか」

刀子が此方に来たのは、関西呪術協会総意によって決定された任務の為だった。

着実に呪術の腕を向上させつつある長の娘、木乃香の為に下見に来たのだ。

「木乃香ちゃんの為ですか？」

「ええ、去年の話なのだけれど……東との融和を快く想わない過激派が、木乃香お嬢様を闇討ちしたのよ」

「なっ?!」

「まあ、それ自体は木乃香お嬢様に施されていた保険が効力を発揮して事無きを得ただけけれど……その結果、西の中で過激派は排斥される事となったの」

もつとも、だからと言って木乃香の身の安全が確約された訳でもなく……幾つかの条件を満たした上で、木乃香の東行きが決まったという訳だ。

その一つが西の者による現地の下見……幾ら穏健派や中立派でも、見極めを怠ろうとは思っていない故に。

「なるほど、そういう訳でしたか……しかし、刀子さんお一人ですか？」

「ええ、そうよ……まあ、肩身が狭いと感じる時もあるけれど、それなりに旨くやっているわ」

和気藹々と言った感じで話す刀子とタカミチ、ガトウは一人寂しく……という訳でもなく、とある場所を凝視していた。

「あら、ミスター・ガトウ……どうかなされましたか？」

「いや、あの空けた場所は？」

ガトウの視線の先には、綺麗な円状の巨大な囲いがあつた。それは高さ3メートル直径200メートルもあるうかと思われる囲いで、その内側はただ芝生が生い茂っているだけである。

「ああ、やはり貴方は気づかれましたか……ええ、あそこに世界樹が存在します」

「ええ?! あの中にですか!? って言うか、不審に思われないのですか? 確か、認識障害は弱まっているのですよね?」

「それは大丈夫よ……あそこは戦争の被害者を祭った霊地として、立ち入り禁止区域にされているから」

「それは、また……ああ、その上で意識を逸らす魔法も掛けられているのですね?」

「そういう事……さて、それでは学園長室に案内します」

所替わつて、大樹の地下深く……封印の塔の頂き。

そこには以前は存在しなかったバルコニーが増築されており、彩りも増していた。

『……つたく、無駄な労力使わせやがって』

「ふふふ、いいお仕事ですよ……やはり、こうでないと落ち着きません」

そのバルコニーの一角にリアンとアルビレオはいた。

リアンの愚痴を華麗にスルーしつつ、右手に持った紅茶を上品に飲むアルビレオ……左腕には豪華な装飾が施された本を抱えている。

その姿は幾分濃度を増して来ている様に感じられた。

『まあ、いい……ところで、漸く一つのピースが到着したようだな』

「ああ、ガトウとタカミチ君ですか……彼らが来たという事は、向こうも少しは落ち着いたという事でしようか？」

『さて、な……クルトが言うには、相変わらず馬鹿な連中が屯しているみたいだが』

「それは此方もそう変わりありませんでしょう？ ……まあ、西は旨く纏まってきたようですが」

貴方のお陰で……そう微笑みながら、リアンを見るアルビレオ。

対するリアンはそれに答えず、一つ鼻を鳴らした……どうやら、満足には程遠いようだ。

「さて、そのクルト君から齎されたと言う例の情報ですが……どうするおつもりで？」

『そうだな……既に色々台無しにはしているが、此処でもう一つ決定的に打ち壊す事にするか』

「……では？」

『ああ、その時になったら連れて行きます』

「では、そのように……やれやれ、これで又暫らく動けなくなりますね」

アルビレオのぼやきは滝の音に掻き消されていった。

S I D E アスナ

今日から私は中学生。

あいかと同じクラスになれたのは嬉しかった。

ちなみにクラブは茶道部と乗馬部、あと剣道部に入っているわ。

茶道部は落ち着いた感じが好きだから……まあ、ママの影響が大き
いかな？

乗馬部はあいかと一緒にのクラブに入りたかったから、馬で風を切っ

て走るのって気持ちいいしね。

で、剣道部に入ったのは何故かと言うと……どうにも、私のアーティファクトって大剣みたいなの。

これはパパが精霊に訪ねて判った事なのだけど、その為の剣道部という訳……いつ必要になるか、判らないからね。

……平穩が崩れるのは、呆気ないから。

この前も、雪広家では悲しい事があつたし……あやかちゃん、大丈夫かな？

「まあ、うちはパパ達がいる以上それ程心配はしていないけど……でも、自分の身ぐらい護れる様にならないとね」

そんな頼りになるパパ達だが、めでたくこの度ゴールインした……色々な意味で。

式はまだ挙げていないけど、近い内に執り行うようだ。

普段から熱々なお二人さんだったけど、最近は輪にかけて熱愛振りを披露している……正直、勘弁してっつて感じ。

まあ、アレだけイチヤイチャしているなら近い内に私の弟か妹をこさえてくれるでしょう。

で、もう一つ大事なお知らせ。

なんと、ゼロがこの度ランクアップしたの！

どういう意味かと言うと、魔法人形から魔法生命体に……つまり、成長する存在になったのよ。

ランクアップした際に人形独自の間接部分も人と変わりなくなつて、身長も二倍に伸びちゃったわ……まあ、まだ小さくて可愛いけど。

「ヤレヤレ、マサカコウイウ進化ヲスルトハナー……旦那ト居ルヨウニナツテカラ、イツカ何カガ起コルトハ思ツテイタケドヨ」

「……何で片言で喋るの？ もう普通に喋れるんでしょ？」
「コレ八俺ノアイデンティティーダ、ナクセルカヨ」

何て変な拘りを持ってしているゼロ、名前も変えないしね……まあ、必要ないかな？

まあ、パパならその内小学校にゼロを放り込みそうだけど。

「冗談ジャネエゼ?! ナンデ、俺ガガキト一緒ニ才勉強ゴッコシナキヤナラナインダ!？」

あれ、聞こえちゃった？

「何を騒いでいるんだ、チャチャゼロの奴は……五月蠅いぞ？」

「あ、ママ……実はね」

私が事の次第を話すと、何故かママはニンマリと笑ってゼロの肩へと手を置いた……それはもう優しく。

「チャチャゼロよ、そう喚くな」

「……御主人、嘘ダヨナ？ 旦那八ソンナ冗談ミテエナ事シネエヨナ？」

「……既に手配済みだそうだが、今年の4月から新品のランドセルを背負えるぞ？ くつくつく」

「……へ？」

「ピッカピカの一年生 って奴だな……アハハハハハ」
「……」

あ、固まっちゃった。

結局、この後ゼロは不貞寝してしまったけど……まあ、無理も無いか。

S
I
D
E

O
U
T

第十四章↳転機（後書き）

ガトウさん、死地から生還！

まあ、原作のような危機的状况にはならなかったのですから当然なんですが。

ただ、流石にあやかの弟さんは助けられませんでした。

主人公が原作知識持ちなら話は違ったでしょうけど……そんな都合のいい話、早々ありませんから。

そしてチャチャゼロ、パワーアップ

容姿的には二代目キティってところでしょうか？

お気づきの方もいるでしょうが、ゼロにはエヴァの位置に入っています。

名前をどうするかが問題、ですが。

今回は9/6の0時です。

第十五章 変革

イギリスにある小さな山間の村。

そこはかのサウザンド・マスターの故郷であり、現在はその遺児であるネギが住んでいた。

丁度2歳となるネギだったが、彼の専らの関心は自身に寄り添う存在にあった。

「ねえねえ、今日もお話して！ それとも何かする！？」

雪が降り積もる中、ネギは世話になっているスタン老の家の庭先でその存在と会話をしていた。

「ふむ、では今日は精霊と魔族について話そうか」

ネギに答えたその存在とは、リアンが彼の許に送った式であった。

式はノードウスと名乗り、ネギに近づいた彼は瞬く間に気に入られた。

無論、英雄の子として大事に扱われているネギに近づいたのだ……村人は即ノードウスを排除すべく動いた、過剰なまでに。

しかし、その位でどここうなるような存在である筈もなく……逆に伸され、諭されてしまった。

それからというもの村人も今までを省みて、ネギに対してごく普通に接している。

そして、説教したノードウスはと言うと……スタン老に気に入られ、彼の家でネギと暮らすようになった。

「精霊さんは分かるけど、魔族？」

「ああ、精霊はこの前会った東風のエウロスのような存在……あの時は楽しかっただろ？」

「うん、お空を飛べて嬉しかった」

「対して魔族とは……ネギはどういう存在だと思っている？」

「んー、魔族ってあのおっかない化け物の事だよな？」

「化け物、か……ネギ、以前も言ったがそれはある一点から物事の判断をしたものの言い方だ」

「あ……そっか、魔族にも色々いるって言うことだよな！」

ノードウスと一緒に居るようになってからというもの、ネギは色々な事を知るようになった。

それは自分に会いに来られない両親の事から始まり、人との関わり方や言葉に込められた意味の捉え方など、それはもう色々教えられた……その結果。

ネギにとって、魔法は絶対ではなくなっていた。

無論、魔法の便利さは理解している……それもノードウスが教えたから。

最強と云われた父親の事も、偉大なる母親の事も教えられた……その考え方、在り方までも……ついでに、例の告白劇も。

だからこそ、魔法に括る事は無かった……未だ、拙い考えながらに今はそれよりもこうして色々教えられる事に夢中になり、ノードウスと共に色々体験する事に喜びを感じていた……何れ来るであろう、教えられた所業に恐怖しながらも。

「ネギ　　！」

「あ、お姉ちゃんだ」

「ふむ、今日だったか……なら、魔族についてはまた今度にしよう」

「はい……お姉ちゃん！」

ノードウスは立ち上がると、テーブルに置いてあったティーポットを手に取り家の中に入っていった。

さて、ノードウスがこの村に来てやっている事は何もネギの世話や村人の意識改革だけではない。

来るべき時に向けての調査や準備など、多岐に亘って行動している。

……もつとも、それもそろそろ実を結ぶ事になりそうだが。

「スタン老、予定より早くネカネが来た事からして……そろそろ、やって来る筈だぞ」

「っ！……そうか、遂に来よるか。まったく、碌なものではないな……あの連中は」

家の中に戻った彼は、暖炉の前で寛いでいたスタンに声をかける。それを受けたスタンは苦虫を噛みつぶしたような顔をし、此処にはいない者達に対し毒を吐いた。

そうして、溜め息を吐くとゆっくり立ち上がり杖を手に取る。

「まあ、よいじゃろう……それならそれで、叩き潰すまでじゃ！
幸い、お主のお陰で体の調子もすこぶる好いしの」

「余り無理はするな、スタン老は村人を指揮してくれたらいいさ……
…クルトが寄こした情報によると、この村の連中でも持て余す規模の筈だ」

「むう、それほどまでか」

「そいつらが知り合いの魔族だったら、まだ何とかあったんだがな……生憎事はそう旨くないらしい」

「……お主は本当に顔が広いのう」

「これでも長生きしているからな。まあ、ある程度雑魚と交戦したら予定通り動いてくれ……後は俺達が何とかする」

それを聞き、スタンは静かに頭を垂れた。

「ネギの事を頼みますじゃ」

彼は既にノードウスが何者で、何をしようとしているかを理解している。

また、そのお陰で今まで背負ってきた重石が軽くなりもした……無くなったとは思ってもいないが。

「……ああ、任せておけ」

真実を知り、失いかけていた気力が戻ったとは言え……彼が年老いた者である事に変わりはなく、だからこそノードウスは任される事に否を唱えなかった。

元より、自身が始めた事でもあるが故に。

S I D E ネカネ

皆様初めまして、私はネカネ・スプリングフィールドと申します。私は現在、従姉弟であるネギに会う為村に向かうバスに揺られています……予定よりも些か早いのですけど。ですが、それも仕方ありません。

「……本当に仕方が無いわよね、憤懣やる方ないですけど」

私は既に知っているのです、魔法使いの罪過を……そして、これから行なわれようとしている赦せない悪魔の所業を。

それを知ったのは村に突如現れたノードウスという御方と、彼を通して知り合った元老院議員クルト・ゲードル氏に教えられた故です。クルト氏などは同胞の行いを止められない事を悔み、土下座（?!）までする始末でした……まあ、ノードウス様に取り成して止めさせてくれましたが。

そして、昨日の事です。

遂に計画が実行に移されるとクルト氏から連絡がありました。

幸い、ありとあらゆる可能性を考慮して下さっていたノードウス様……いえ、リアン様のお陰で準備だけは整っています。

後は、その準備を無駄にしない為に……敵を欺くだけです！

S I D E O U T

スタンが、ネカネが、村人達が迎え撃とうとしているとは露知らず…… 此処、元老院議員ヨハネの執務室では暗い笑い声が響いていた。

「くつくつくつく……遂に、時が来た。あの処刑の時は煮え湯を飲まされたが、今度はそうはいかんぞ」

……そう、あのアリカ処刑の時『紅き翼』に伸された彼は、しぶとく生きていたのである。

そればかりでなく、幾つかの尻尾を斬り捨てる事で元の鞘に戻っていたのだ。

「居場所の特定と、二工を揃えるのに時間が掛かったが……まあ、
よし」

「ヨハネ様、召喚の準備は既に整っています……いつでもどうぞ」
「うむ、我らにはまだまだやるべき事が沢山あるから……夕暮れ時に向かうよう、手配しておけ」
「はっ」

子飼いの手下に命を発したヨハネは、瑣末な事柄と言つかのごとく……次の行動へと移るのであった。
これから起こる詳細を確かめせず、それが何を招くかを知りもせず。

S I D E クルト

ふん、遂に動きますか。

まあ、いいでしょう……既に対処は整っているのですから。

現場には頼りになる方もいますし、追加要員も控えていらっしやるようですしね。

ああ、しかし……。

「アリカ様が生きていらした事は、大変喜ばしいです……今は動けないようですが、リアン殿がおられる以上そう心配はないでしょうし」

アスナ様もスクスク元気に育っておられるようですし、王都オステイアの治安も元通り……とは行かずとも、それなりに落ち着いてきました。

あと残されたアリカ様の憂い事は、御子息であられるネギ君の安否のみ。

リアン殿が仰るには、魔法世界の危機に対する手段も講じておられるようですし……まったく、頭が上がりません。

「それに引き換え、私の本懐である元老院の虚偽と不正を暴く事は

出来てはいないのが情けないですね……まあ、アリカ様の名誉回復
共々、公に行なうには時期尚早なのは解っていますか」

考えに耽っていた私でしたが、突如傍に風が舞い起こりました……
これは、ゼピュロス殿？

クルトよ、焦りは思考に好い影響を齎さないぞ……今はリアン殿
を信じて待つのだ、いずれお主の手が必要な時も来よう

……確かに、そうですね。

以前、それを誓った筈ですのに……情けない。

っと、思考がループしてしまっていますね。

「ありがとうございます、ゼピュロス殿……今は情勢を見極めて、力を蓄える
事にします」

うむ……冷静に、それでいて情熱を失わずにいてこそお主らしい

くっくっく、と笑い声を残しつつゼピュロス殿は消えていった。

……態々、私をからかいに出て来たのでしょうか？

私は暫し協力者の真意に悩む事になりました。

S I D E O U T

第十五章 変革（後書き）

次回は9/7の0時です。

第十六章 襲撃（前書き）

サブタイトルと内容が噛み合っていない様な……。(。・。・)

そして、途轍もなく難産でした。・。・(ノ、)

はっきり言って、番外にするかキンクリしようかと思っただぐらいです。

ともかく、あんまり納得出来ていませんがそれでも宜しければどう

ぞm) ————— (;) m

第十六章 襲撃

1996年、冬。

ネギの住む村は火の海に包まれた。

この惨劇で被った損害は、村全ての家屋の焼失……そして、数名を除く村人の永久石化というものであった。

難を逃れた村人はネギとネカネ、そしてアーニヤの両親である。

無論、対外的には……であるが。

真実はまったく異なり、村人は全員無事にとある場所へと避難しており……焼け跡で永久石化していたのは、予め用意されていた偽者である。

そして、アーニヤの両親が偽装しなかったのは娘の事を思っていた事だった。

何せ、村ではネギとアーニヤだけが成人していない子供であったからだ。

スタン老は村の相談役という事もあって、村人と共に隠れ住む事を選んだ……いい加減、諍いに巻き込まれるにはウンザリしていたらしい。

とりあえずとは言え、ネギの安全が確保された事でナギとの約束を守った事にしたようだ。

まあ、何はともあれ、こうしてネギはネカネの住むウェールズの街に引越す事となった……彼を助けたノードウス、そしてアリカと共に。

SIDE アリカ

今、私は感無量の気持ちでいる。

愛する息子が私を母と呼び、甘えてくれるからだ。
出来れば、此処にナギも居てくれれば尚好かつたのだが……今とな
ってはもうどうでも良い。

無論、元老院に見つかる訳にはいかない私が、普通に暮らせる訳が
ないのだが……そこは裏技を使つて、誤魔化す事に成功してある。
まあ、要は隠れ住んだ村人同様の手段……家の中に秘密裏に設置さ
れた魔法球内で暮らしている訳じゃ。

当然、その時間設定も内外誤差なしにしてあるのは言つまでもない
であろう。

さて、それはともかく……そろそろ本題を語ろうか。

何故、ナギと共に封印された私がこうしていられるのか……その詳
細を。

まず、封印を解いたのが誰かじゃが……それはアルビレオじゃ。

当然、解いてはならぬ封印を解いた事を責めたのじゃが……ネギの
危機と聞き、渋々矛を収めた。

……封印してあるものの事を思えば、その程度で解くのではないと
言つべきなのじゃろうが。

「……まあ、よい。して、妾の封印を解いてどうするのじゃ？聞け
ば、リアンがいると言つてはないか……ならば全てはあの者に任せ、
妾は眠りについていていた方が良かったのではないか？」

色々手を尽くしてくれたかの者に、事を押し付けるのは気が引ける
が……。

「ええ、確かにそうなのですが……あの人はそれでは満足出来ないようでした」

「……どういう事じゃ？」

聞けば、リアンは私を救う為に色々動いているらしい。

その事は純粹に嬉しいのだが、その為に全てを巻き込むのはどうかと思う……まあ、損害を被るのが主に愚か者共だと言っから構わんのかも知れんが。

今回の一件も、元より確執のあった元老院の仕業という事もあり……全てを台無しにするべく、動いていると言っ。

「……で、どうするのじゃ？ナギを開封したところで、そう時間は残っていないぞ？まあ、今回の件を片付けるぐらいの時間はあるじやろうが、な」

「いえ、ナギの封印は解きません……向こうに行つて賣つのは、アリカ様とリアンさんです」

「何じゃと？」

疑問の声を挙げるも、それに答えたのは目の前のアルビレオではなかった。

『アレをそのままにしては置けんからな、代わりにアルビレオを完全に此処に固定する事でアリカを一時開放する……無論、アリカの魔力が供給されないから期限はあるけどな』

「リアン！」

「私もいるぞ、アリカ」

「エヴァンジェリン！……って、誰じゃ？」

「……オイ。って、そう言えば成長した姿を家族以外で晒すのは初めてだったな」

唐突に現れたリアンとエヴァンジェリン(?)。

『と言うか、アルビレオ……何が起るのか解らないのだから、独りで封印を解くな』

「すみません、貴方が来る気配はしたもので……」

「そういう憶測でものを進めるな、馬鹿たれ」

「久しぶりですね、エヴァンジェリン……本当に大きくなってしまわれたんですね、残念です」

「ふん、貴様こそ……少し見ぬ内に随分ぼろくなってしまっているではないか、いい様だ」

二人の来訪と、エヴァンジェリンの変化に驚く私を他所に……エヴァンジェリンとアルビレオが言い合いを始める。

……と言うか、真祖の吸血鬼が成長するものなのか？

「……仲が悪いのか、こやつら？」

『キティが変態なアルビレオを嫌っているだけだ……そんな事よりも、やるべき事を済ませるぞ』

そうじゃった、ネギに危機が迫っておるのじゃったな。

「それで、どうするのじゃ？」

『まず、アルビレオには自身とナギを対象に『悠久の枢』を発動させて貰う……で、その後キティが『こおるせかい』で物理的に両者を封印』

「……今更なのですが、本当にするのですか？かなり、嫌なんですけど」

「くつくつく、安心しろ……クリティカルに決めてやるからな。精々、間抜けズラを晒さないよう気をつけることだ」

『まあ、これでこっちは暫らく大丈夫の筈だ……で、アリカがする

事だが』

リアンが言った事は次の通りになる。

- 1 . 私は対外的に生存が確認されると不味いので、表には姿を現さない事。
- 2 . 襲撃を退けるのはリアンと式であるノードウスに任せる事。
- 3 . 事件後、救助隊が来る前にネギと顔を合わせ、今後の予定を話し合う事。
- 4 . その後、時が来るまでネギと共に生活し、親として子の心を護る事。
- 5 . 時が来たら、此処に戻り再びナギを封印する事。

「……何と言えばよいのか、本当によいのか？」

『無論だ、馬鹿共の都合を潰すついででも思っておけ……まあ、期限は長く見ても5年程度か？』

「そうですね、私だけではその程度が限界でしょう」

ネギと、我が子と生活できる……この私が？

産んだ我が子を放って、眠りについていていた私が？

『まあ、こっちの封印は俺とキティで見張っているから思う存分ネギを構ってやれ……変な意識操作されないように、な』

「そうだな、リアンが送った式のお陰で村人達は問題ないみたいだが……魔法学校はなあ」

「あそこには魔法至上主義な方も居ますからねえ、ナギの子が入学したとなれば……結果は火を見るよりも明らかですねー」

三人はそう言うと、ジッと私を見詰める……う、何だ、その目は。

『やれやれ、乳も満足に飲ませてやれなかった我が子を構ってやれ

ると言つのに……』

「うむ、母親の温もりを知らない幼子に愛情を注ぐチャンスだと言
うのに……」

「ふう、憐れネギ君は碌でもない大人の餌食になってしまつのです
ね……ああ！嘆かわしいっ」

……っ。

「わ、解つた……私がネギを護つてみせる、無上の愛情を注いでみ
せるとも！」

だから、そんな目で私を見るな！

その後は、特に語る事もなく……トントン拍子に話は進んでいき、
無事ネギとの再会を果たした。

まあ、一つ言うなれば……ノードウスのお陰で知らぬ者を見るよう
な眼つきをされなかつた事には、本気で感謝したが。

ちなみに、悪魔共はリアンの手加減無しの攻撃に憐れなほど呆気な
く帰されておつた。

そうして、現在……対外的には、ネギとネカネの二人暮らしの屋敷
に、私とノードウスは潜んでいるという訳じゃ。

基本、ネギが学校に行っている間はノードウスが影ながら護衛し……
…帰宅後は、魔法球内で私が勉強を見たり、ノードウスが鍛えたり
して過ごしている。

全ては、ネギの心の成長の為。

私は思い知ったのじゃ。

私の息子という事で、ネギに齎される害悪の醜悪さを……そして、大人達が残した負の財産の継承を。

只でさえ、ナギの遺児という事で様々な重石を背負わねばならないと言っのにじゃ。

まあ、私を救うと決意したリアンのお陰で、それらに対抗する術は用意出来そうじゃが……流石に幼いネギの心を育むのは、他人には限度がある。

だからこそその私だという事じゃ。

「……まあ、リアンなれば私を救うついでと言いきうのだが」

何はともあれ、私は救われ続けておる……ならば、それに応えて魅せねばな。

それが不甲斐ない母親としての、せめてもの務めじゃ。

S I D E O U T

未だ迷走の続く魔法世界に、またもや衝撃の噂が広がった。

英雄の忘れ形見を襲った凶事。

幸い、その事件は危ういところで『星の癒し手』により回避されたが……明らかに、人の手によって齎されたその悪事は人々の心に暗い陰を落とした。

何せ、英雄の忘れ形見を襲う事件である……それを実行した人物が、それと相反する存在であろうという事は想像に難くない。

それは同時に、そういう存在が未だこの世界にいるという事に他ならず……終戦し、緩みかけていた気持ちを引き締め直させるのには

充分であった。

「ふむ、殊の外旨く行きましたね……これならば、思っていた以上の効果が得られるでしょう」

そう呟くのは、クルト・ゲーデル……そう、彼がこの噂を流布したのだ。

理由は幾つかあるが、最も大きな理由は終戦した事で国家間の関係が元の鞘に戻るのを防ぐ為だった。

幾ら共通の敵が現れ、それを打倒する為に共闘したからと言って関係が一気に改善されよう筈もなく……その敵の生存を臭わす事で緊張感を保たせたのだ。

「まあ、後はこれが悪い方向に作用しないよう各上層部と連絡を密に持つ必要がありますが……ゼピュロス殿、その時は頼みますよ？」
うむ、承知した

幾多の思惑が交差する中、世界は次のステージに移行しつつあった。

第十六章 襲撃（後書き）

次回は9/8の0時です。

9/7……20:35、ナギに扮するという部分を修正。

第十七章 教育（前書き）

サブタイトルがつけられませんでした。・ ・ ・（ノ、）

何か合う言葉ありませんか？

>まつきー様、採用させて貰いましたm)
—— ———— (m

第十七章 教育

古くより日本の裏を支えてきた組織、関西呪術協会。

元より関西とは付いていなかったのだが、関東魔法協会発足以後このような名称になった。

それはともかく、最近の協会は富に発展が著しく……組織内部の浄化が急速に進んでいる。

それは偏に一人の男の介入によるもののだが、それに対して微妙な心持でいる者もいた……まあ、長である近衛詠春その人であるが。

「ふう、協会が活気付くのは好いのですが……日々、自身の至らなさに気付かされっぱなしなのはどうも」

実のところ現在において、協会を動かしているのは彼ではなかったりする。

「何を言っていますの、貴方……全ては貴方の不勉強が原因でしょうに」

「う、木乃葉」

詠春の愚痴に突っ込むのは、最近病状から復帰した彼の妻である木乃葉。

そう、彼女が組織を運営しているのだ。

「嘆くのは結構ですけど、常に好き方向に導く為に、死力を尽くすのが長の役割でしょう……長老会の方々も貴方の至らなさには呆れていましたよ？」

「うう、すみません」

「……まったく、うちを娶った時はあれほど剛毅だったのに」

失敗だったかしら？

そう呟く彼女に、詠春は内心ハラハラしていた……無論、そのような事彼女はお見通しだったが。

「まあ、幸いリアン様のお陰で回復しましたから、これからはうちが采配を取りますが……貴方も精進して下さいね？あくまで、此処の長は貴方なのですから」

「……はい」

「お母様、どこおるー？」

「あら、木乃香が呼んでいますわ……では、貴方？本日分の指示した仕事ぐらいは、キッチリ終わらせて下さいね？」

そういつて指し示す先には、山の様に積まれた書類の束が。

「はい……とほほ」

完全に尻に敷かれていた詠春であった。

木乃葉が詠春を凹ませて、廊下に出ると、向かいから駆け寄ってくる二人の少女がいた。

艶やかな黒髪の少女と、サイドテールの少女……一人娘の木乃香と、護衛見習いの桜咲刹那である。

「どうしました、木乃香？」

「お母様ー　みてや、これ」

木乃香がそういつて差し出したのは、一枚の符であった。

ただたどしい筆跡ながらも、確かな力を感じる符である。

「あら、もしかして……」

「うん、うちが書いたんよー……どう？」

「ええ、きちんと出来ているわね……あら？」

その時、傍に控えていた刹那に不自然さを感じる木乃葉。

「どないしたん、お母様？」

「刹那ちゃん、ちよつと右腕を見せてみなさい」

「こ、木乃葉様？」

有無を言わせない木乃葉の迫力に尻込みしながらも、腕を庇うように隠す刹那。

それを見た木乃香は、気になってその腕を掴んでみた。

「あつ、このちゃん駄目や?!」

「あー!? 赤なつとるー!」

「……やつぱり。不自然に庇っているようだったから、何かあると思ったけれど……駄目よ、怪我はきちんと治さないと」

「ご、ごめんなさい」

首を竦めながら謝る刹那に苦笑しながらも、木乃葉は木乃香を呼び寄せ符を渡す。

「木乃香、貴女の作った符で彼女を癒してあげなさい……出来るわね？」

「はいな!」

木乃香は覚えたばかりの符術を行使し、刹那の腕に癒しの波動を送

る。

それは不確かな行使ながらも、その潜在能力によって確かな効力を得られたようだ。

「どや、せつちゃん？」

「……すごい、すごいです！ このちゃん！」

「ええ、効力はちゃんと得られたようですね……でも、まだ制御に難ありですよ？ 今のは木乃香に秘められた底力で、無理矢理治したようなものです……修行はこれからとは言え、精進を怠ってはなりませんよ？」

「はいな！ お師匠様の教えはきちんと守るえ」

厳しい言葉ながらも、確かな優しさを感じた木乃香はめげる事無く頷いた。

「ふむ、それはよい事だが……本日の課題はまだ終わっていないぞ？」

和気藹々としている木乃香達の後ろから、そんな声が響いた。

「お、お師匠様！？」

「刹那、先ほど鶴子師範代が探していたが……君は此処で何をしているのかな？」

「ほう?! も、申し訳ございませんー！」

「あらあら、二人とも駄目よ？」「そう言う木乃葉も、今日の薬はもう飲んだのか？」あ、あら？」

現れたのは一人の男であった。

彼こそは、リアンが木乃香に施しておいた保険であり、現在彼女の師を務めている者である。

彼は過去木乃香が襲われた時に顕現し、以後この協会に留まっているのだ。

「まったく、子供達のそれは仕方ないにしても、木乃葉は命に関わる事だぞ？」

「う、ごめんなさい」

「流石、お師匠様や……あのお母様が頭下げ取る」

「あわわ、どないしょー、鶴子様に怒られるー」

結局その場は解散となり、木乃葉は強制的に床に就かされ、刹那はやって来た鶴子に連行されていった。

「せつちゃん、大丈夫かなー」

「まあ、死にはしないだろ……それよりも、逃亡罪により課題は二割り増しだぞ？」

「そ、そんな殺生な〜」

憐れ、木乃香……その日は結局、夕刻まで拘束されるのであった。

SIDE 木乃香

うちは近衛木乃香。

此処、関西呪術協会の長の娘や。

うちがその事実を知ったんは、3歳の時やった。

当時はよく分かってなかったけど、今やったら分かる……自分がどれだけ危うい立場におるか。

「まあ、それもお師匠様の本体さんがどうにかしてくれたみたいやけど……気は抜けへんよな」

そう、お師匠様の本体さん……リアン様ゆーらしいけど、お母様の

死病を治してくれた大恩人様や。

それだけやのうて、うだつが上がんお父様を叱咤して、尚且つうちの命も護ってくれたんや……ほんま、頭が下がる思いやわ。

うちが命を狙われたんは、4歳の時……せつちゃんと陰陽道の基礎を自習しとった時やった。

偶々その時は周りに誰もおらへんだ事が災いして、過激派の人がうちを殺そうとしたんよ。

咄嗟にせつちゃんがうちの盾になろうとしたんやけど、その前にお師匠様が顕現したんや……あん時のお師匠様は凄かった、ほんまに凄かった。

で、それが切欠で協会内の過激派さん達は一掃されて、一気に組織改革が進んだゆー訳や。

「協会の人らの顔も明るくなったし、ええ事や」

しかも！

うちの大事な初めてのお友達、せつちゃんとの距離が縮められたのもお師匠様のお陰やしな。

リアン様がお父様に進言してくれへんだら、麻帆良っていう所に一人で行かされたかも知れへんし……裏を知らんまおったら、せつちゃんの悩みにも気づかへんまやっただ筈や。

「……そんなん、ゾツとせんわ」

お師匠様に勇気付けられたせつちゃんの告白。

うちだけの守護天使様の証、真っ白な翼……あの時の情景は今でも覚えとる。

「またモフモフさせて貰わなな」

微妙に恥ずかしがったり、ピクピクしたりするんが、また可愛いんよ？

「……………何をしているのだ、木乃香？」

「あ、お師匠様」

気付けばうちの傍で、お師匠様が呆れたような顔をしてはった……うー、もしかしてずっと見られとった？

お師匠様はうちの前に広げられているノートを片手で拾い上げると、備にチエックしていく。

「……………ふむ、八割と言ったところか。まだまだ、ケアレスミスが目立つな」

「うう、堪忍やー」

お師匠様は普段は優しいんやけど、勉強の時は容赦ないんよ。

「まあ、いい……………それで？ 何やら、せっちゃん好き好き などと聞こえてきたが……………道を踏み外すのは感心せんぞ？」

「ぶっ……………お、お師匠様?!」

「……………冗談だ。しかし、独り言はよした方がいいぞ？」

もー、お師匠様ってば。

たまに真顔でとんでもない事ゆーから、心臓に悪いわー……………まあ、せっちゃんの事は好きやけどなー

「さて、今回で凡その基礎学習・基礎鍛錬は終わった訳だが……………何か質問は？」

「えーと、うち治癒系と防御系の符の作り方とかは習ったけど……………」

攻撃系は覚えへんの？」

「ああ、木乃香の力は攻撃には適していないからな……その代わり
と言っただけだが、式神契約をするつもりだ」

「式神って前鬼とか後鬼って言うの？」

「ああ……まあ、木乃香の前衛には刹那がいるが、保険は多くあつた方がいからな」

そかー。

んー、どんなのがうちの式神になるんやろ？

「ま、最初は普通に木乃香の力で鬼や狗族を召喚して、契約すればいいだろう……それで徐々に増やして、式神制御を万全にしておけ、来るべき時の為にな」

「来るべき時の為？」

「くつくつく、秘密だ」

えー？

何やのー？

結局、この時は誤魔化されて教えてもらええへんだ……うー、一体なんなんやろ？

S I D E O U T

第十七章 教育（後書き）

次回は9/9の0時です。

第十八章 合流

西暦2000年、一月。

冬休みも終わる頃、グランタムール家ではゼロとアスナが炬燵でたれていた。

「アー、モウスグ休ミモ終ワリカー……鬱ダ」

「そんな事言つて、チャチャも学校生活満更でもないんでしょ？」

「イヤ、ソリヤ何モシテナイヨリカハマシダケドヨ……アノ無駄ニ騒ガシイノハ、勘弁シテ欲シイゼ」

アスナに皮を剥いて貰ったミカンを頬張りつつ、愚痴を溢すゼロ……改め、チャチャ。

彼女もアスナの言うように、別段嫌がつてはいないのだが……精神年齢上、危なっかしいクラスメイトを構ってしまい苦労しているのだ。

今ではクラスメイトのみならず、学園の鬼教師・新田先生からも一目置かれていたりする……まあ、煤けてしまうのも仕方ないだろう。

「くつくつく、チャチャも中々に馴染んでいるではないか……新田もお前には期待していたぞ？」

「ああ、チャチャの世代の子供達は特に活きがいいからな……まあ、頑張れ」

そんなチャチャに決して励ましには聞こえない言葉を投げかけるのは、リアンに手を引かれながら居間へとやって来たエヴァンジェリン。

「……チキシヨ」

エヴァンジェリンとリアンの言葉に脱力感が増すチャチャ。
そんなチャチャを見て、カラカラ笑うエヴァンジェリンのお腹はプツクリと膨らんでいる。

「それにしても、もう八ヶ月だっけ？」

「ああ、もう胎動がはっきり感じ取れるぞ……中々に生きがいい」

アスナの問いに答えたエヴァンジェリンは、この上なく幸せそうに微笑んでいる。

「……双子、だっただっけ？」

「ああ、男の子と女の子の、な」

「パパとママの子、か……どんな子に育つんだろ？」

「サアナー、ツーカー……何処で産ムンダ？」

ふとした疑問を口にするチャチャ。

何せ、妊娠が発覚した後もずっと家に居るからだ……心配もするだろう。

「ああ、それはもう決まっている……キティにはもう事前に教えてあるのだが、魔界でだ」

「……ま、魔界？」

「……ド、ドワイウコッタ？」

「どうも何も……リアンが妊娠発覚時に、向こうの恩師と連絡を取ってな？事情を聞いた恩師が、是非自分に取り上げさせてくれて嘆願したそうなのだ」

「あの人は、女王陛下は俺にとって大恩人だから……これほど光栄な事はない」

リアンの滅多に見せない心からの笑顔に、呆けるアスナとチャチャ。

「やれやれ、妻としては複雑な気分だな……そのような表情をされるのは」

『すまないな、あの女性は俺にとって母であり、師であり、恋人でもあったからな……まあ、今はキティ一筋だ』

「うむ、それならばよい……まあ、相手の格を考えれば、私が身を引くべきなんだろうが」

『ふ、女王陛下はそのような狭量ではないさ……寧ろ、キティが産む我が子の方に関心を寄せるだろうさ』

呆ける二人を他所に、会話の華を咲かせるリアン達。

暫らく呆けていたアスナだったが、気を取り直すとリアンに問いかける。

「ねえ、パパ」

『ん？ どうした？』

「正直、聞くのが怖いんだけど……女王陛下って、誰？」

「ソ、ソウダ！ 旦那ナラ、ドンダケ大物ト知り合イデモ驚キハシナイケドヨ……」

『ああ、ゴモリーだよ。ソロモン72柱の魔神の1柱で、悪霊の26軍団を従える序列56番の公爵様だ……まあ、普段は家庭菜園に精を出す物静かな女性だがな』

何気ない風に告げるリアン。

それを聞いたアスナとチャチャは顔を真っ青にしていたが。

「そ、それって確か……魔界の主の寵妃じゃなかった!? そ、そんな存在と恋人だったって」

『おお、よく知っているなあ……いやあ、あの時は流石に死ぬかと

思ったぞ』

「イヤイヤ、旦那マジカヨ?!」

「チャチャ、それにアスナも……驚くのも無理はないが、今更だろ?」

言外に、リアンだからしょうがない……とでも言いたげに、苦笑するエヴァンジェリン。

そう言う彼女も、知った当時は真っ白になっていたが。

『まあ、とって喰われる訳でもないから安心しろ……向こうに行くのは俺とキティだけだしな』

「大体、三ヶ月ほどで帰宅する予定だ……出産が3月頃だから、帰ってくるのは6月か?」

『そうだな、あくまで予定だが……まあ、早めに向こうで待機する予定だから、2月には出立するつもりだ』

「ふむ。では、音無……まだ先だが、二人の世話は任せたぞ?」

「は、ご心配なく」

何処までも落ち着いている二人の様子に、アスナ達は騒いでいるのが馬鹿らしく思えてくるのであった。

「まあ、確かにパパの非常識さは今に始まった事じゃないけどさ……って言うか、私ももう高校生なんだから子ども扱いしないでよ」
『それは無理だな、子供はいつまで経っても子供さ』
「うー」

何だかんだで、温かな団欒を育むグラントムール家であった。

SIDE アスナ

パパとママが魔界に旅立って、既に一月が過ぎている。

……で、それはいいのだけれども。

「音無、これは此方でいいのか？」

「はい、それでよろしいかと……あ、そちらは下着になりますから私が片付けておきます」

「ああ、頼む」

「音無さん、うちの小道具入れって何処やったっけ？」

「あ、このちゃん！ そちらでしたら、既にお部屋の方に置いておきました」

「そかー、それじゃ後は服を箆笥に仕舞うだけやなー」

「あら、それでしたら私達が終わらせておきましたよ？ ね、あやか？」

「ええ、刹那さんに窺って要望通りに仕舞っておきましたわ」

「おおきにー」

現在、グラントムール家では……とある子達を迎え入れる作業で、大童だったりする。

まあ、うちには頼りになるメイドさんがいるし……丁度遊びに来ていた雪広姉妹も手伝ってくれたので、それ程疲れはしなかったけどね。

「ふう、これで終わり？」

「ミタイダナ……アー、ノド渴イタ。音無、茶クレー」

「はい、少々お待ちを」

家に引越してきたのは、関西呪術協会の長・近衛詠春の一人娘である近衛木乃香ちゃんと……その護衛である桜咲刹那ちゃん。

そして、木乃香ちゃんの師匠であり、パパの式である……あれ、名前なんて言っただけ？

私はいか達の気配に気をつけつつも、式に向かって訊ねる。

「ねえ、貴方の名前って何て言うの？」

「ん？ ああ、俺達式は全てノードウスで統一しているぞ？ 意識や記憶を共有しているし、な……まあ、俺達も時が来れば融合して一人になるから問題はなかるう」

「そう……あ、そう言えば学園長とかには連絡入れたの？」

「ああ、来る前に一応な……まあ、落ち着いたら一度顔を見せに行
くさ」

まあ、そうよね。

あくまで木乃香達はパパの庇護下に入る事で、一時的に避難するだけなんだから。

「そんな事より、今日は木乃香達の歓迎パーティを開くのだろ？」

「ええ、あいか……と言うより、あやかちゃんが張り切ってくれたからね」

「新しいお友達の為、何よりもお姉様の為！ この雪広あやか心を籠めて準備致しましたわ！！」

「わっ？！ あ、あやかちゃん！？」

び、びつくりしたー……この私に気付かれずに接近するなんて、恐るべし。

あやかちゃんってば、時々こうなるけど……何でかしら？

その夜、グランタムール家では盛大なパーティが開かれた。

音無のみならず、雪広家のメイドさんも加わって用意された料理は素晴らしいものだったわ。

木乃香ちゃんと刹那ちゃんも望外の歓迎パーティに顔を綻ばせてい

たし、引越し初日としては大成功ね。

そうして、その日の深夜。

雪広家の皆が帰り、裏に通じる者達だけの時間がやって来た。

「それじゃあ、改めまして……リアンとエヴァンジェリンの娘、アスナです」

「俺はチャチャ……ちょっと前までは、その音無と同じく魔法人形の身だったんだぜ。四月カラハ才前ラト同級生ダ、ヨロシク頼ムぜ？」

「は、初めまして、近衛木乃香です！」

「さ、桜咲刹那です！ よろしくお願いします」

あらら、流石に空気が変わったせいで緊張しているわね。

「そんなに緊張しなくてもいいわよ？ 私もパパとママに護られている身だし、この家で暮らす以上遠慮なんて必要ないから」

肝心の家主も不在だしね。

「まあ、家主であるパパ達は大事な用で6月頃までは帰って来ないから……それまでに慣れてくれればいいわ」

「大事な用、ですか？」

「ふふ、ええ……子どもが生まれるのよ、それも双子」

「……ええ……っ?!」

まあ、驚くわよね……厄介になる所の家主がお目出度なんて。

結局、その後はどんな子どもが産まれるかで盛り上がる事となったわ……有名すぎる二人の子供だからねえ。

S
I
D
E

O
U
T

第十八章 合流（後書き）

次回は9/10の0時です。

第十九章　星誕

魔界、そこは暗き者が集いし場所であり……光から拒絶されし者の最後の居場所。

そんな魔界の一角、吟詠公爵として名高いゴモリーの領地にリアンとエヴァンジェリンは居た。

リアンの超長距離転移で此処に訪れたエヴァンジェリンは、開口一番……ここのたまった。

「何だ、此処は？ ……本当に魔界か？」

それも致し方ない事で、目の前に広がる領地は多種多様の野菜や果物が栽培されており……其処彼処に、和気藹々と収穫などに勤しむこれまた多種多様な悪魔が居た。

主な悪魔の特徴としては、女性型が多いと言う事だろうか？

『ふふ、此処は変わらないな……まあ、早々変わる筈もないのだが』

呆気にとられる妻に気を遣いつつも、久方ぶりの故郷に目を細めるリアン。

見れば、遠巻きながらも彼に気付いた悪魔達が手を振っている……恐らく古くよりの知人であろう。

それに手を振りながらも、恩師に会う為にエヴァンジェリンを促す。

『さあ、行こうかキティ』

「う、うむ」

「ふふふ、それには及びませんよ……リアン」

唐突に響き渡る澄んだ声。

振り返れば、そこには懐かしい恩師の女性が佇んでいた。

その想像を絶した美しさは相変わらずで、流石のリアンも隣にいるエヴァンジェリンを一瞬忘れて魅入ってしまう。

『 。。。 ただいま 』

「 お帰りなさい、リアン 」

何とか言葉を発したリアンだったが、その心の動揺に気付くエヴァンジェリン……彼女自身も同姓ながら魅入っていたが。

当然、面白くない彼女はジトツとした目を彼に向け……それに気付いたリアンは、慌てて取り繕うのであった。

S I D E キティ

まったく、リアンの奴め……さつき、隣にいる私を忘れていなかったか？

まあ、確かに絶世と言ってもいい美貌だが……私だって、負けてはいないぞ？

……負けていないよな？

自己紹介を兼ねた挨拶も終わり、今私達は食堂と思われる場所で寛いでいる……流石に恐ろしいほど広いが。

『 キティ、機嫌を直してくれ……正直、すまなかったとは思っが 』

「 ……ふん 」

『 キ、キティ 』

「 くすくす、流石の貴方も奥さんに掛かれば形無しね……あの人も見せてあげたいわ 」

まあ、恩師であり、母でもあったと言う絶世の美女を目の前にして……私の機嫌を取る事を優先したから、許してやるか。

……決して、あの女性の私を見る眼が微笑ましくて、子供を見守る様だったからではないぞ？

『……あの御方なら間違いなく見ていますよ、俺が来た事なんてお見通しだろうから』

「ふふふ、そうね」

『それで、予定ではあと一月程度で分娩する筈だが……貴女が診た感じ、どうだ？』

私の機嫌が直つたのを察したのか、リアンは私の容態を尋ねる……予測では、3月の半ば辺りだった筈だが。

「ええ、問題ないわね……胎児に異常は見受けられないし、母体の方にも不都合は無さそうよ」

『ふむ、貴女がそう言うのであれば問題はないか……ふう』

「ふふ、リアンが此処まで緊張するなんて創めてよね……愛されているわね、エヴァンジェリン？」

「う……うん」

いかん、やはり格が違うな……素直に頷いてしまった。

まあ、でも、いいか……もう一人ぐらい敵わない存在がいても。

それが同じ男を愛した者なれば、尚の事……まあ、譲る気は露程にも無いが。

「さて、半年にも満たない逗留だけどゆっくりしていつてね」

『ああ、久方ぶりの故郷だから……肩の力を抜かせて貰うさ』

「ああ、寛がせて貰おう……ゴモリー殿、私の事はキティと呼んでくれ」

「ええ、そうさせて貰うわ、キティ……私の事も呼び捨てにしてね、友として」

「ああ」

どうやら、私は得難き友を手に来たようだ。
短い期間だが、語り合うとしよう……最高の友と。

S I D E O U T

S I D E リアン

それから時間は瞬く間に過ぎていった。

キティはゴモリーと大いに語り合い、俺も久々の帰郷に破目を外してしまった……一度は王とガチバトルまでしてしまったし。

……流石に、二度目である今回は勝てなかったが。
そして……。

……ッ！

……ッ！

『産まれたかつ！？』

永い時を生きてきた俺でさえ、気が遠くなるような時間を経て……
ようやくと、時は来る。

判明していた通り、二つの尊き産声は扉を隔てて尚、元気良く聞こえ……俺は扉が開くのを辛抱強く待った。

そして、先ほど以上にもしかしい十数分が経過した後……扉は開け放たれた。

『……ッ！ゴモリーッ！』

「焦らなくても、母子共に大丈夫よ……まだ様子見は必要だけど、
ね」

『……そう、か』

「ほら、早く奥さんの手でも握ってあげなさい……異常がないとは言え、急速に成長した肉体にとって、双子の出産は想像を絶するほどに辛かった筈よ」

『わ、分かった』

こういう時、男って言うのは本当に役立たずだな……そう苦笑しながらも、笑みが浮かぶのを抑え切れなかった。

部屋に入ると、直ぐ目にはいったベッドの上にキティは居た……酷くやつれてはいるが、その表情はやり遂げた者のそれだった。俺を目にすると、極上の微笑みを浮かべてくれる。

『お疲れ様、キティ……今はゆっくり休んでくれ』

「リ、アン……」

『ああ、安心しろ……ずっと傍で手を握っていてやる』

「……うん」

俺の言葉に安心したのか、キティはゆっくりと瞳を閉じ……眠りに就いた。

俺は彼女の手を包むように握りながら、傍に感じられる二つの存在に目を細めるのであった。

……名前を決めないと、な。

S I D E O U T

星の申し子と、その加護を受けより霊的な存在へと進化した外れし者……その間に生まれし双子は、非常に稀有な御子らだ。

堕ちた世界に生まれし星の意思を継ぐ双生児、か。

何れにしる、見守る必要はあるう……新たな可能性を。

此処ではない何処かで、そんな会話が行なわれた。

リアンとエヴァンジェリンは魔界で盛大な祝福を授かった後、再び麻帆良へと帰ってきた。

ただ、予定と異なる事もあり……結局、双子誕生から一年近く滞在する事となった。

まあ、ある意味……親であるリアン達以上に双子へと関心を寄せた御方達の勧めのせいなのだが。

想像を絶する御方や女王陛下から祝福を得た為か、双子の経過は非常に良く……生まれ育った場所の為か、通常の赤子よりも体の成長が著しかった。

『ふむ、空気の違いによる変化は受け入れられた様だな』

「ああ……ふふ、そんな事知るかとはかりに眠っているな」

まず麻帆良の守護者たる大樹の精に報告した二人は、家への道のりを歩いていた。

リアンとエヴァンジェリンの腕の中で眠る赤子達は、自身を護る彼らの胸元にしっかりと抱きつきスヤスヤと眠っている。

『……しかし、何故こうも問題が舞い込むのか』

「……ああ、全くだ」

一転して、顔を顰めるリアン達。

それは大樹に報告した時に聞いた事故だ。

「……突如、現れた謎の少女か」

『時空震を感じたらしいから、間違はなく逆行者という奴であろう……まったく、何を考えているのだから』

「ふん、そんなもの空想の中にしかいないと思っていたがな……傍迷惑な」

大樹の報告とは以下の様なものであった。

友よ、まずは祝福を述べさせて貰う……我が事のように嬉しいぞ

しかし友よ、煩わしい事も告げねばならない事を許してくれ
アレは、新たな年が明けて少し経った頃であった……突如、

我が内に一人の少女が現れたのだ
その少女は、時空のうねりの中より現れた……それも、次元の壁を壊して

非常に申し訳なさそうにそう語る大樹の精であった。

『友の言葉から察するに、間違いなくそいつは違う存在であろう……』

……ならば、その者の言葉にはそれ程力はない筈だ』

「……なるほど、アレはそういう意味だったか。ならば、此方に取り込んでおいた方がよいか？」

最近、大樹の精の声が聞こえるようになってきたエヴァンジェリンが言う。

『……そう、だな。余り不確定な存在は招きたくないが、今後を考えるならばそれも致し方ないか』

リアンはそう言いながら、己らの腕の中で眠る愛しい子達に視線を落とした。

「ああ……この子達の乗り越えるべき存在ならば話は別だが、間違
いなくそんな事はないだろうからな」

エヴァンジェリンも、そして辺りで祝福するように舞う精霊達も……
…安らぎの中で眠る赤子らを見やる。

全てはこの御子達の為に……。

第十九章 星誕（後書き）

次回は9/11の0時です。

第二十章 相違

SIDE 超

私は超鈴音、100年後の火星からやって来た火星人ネ
来訪理由は只一つ……未来の火星で凄惨な出来事が起こった為、そ
れを修正する為にやって来たのだ。

諸々の準備を済ませ、幾多の策を手にこの時代へとやって来た私は
まず時代の確認をしたネ……まあ、見つかる訳にはいかないから直
ぐに身を隠したが。

で、目指した時代と誤差がない事を知った私は、次に主要人物の生
存と背景を調べたネ。

御先祖様であるネギ・スプリングフィールドは受け継がれていた通
り、魔法学校にいるようだった。

ただ、それ以外は無茶苦茶だったネ！

まず、直ぐに気づいたのは世界樹が無い筈の高度な結界に覆われて
いる事ネ……幸い、世界樹から出る時は図書館島を経由したから問
題なかったけど。

次いで、麻帆良大結界がほぼ機能していないという事……これも最
低限の認識障害は働いているようだが、色々と疑念は尽きないネ。
これだけでも大問題だと言うのに、麻帆良にいる主要人物にも大き
な違いがあった。

第一に此処のNo.2である筈の高畑・T・タカミチ氏は存在こそ
するものの、若いままであり……何故か死んでいる筈のガトウ氏が
存在した。

そして、裏の世界で恐れられている真祖の吸血鬼・エヴァンジェリ
ン・A・K・マクダウエルは清らかな存在と訂正されており……何

故か、麻帆良には居なかった。

これは計画を実行する上では助かるが、御先祖様的には非常に不味いネ！

他にも色々相違点はテンコ盛りだし、一体どうなっているのだから……誰か私に教えるネーッ！？

……はっ？！

し、真の天才と呼ばれた私とした事が、見つとも無さを露呈するところだったネ。

……Be cool、Be cool。

「と、とりあえずやれる事からするとしよう」「その前に俺と同行してもらおうか？」「……か？」

だ、誰ネッ？！

此処は私が造った、私だけが入れる場所の筈……っ！

慌てて振り返った其処には、大柄な一人の男が着流し姿で立っていた。

「ふむ、想定外な事には意外と脆い、か？まあ、どうでもいいか……

……お前の疑問に答えてやるから、付いて来い」

「……………っ」

突然私だけの空間に現れた男は、言いたい事だけ言つと……開かない筈の扉を開け放った。

何故、あの扉が開くネ？！

アレは百を越える電子の精霊によって管理されている筈なのにつ！？

いやっ、そもそもどうやって此処につ？！

「…………ん？ああ、言っておくが、俺に精霊を介したものは意味を成さないぞ？そして、俺に行けない場所は…………まあ、早々無いな」

男はそう言つと、付いて行くのが当然とばかりに外へと出て行つた。
…………くつ、此処は付いて行くしかないのか？

時は西暦2001年、2月。

私が連れられて行つたのは、世界樹よりほど近い森の中にある一軒家だった。

その様式は私の得た過去の情報にある、闇の福音のそれに酷似していたが…………まさか、此処に居るといふのか？

「帰つたぞー」

「…………お邪魔するネ」

通された先は居間の様で、其処には一組の男女が居た…………男の方は、私を連れて来た者と瓜二つだ。

「ふむ、お前がそうか…………よく来た、と言つておこつか」

『俺はリアン、こっちは妻のキティだ…………ようこそ、違えた逆行者』

『お』

ッ

私の正体が知られている！？
いや、違えたとはどういう意味だ？

それにこの男、念話で話すとは……何者ネ？

『まあ、グダグダ引つ張つても仕方が無いからな……答えから言おうか、キティ』

「ああ……違えた逆行者よ、此処はお前が目指した過去の世界に非ず。故にお前の願いは叶わない、万が一にも……な」

なん……だと？

「どついつ、事ネ」

「言った通りさ……お前は時間だけでなく、次元をも越えてしまったのだよ。いわば、この世界はお前からすれば平行世界と言う訳だ」
『既に、思い知っているのではないか？未来で得た過去の情報との相違を、思い描いていた世界と違つ現実を』

まさか、平行世界とは……しかし。

「例え、世界が違おうとも……待ち受ける未来は変わらない筈、なれば私がすべき事もまた……」

変わらない。

『ふむ、世界が違っていても未来は同じ……なるほど、魔法世界の事か？』

「ッ！」

「どついつ事だ、リアン？」

『なに、簡単な事だ。世界が違って尚、変わり様がない事と言えば……歴史の道標とも言つべき物に刻まれた大きな事件か何かだろう？で、逆行してまで覆そうとするような事と言えば……』

「魔法世界の崩壊、それしかないと言う事か」

「……………そうネ。貴方達が何者かは知らないが、私の邪魔はしないで欲しいヨ……………100年後の災いを避ける為にモ」

貴方達は何者なのかは知りたいが、ネ。

『ふっ、言っておくが……………それを持っけてしても、お前の逆行は意味を成さないぞ?』

「……………どういう事ネ?」

「簡単な事、リアンには魔法世界を救う手立てがあるという事だ……………それも、救いのある救う手段が、な」

「なっ?!」

ば、馬鹿ナツ?!

一個人に一つの世界を救う術があると言っつのカツ!?

『まあ、その詳細を明かす気は無い……………俺にしか出来ない方法だし、な。お前が俺を知らない以上、お前の世界で実現出来るとは思えんし……………で、どうする?』

「……………それならば、一旦元の世界の未来へ帰るネ。例え平行世界に來てしまったのだとしても、帰る事は可能だろうからネ……………まあ、世界樹の大発光を待たねばならないが」

『……………大発光だと?』

「何ネ……………ツ!ま、まさか……………世界樹の大発光も時期が大きくずれているのカツ?!」

確かにまだそちらは測定していないが、そんな所にまで違いが!?

「それ以前だな……………大樹はリアンによって健康な状態に保たれているからな、発光現象など起こさないさ」

そ、そんなっ?!
それでは未来に帰れないネツ!?

『大樹は俺達にとって身内だ……だから、当然その身に負担が掛かるような状態になどさせんよ』

「ちなみに、私達は大樹の精と会話ができる……その意味は、解るな?」

「……そ、そのような事が?」

『まあ、もし仮にお前に帰る手段があるとすれば……一つは大樹の発光だが、最低でもあと5年は掛かる。もう一つは俺の力で送り出す方法だが、これも実行する為には同程度掛かるな……崩壊対策に力を溜めないとならないから』

「どの道大樹を発光させられる筈も無いから、必然的にリアンに頼る他無いぞ……ま、神を気取った行いに対する裁きとも思っておくのだな」

ご、五年……そんな。

私は絶望のあまり、その場で気を失ってしまったネ。

ああ、何処かの誰かが言っていた言葉が思い浮かぶ……世界は何時だって、こんな筈じゃないって事ばかりヨッ!

S I D E O U T

結局、超はリアンの下につく事となった。

絶対的強者であるリアン達を敵にまわしたいとは思わなかったし、彼らの教えを請いたかったという理由もある。

それは時間を無駄にしない為、少しでも更なる可能性を探る為であったが……それは彼女の考えに影響を及ぼす事となった。

「何?お前、そんな事をやろうとしていたのか?」

「そうネ、裏に隠れている魔法使いを表に出し……その力と極限にまで高まった魔法科学の力を持ってすれば、あの悲劇は回避される筈ネ！」

『……ふむ。まあ、お前がそう言う以上、お前の居た未来に至るまでそうはならなかったのだろう……それならば、ある一定の薬効は得られるだろうな』

「確かに、ある一定は……しかし、その選択はそれ以上の効果は得られんな」

超の考えを聞いたリアン達はそう答えた。

「どついう事ネ？」

『お前という要素が、お前に繋がる過去へと赴いた時より……その未来の因果が流入し、歴史の辿るべき道筋がある程度定まってしまつ。また本来在りえない筈のお前が紛れ込む事で、過去の存在にある程度の変化を齎す……さて、この二つの要素が齎すものは何だろうな？』

「それは一体、どついう……っ！」

「まあ、お前の頑張り次第で多少の方向転換は出来るだろうし、ある程度の変化は齎されるだろうが……挑むべき事象は避けられないという事さ」

『俺はお前の行為を肯定する気は一切無いし、才覚が多面的に亘っているのは正直素晴らしいと思うが……自分は旨くやるなどと言っている内は、まだまだだぞ？』

「ッ」

正に自身が思っていた事を言い当てられ、動揺してしまつ超。

「まあ、私達はお前に特に感心は持たないが……自身の悪を貫くならば、もっと自分を大事にするのだな」

「な、何の事ネ？」

『そうだな……決死の覚悟で事に当たるのはいいが、後の事を考えていない者に未来は築けないぞ？』

「……………」

『まあ、何にせよ……お前は会おう筈の無い俺達に出会った』

「それがどのような意味があるのかは分からんが、少なくともいい機会ではあった筈だ……精々、此处に留まる五年でもう一皮剥けるのだな」

最早、返す言葉も思考もない超。

この先、リアン達に弄くられた彼女がどう化学反応を起こすのか……それは見てのお楽しみ

第二十章 相違（後書き）

次回は9/12の0時です。

第二十一章 経過（前書き）

注意

一部設定が原作と違う部分があります。

何処とは表記致しませんが、その事を念頭に置いてお読み下さい。

まあ、それ程気にするような事ではありませんが。

あと、この作品での茶々丸の名前が決まりませんでした。・・・
ノ、（

違和感の無い名前ありませんか？

……もういっそ、茶々丸のままでもいいかな？

> 克己様の提案を採用させて頂きましたm（）———（m

第二十一章 経過

SIDE 音々^{ねね}

私は超鈴音及び葉加瀬聡美主導で製造された靈動式ガイノイドです。もともと、最も重要な内部機関についてはマスターであられるリアン様とエヴァンジェリン様によって大幅改修されましたが。

私が製造されたのは、幾つかの目的の為なのですが……マイスターである超からの情報によりますと、既に叶ったも同然なのだそうです。

「ま、この世界では……だけどネ」

それでも喜ばしい事だヨ……そう呟く彼女の表情は、言葉の悲壮さとは裏腹に晴々したものでした。

そういう経緯もあり、主だった存在理由はマスター達を補佐する事であります。

「お前が成長してくれば、そのデータは向こうでも大いに役立つネ……だから、ドンドン経験を積むがいいヨ」

そんな超の言葉もあり、日々頑張っております。

さて、初めての方もいらした事ですし、本日は私の一日を語りたと思います……私という者を知って貰う為に。

私の一日は、日の出と共に始まり、先輩であられる音無姉様と共に朝食を準備します。

この時、アスナ姉様を初めとしたお子様方も起きて朝の鍛錬に励まれます……まあ、チャチャ姉さんだけは朝食までお眠りのようですが。

その後、お子様方が朝のシャワーを浴びる頃……旦那様達が起きてこられます。

旦那様は実子であられる二人の御子様……アステール様とステラ様をあやし、奥様はそんな御子様の御飯を用意されます。流石に幼い御子様の食事は、私には任せて貰えませんが……精進あるのみです！

「まあ、お前の作る物に不満はないのだが……食事ぐらいは私自身がやってやりたいから、な」

……どうやらこの件に関しては、以後も代われないようです。これが残念という感情でしょうか？

朝食を食べた後は、次女であられるチャチャ姉さんと近衛木乃香さん、桜咲刹那さんと共に中学校へと赴きます。

長女であられるアスナ姉様は少し遅めに大学へと行かれます。

「……何デ、俺ダケ小学校カラダツタンダ？ イヤ、マア容姿的ナ問題モアツタンダロウガ……納得イカネエ」

私が中学校から通う事になった時に、チャチャ姉さんが溢したお言葉です……まあ、姉さんは小さくて可愛いですから。

……口に出して言うと怒られますが。

木乃香さんと刹那さんはそんな姉さんを宥めながらも、楽しそうに

しておられます。

これは又聞きの話なのですが、お二人には寮へと移る様に指示された事があったようです……言ったのは学園長なのですが。

しかし、そのような話は当然の如く旦那様の御言葉で撤回されました。

『馬鹿か、お前？ 呪術協会との関係悪化を防ぐ為に、向こうが信頼を置く俺の所に置いていけると言うのに……そんなに戦争したいか？』

学園長を前にして言った旦那様の御言葉です。

生まれたばかりの私が考察しましても、学園長の言葉は短慮としか思えません……一体何を考えているのでしょうか？

その時傍に居たガトウ氏も、旦那様同様呆れて小言を仰っていたとの事……これからの生活の為に、彼には頑張つて欲しいものです。そのガトウ氏ですが、旦那様の助言もあり部下の育成に余念が無いようです。

何せ、学園長がアレですから……良き変化を待っているよりかは、建設的でしょう。

『教育機関の仕事と、外回りの裏仕事を両立させるなど根本的に不可能だから……未来ある学生の為に、手足は増やしておけよ？』

「……確かにそつだな、学園長には期待出来んし。俺とタカミチ君だけでは足りない、か」

『あと、物事を考えるのに魔法云々を織り交せて考えない部下を育成しろよ……正直、腕はともかく質が悪すぎるぞ』

「……貴方が手伝ってくれたら、結構簡単に纏まりそつだが？」

『馬鹿言え、俺なんか台頭すれば英雄えいさとして祭り上げられるのが落ちだ……それに俺には大事な仕事が控えている、そんな瑣末な事に付き合っている暇はない。まあ、お前が何とかするのだな』

以上が旦那様とガトウ氏の会話です。

最近では、ガトウ氏の働きであるう効果も見受けられるようになって来ましたが……まだまだと言うのが正直な感想です。

……引き続き頑張つて下さい、ペコリ。

さて、そのような事はともかく……学校に着いた私達は騒いでいるクラスメイトを鎮めていきます。

クラス委員長たる姉さんと副委員長たるあやかさんの手腕は見事なもので、瞬く間に統制されました……まあ、一部には姉さんの恐怖政治などと仰る方も居ますが。

……否定できないところが痛いですね。

「皆、おはよう！」

「……おはようございまーす」「……」

鎮まった教室にやって来たのは、担任を務める高畑先生です。

キツチリと白いスーツに身を包んだ彼は年若く、熟練の教育者たる空気は纏っていませんが……それでも思った以上に努力されているようです。

最近はこちらに専念する事を改めて決意したのか、新田先生などとよく話し合われています……第二の鬼教師が誕生するのでしょうか？

「うん、今日も皆休み無く来ているね……それじゃあ、今日は連絡事項も無いから最初の授業準備をして置くように」

「……はい」「……」

そうでした、大事な事をお知らせしていませんでした。

何と、私のクラスには一人の幽霊が居たのです。彼女はずっと、此処麻帆良に括られていたようなのですが……姉さんがこの教室に来た時に気付き、旦那様にその事を話したのです。その結果、その幽霊さん……相坂さよさんは見事現世に舞い戻る事に成功しました、大地の精霊として。

当初は人形に憑依させるか、ホムンクルスの体を与えるかの二択だったそうです。

しかし、さよさんの霊体が完全に麻帆良に括られていると判明した時から、計画は大幅に見直されました。

『完全に此処に括られている以上、先の方法を実行したところで此処から完全に解放される事は無いだろう。まあ……一時的に離れる事ぐらいは可能だろうけど、な』

「……確かにそうだな。それに、此処に括られている以上……ありうる未来は消滅か永続かのどちらか、か」

『なら、彼女の“友達を作りたい”という願いを優先するべきか……なら』

という事で、実行されたのが……さよさんの精霊化です。

括られていた麻帆良の大地と正式な契約をし、霊格を上げる事で実体を持つ精霊へと進化しました。

その結果、寿命の概念も無いに等しくなってしまうましたが……旦那様が仰るには、位階を上げていけば何れ自然消滅する事も可能だそうです。

こうして体を得たさよさんは病状から復帰したという事で迎えられ、今ではクラスに解け込んでいます……姉さんと旦那様の偉業ですね。

学校を終えた私達は、家路につきます。

他の方々は修行をしたり、遊びにいかれたりしますが……私は誕生

間もない頃に出会った、ネコさん達の世話に夢中になっています。
基本ネコさん達は教会裏に居られますが、今日のように家に居る場合もあります……私のネコさん感知レーダーは伊達ではありません、キリッ。

「にゃー」

「うにゃーん」

「お待たせ致しました、ネコさん達……今日はグランタムール家謹製のネコ御飯ですよ」

「……ニヤニヤ〜ン」「……」

「あ、ああ?! い、いけません、そんなに群がられてはっ!?!」

極上の御飯に目を奪われたネコさん達は、無力な私に群がってきました…… ああ、そんな所に入ってもご飯はありませんよ!?

払い除ける訳にもいかず、ネコ塗れになってしまった私…… ああ、でもこれはこれで。

「何をしているのだ?」

「……あ、ノードウス様」

気付けば傍に旦那様の式であり、分身でもあるノードウス様が居られました。

彼は私に張り付いたネコを丁寧に剥がすと、餌を地面に置きそちらへと誘導して下さいました。

「ありがとうございます、助かりました」

「まあ、いいがな」

ノードウス様は神出鬼没な方です。

普段は何処に居るかさえ掴めない不思議な方で、それでも願えばい

つの間にか傍に居てくれる……そんなお人です。

ノードウス様と連れだって家の中に戻った私は、メイド服に着替えます……此処ではこれが私の戦闘服ですから。

居間にはアステール様とステラ様が旦那様と居られました……どうやらご本を読まれているようです。

「只今戻りました」

『お帰り、音々。夕食は音無とキティが準備しているから、洗濯物を取り込んでおいてくれ』

「はい、かしこまりました」

この後、帰ってこられた方達と夕食を食べ、入浴で体の汚れを落します。

そうです、私は飲食も入浴も可能なのです……これも旦那様のお陰なのですが。

『折角一緒に暮らすのだ、行動を共に出来ないなど寂しいではないか』

その御言葉から当初は動力源のみ魔法と融合させる案が取り消され、ガイドノイドとしての部分に精霊の加護が与えられ……動力源には霊素と呼ばれる命の源が籠められました。

これにより、私は飲食をすれば其処から栄養と摂取し、入浴しても水に害される事も無く……内に秘められた霊素は私に真の意味での成長を齎せてくれます。

……この部分だけを見るなら、旦那様が私の創造主ですね。

『ん？ どうした？』

「……いえ、本日はこれで休ませてもらいます」

『ああ、そうか……お休み』

「はい、お休みなさいませ」

一日の終わりは、必ず旦那様に告げてから眠るようにしています。

補佐をする者としては、純粋なガイドノイドの方が便利だったのでしょうが……私はこの体を気に入っています。

お仕える方達と同じ感覚が持てる、この体を。

それでは皆様、お休みなさいませ。

S I D E O U T

第二十一章 経過（後書き）

次回より原作開始（魔法学校卒業）になります。

次回も区切りという事で、設定を晒したいと思います。

更新は9/13の0時です。

第二十二章 開始（前書き）

第三部開始です。

この部は夏休みまでを視野に入れていきます。

あと、前回告知したようにあとがきに設定を入れておきます。

今回はグラントムール家の住人についてです。

第二十二章 開始

2002年7月。

此処、メルディアナ魔法学校では卒業式が行なわれていた。卒業生が立ち並ぶ場所には、5年前入学したばかりのネギの姿もあった……そう、彼は7年の課程を5年で卒業してしまったのだ。

「卒業証書授与　この七年間、よく頑張ってきた……だが、これからの修行が本番だ。気を抜くではないぞ？」

そう告げるのは、魔法学校の校長であるネギの祖父である。彼は言葉とは裏腹に、現状の儘なら無さに苦虫を噛む思いだった。

「（何が本番、だ……孫も護れぬ者がぬけぬけと）」

彼の視線は、手許にあるネギの卒業証書に注がれていた……彼は知っているのだ、その内容を。

無論、それは儘ならぬ事象に対する自身らの悪足掻きの結果なのだ……その齎した結果を思うと、居た堪れなくなるのだ。

「（せめてもの救いは、行き先に最高の救い手がいる事か……不甲斐無いワシを赦してくれ、ネギよ）ネギ・スプリングフィールド君
「！」

「はい！」

返事をするネギ・スプリングフィールド。

180cm程度の体軀を真っ直ぐに伸ばし、屹然と歩いていく姿は正に美丈夫。

そんな彼の姿を法悦と眺める者は多数……ただ一人、同じ卒業生の

アーニヤことアンナ・ユーリエウナ・ココロウアのみが慥然としていた。

「(まったく、幾ら切羽詰まった状況だったからってアレはやり過ぎよ！まあ、アリカ小母様の事を思えば仕方ない部分もあるのでしようけど)」

彼女が思い出すのは、ネギが魔法学校へと入学して少し経った頃の事だ。

その頃には彼女もネギの事情を知らされ、影ながら協力するようになっていた。

それはいいのだが、クルト氏より元老院の方針変更をリークされた事で状況は一変する。

何故なら彼らは対象が消せないと理解すると、取り込む方向に動き出したのだ……何かと理由をつけて、召集する方向で。

無論、そのような事を見過ごしてしまうほど耄碌している校長ではなく……アリカやノードウスと相談の結果、その下部組織である麻帆良に避難させる事にしたのだ。

……もつとも、それが学校の先生などという課題になるとは思いもしなかったが。

その事実にもたもや憤然となるアリカ達であったが、自分達の現状を思い耐え忍ぶ事にした。

ただ、此処で予想外な動きをする者が居た……ネギだ。

彼はその年齢にそぐわない聡明さ故に、自身が先生をする意味を考えてしまった。

「ねえ、ノードウス……僕が教える人達って、何歳の人？」

そしてその言葉で、ノードウスも彼が何を思ったのかを理解した。

「……情報によれば、中学生との事だ」

「じゃあ、14歳ぐらい？ ……それって」

「確かにネギの考えている通り、本来ならばあつてはならない事だ
……幾多の生徒を導く者が年下というのは、な」

だからこそ、ノードウスは誤魔化さない事にした。

それに彼はこれがある意味必然だったのではないか、とさえ考えた
……何故ならば。

「……お母さんと暮らせるのは、あと4年ぐらいなんだよね？ そ
して、現在僕は4歳」

アリカはその使命上、ネギと共に居られるのは五年間だけである。
そして既に一年と少し経ち、ネギの才覚を思えば卒業はそう時を置
かないであろう事は想像に難くない。

「お母さんの住んでいる所はダイオラマ魔法球で、時間設定が出来
る高級品だった筈……なら」

「……ネギ、お前の考えている事は分かるが……それでいいのか？」

「ノードウス……うん、僕自身の都合に一般人を巻き添えには出来
ないし……お母さんとも予定以上に一緒に居られるんだもん、否応
はないよ」

それから先は早かった。

アリカも最初は止めようとしたが、それで状況が好転する訳でもな
く……ノードウスという頼れる師もいる以上、ネギの思いつきは妙
手であろう。

結果、アリカ達が隠れ住んでいた魔法球は時間設定を大きく変え…

…計画を練り、卒業する頃に肉体年齢が18歳程度になるようにした。

まあ、アリカの方はナギ関連や今後の事を考え使用頻度を少なくしたが。

ネギの魔法球使用は瞬く間に知れ渡った。

まあ、有名人の息子が成長著しいとなれば何かしていると思うのは当然であろう。

当然、教師達はそれを控えるように忠告したが……。

「僕は再びあのような悲劇に巻き込まれた時、最低でも自身の身を護れる程度の力が欲しいのです！ その為には、時間が圧倒的に足りない……それ故に、止まれません！」

そんなネギの声を聞けば、流星に止める事も出来なかった……その悲劇の凄惨さを知るが故に。

それに止めなかったのは、何もそれだけが理由ではない。

日々、圧倒的なスピードで強くなっていくネギを見ていたかったと言うのもあるう……ネカネや校長などは痛ましげだったが。

そんな彼らとはまた違った感情、取り残される恐怖に身を焦がしたアーニヤは思う。

「（まあ、私も便乗したからある程度は成長しているけど……完璧に追い越されてしまったわね）」

そんなアーニヤの現在における肉体年齢は、14歳……神の戯れか、はたまた必然か。

とにもかくにも、卒業式はやがて終わりを迎えた。

卒業式を終えたネギとアーニヤは、ネカネを伴って即座に帰宅した。双方共に、未だに課題内容は窺っておらず……神妙な顔つきでアリの許に赴く。

「帰ったか、ネギ……して、どうであった？」

三人を迎え入れたアリカはまずそれを訊ねた。

「まだ見てないよ、母さん……アーニヤもね」

「ネギの方は以前言っていた通りの内容だろうけど、私も何か変わっている気がするのよねえ……想像通りなら、返って好都合と言えなくもないけど」

そう言いながら、二人ともに巻いていた証書を開ける……そこには。

日本で先生をする事。(ネギ・スプリングフィールド)

日本で生徒をする事。(アンナ・ユーリエウナ・ココロウ

ア)

「っ……やっぱり、思っていた通りだね。校長先生が私の時にも申し訳なさそうにしているから、もしやとは思ったけれど」

「アーニヤもなのっ?！」

「だね、これ幸いとアーニヤも取り込むつもりかな？」

「さて、な……まあ、身内がネギの傍に居てくれるのはありがたいのじゃが」

机に広げられた証書を前に、その場にいる全ての者が溜め息をつい

た。

「まあ、いいや……とりあえず、向こうには早めに行った方がいいよね?」

「ああ、私もそろそろ行かねば不味いだろうし……どうなのだ、ノードウス?」

「ふむ……あと、一月といったところだな」

傍に控えていたノードウスから帰ってきた返答に、今後の予定は決まった。

「ところで、ノードウス……ネギとアーニヤはどの程度にまで高められたのじゃ?」

「さあな……俺にとって強さというものは結構曖昧だからな。とりあえず、魔法に関してはそれぞれの得意とする属性と補助魔法を完全に修得させた……その制御も、な」

「私は治癒魔法も習ったわよ、ネカネさんに……何処かの誰かさんが、生傷絶えなかつたからね!」

「うっ、アーニヤには感謝しているよ……どうにも、僕はそっちな才能余り無いみたいだから」

簡易的なものは遣えるけど、ね……そう呟くネギ。

しかし、ネギの表情に焦燥はない。

彼は己に出来る事、出着ない事をきっちり把握した上で……諦めないでいい方法を、日々模索しているからだ。

そして、それ以上に人との繋がりの大切さを学んだからでもある。

「まあ、何にせよ……これからが本番じゃ、呑み込まれない様気をつけるのじゃぞ」

「うん、重々承知しているよ……母さん」

人の醜さは嫌というほど教えられてきた、自身の父が成した事は裏も含めて教えられてきた。待ち受ける魔法世界の問題も、それに連なる存在の強大さも……ネギは教えられてきたのだ。

「僕は、ネギ・スプリングフィールドだからね」

彼の瞳は真っ直ぐ前を見詰めていた。

その瞳が見つつける答えとは、一体どの様なものなのか……今はまだ分からない。

第二十二章（開始（後書き））

以下に主人公周辺の現時点（2002年7月）における詳細を載せておきます。

好きなもの、嫌いなものはその順番に並んでいます。

本文よりも長くなってしまいましたw

グラントムール家の住人紹介

エヴァンジェリン・A・K・グラントムール

身長：180cm

B/W/H：96/63/95

グラントムール家の奥様。

闇の福音時代の二つ名は公式上取り消された。

格好：基本、黒か白の衣装を好んで着る。その衣装は基本自分で作製。

好きなもの：リアン。家族。ゴモリー。たまに出かけるリアンと子供達とのデート。最近身近に感じる氷と闇の精霊達。

嫌いなもの：家族を害するもの。志の無い者。騒がしい場所。

能力：

・魔法……特に氷と闇の属性を好み、最近では新魔法を幾つか開発したりしている。精霊との縁が深まった為か、威力もやたら向上している模様。闇の魔法……精霊との更なる融和により、進化している模様。

・ 戦闘技能……糸を使った人形操作が可能で、周囲3kmの範囲で最大300体を操れる。合気柔術を極めている。

・ 家事技能……料理は結構な腕前だが、最近では子供の食事を作る程度。衣装を作れる。

アスナ・N・A・グランティアール

ネオン
アストライア

身長：172cm

B/W/H：85/57/88

グランティアール家の長女。

麻帆良大学医学部2年生。

格好：色に拘りは無いが、飾り気の無いシックな衣装を好む。大半はキティ作の衣装を着ている。

好きなもの：パパ。ママ。家族。雪広姉妹。

嫌いなもの：家族を害するもの。

能力：

・ 魔法……基本的な知識は充分過ぎるほど修めているが、使用は出来ない。

・ 戦闘技能……最近では剣術に転向して刹那やチャチャと剣を交えている。合気柔術、咸卦法、瞬動、虚空瞬動をキティに習った。現在は咸卦法の更なる発展を目指している。

・ 家事技能……料理はそれなりの腕前、どちらかと言うとお菓子作り等が得意。基本、音無達が居るので任せている。

シュトルツベル

チャチャ・S・U・グラントムール

身長：152cm

B/W/H：70/49/73

グラントムール家の次女。

麻帆良女子中学校2年A組

魔法生命体

格好：特に括りなく、音無達の用意する洋服を着ている。

好きなもの：御主人。旦那。家族。闘い。刀剣類。

嫌いなもの：家族を害するもの。弱いくせに吼える敵。怠惰な日常。
生暖かい視線w

能力：

- ・ 魔法……基本知識は修めているが、使用は出来ない。
- ・ 戦闘技能……刀剣の扱いはマスター級。元より有していた羽は、収納可能な蝙蝠型の翼に進化した。現在は更なる可能性を開拓中。

- ・ 家事技能……肉は上手に焼けるw

ノーブルノヴァ

アステール・N・N・グラントムール

リアンとキティの息子。

ノーブルノヴァ

ステラ・N・N・グラントムール

リアンとキティの娘。

エーヴィゼリマート

音々・E・P・グラントムール

身長：174cm

B/W/H：88/60/91

グラントムール家の末女兼メイド？

麻帆良女子中学校2年A組

霊動式ガイドノイド……動力源が特殊。ネジ巻きも可能だが、全身から魔力供給を受け活力に変換出来る。要するに、抱かれて魔力を発露されたら、それを吸収できると言う事……エッチな意味じゃないよ？

格好：基本、黒のメイド服。たまにキティや音無に面白がってゴスロリ服を着せられている。

好きなもの：旦那様。奥様。家族。ネコさん。

嫌いなもの：家族を害するもの。

能力：

・魔法……基本知識は修めているが、使用は出来ない。但し、動力源に働きかければ擬似的には使用可能。

・戦闘技能……インストールされた技能を自在に行使できる。ロケットパンチ、目からビームなどのロマン兵器も内臓。

・家事技能……インストールされた技能を自在に行使できる。しかし、家族と過ごす内に気持ちを込める大切さを知った。

近衛木乃香

身長：153cm

B/W/H：79/55/80

グラントムール家の客人。

関西呪術教会の長の娘。

格好：可愛い服を好む。着物姿で居る事もあり、その時は良くキテイと茶席にいる。

好きなもの：刹那。お母様。ノードウス。リアン。グランタムール家の人々。お父様。自分を護ってくれる式達。料理。呪術の勉強。

嫌いなもの：刹那を傷つけるもの。派閥争い。

能力：

・魔法……特に治癒術に長け、五行や呪術の結界術や補助術にも精通している。最近召喚した存在との友誼を深めており、秘かな目標はせつちゃんと自分を好いてくれる存在を、百体集める事……だったりするw

・戦闘技能……最近合気柔術を習い始めた。

・家事技能……母や音無などに仕込まれているので上手。グラントムール家では手伝い程度で、勉強や修行に専念している。

桜咲刹那

身長：155cm

B/W/H：72/54/76

グランタムール家の客人。

木乃香の護衛長。

烏族ハーフ。

格好：アスナ同様シックな衣装を好み、どちらかと言うと機能優先。たまに木乃香に着せ替え人形にされている。

好きなもの：木乃香。木乃香の両親。ノードウス。リアン。グラントムール家の人々。木乃香を護ってくれる式達。剣の修行。

嫌いなもの：木乃香を傷つけるもの。修行時の鶴子師範代w

能力：

・ 魔法……魔法、呪術に通じており、補助程度の呪術が遣える。

・ 戦闘技能……神鳴流剣術をほぼ極めている。式の太刀も遣える……遣える様に仕込まれたとも言つw 基本的な戦闘技能は修めており、グラントムール家に来てからは、チャチャやアスナと修行している。

・ 家事技能……肉は上手に焼けるw

音無

身長：167cm

B/W/H：88/61/92

グラントムール家のメイド長。

エヴァンジェリンの魔法人形。

格好：メイド服のみ着用。一応何種類か持ち合わせている模様。

好きなもの：奥様。旦那様。チャチャ。グラントムール家の皆様。

魔法球にいる姉妹。家事全般とそれを用いての世話焼き。

嫌いなもの：グラントムール家に敵対するもの全て。家事が出来ない事態に陥る事。

能力：

・ 魔法……知識は有しているが、使用は出来ない。

・ 戦闘技能……一般的な魔法使いに勝てる程度の戦闘技能は有している。キティに操られればそれ以上。

・ 家事技能……グラントムール家の家事全般を仕切っている。最近は超を通じて四葉五月と友誼を深めている模様。

次回は9/14の0時です。

第二十三章 成果

SIDE 木乃香

いやー、今日も此処は盛況やなあ。

うちはせつちゃんと一緒に、鈴音ちゃんが経営している超包子で晩御飯を食べています。

今日は他の皆も此処で食べているから、音無さんも此方に来て手伝っている模様……よっぽど世話出来ないのが嫌なんやなー。

「このちゃん、どうなさいました？」

「ううん、何でもあらへんよー……んー 美味しいなあ」

「はい、五月さんの腕にはいつも驚かされます」

五月ちゃんは音無さんがライバルと認めている子やからねえ、うちもこれぐらい上手になりたいわ。

でも最近は修行に明け暮れとるし、勉強優先で家事なんてさせてくれへんしなー……まあ、ええか。

そのお陰なんかは分らんけど、体の発育もええしな……せつちゃんはアレやけど。

一応とは言え、せつちゃんを餌付けするのも終わっとるしー……今は力を溜める時期やな、うん。

力と言えば、呪術やけど……うちも結構上達したで。

攻撃に関しては相変わらずやけど、治癒術や結界術の錬度や種類においてはエヴァさんのお墨付きをもらたしー……補助術も色々覚えただー。

まあ、最近は専ら怪我しまくっとる、せつちゃん達の救急箱と化しとるけどなー。

あと、忘れたらいかんのが……召喚した妖怪さんを仲魔にする事！
今まで10年ぐらい召喚し続けてきたけど、最近になってようやくつ
と100体に届きそうになってきたんよ……召喚した数は数え切れ
へんくらいやけどな。

うちが秘かに目標としとる、“せつちゃんと自分を好いてくれる存
在を百体集める”もそろそろ達成出来そうや
皆ええ子やし、強くて頼りになるんよ。

せつちゃんも同じ烏族に認められたからか、最近は陰を背負う事も
無くなったし……うん、ええ事や。

ちなみに、召喚して仲魔にした内訳は以下の通りやよ。

うちの仲魔達

- ・ 鬼族……一つ目、一角、豪腕など多種多様。全体の五割を占め
る。力に優れる。
- ・ 烏族……仲魔の三割を占める。速さや技に優れる。
- ・ 狐族……主に女性型が多い。術に優れる。
- ・ 妖猫族……数は少ないが、諜報活動などで重宝する。
- ・ 河童族……唯一の水棲種族。数は少ない。

せつちゃんの為にも、まだまだ増やすでえ

「むふふ」

「こ、このちゃん？」

「んー？ せつちゃんも最近調子良さそうやなー、と思ってな」

「あ、はい。身近に剣の達人や競い合う方もいますし、同じ烏族の
方にも色々教わっていますから……確かに充実していますね」

「うん うん」

変な劣等感も無くなったようやし、ほんまにええ事や。

「相変わらず仲いいわねえ、二人とも」

「あ、アスナさん」

「こんばんわー」

傍によって来たのは、グランタムール家の長女でせつちゃんの修行仲間でもあるアスナさん。

落ち着いた物腰で、地面に着きそうなほど伸ばされた髪が綺麗な女性や……スタイルええな！。

今日は珍しく余所行き風の洋服着てはるけど、どないしたんやろ？

「アスナさん、何か雰囲気違うけど何かあったん？」

「んー？ ああ、ちよつとこの後用事があってね……木乃香達にも関係ある事なただけど」

「私達にも、ですか？」

はて、何やる？

「ほら、前に言っていた例の子供の事よ……近々来るらしくてね」

「ああ、なるほど」

お父様の仲間やった、ナギとか言う人の子供やな。

うち以上に厄介な業を背負っているらしいけど、大丈夫なんやるか？

「聞いた話では家にもあるあの装置を多用したらしくてね、私と同じぐらいになっているらしいのよ」

「なっ？！ それは真ですか！？」

「それは、思い切った事する子やなあ……アスナさんと同じぐらいって事は、倍以上？」

「ええ、本来なら現在数えで9歳らしいわよ」

うわー、どんだけや。

「何でも課題に問題が遭ったらしくてね、それに対処する為……らしいわよ。他にも理由はあったみたいだけど……何にしる、碌な事じゃないわ」

「んー、うちらにも関係があつて……そんな事せなあかん課題？」

「……まあ、明日にでも話すわ」

アスナさんはそう言うと、エヴァさんの方へ行つてもうた……そんなに言いづらい事なんやるか？

うちらは頭を捻りつつも、明日を待つ事にした。

S I D E O U T

S I D E 刹那

皆さん、こんにちは桜咲刹那です。

私は現在、グラントムール家に配備されている別荘に來ています。

この別荘というのは非常に便利で、派手な技が数多くある神鳴流剣士の私にとってはありがたい修行場です。

「どうしたの、刹那……隙だらけよ？」

「っ！ す、すみません！」

いけない、どうやら内面に沈み過ぎたようだ。

今私の前には、アスナさんが大刀を構えて此方を見据えています。

その身は究極技法と云われている咸卦法の咸卦の氣を纏っており、翼を出した全開状態の私を凌駕するほどです。

私も咸卦法を做おうとしているのだが、中々上手くいかず……情けない事に、よく爆発している。

「せつちゃん、頑張つてなー 怪我してもうちが治したるから、思いつきやりなー」

「こ、このちゃん」

「ふふ、愛しのこのちゃんの声援を受けたのだから……もうちょっと、気をしっかり持たないとね？」

「は、はい！」

私は頬が紅潮するのを自覚しながらも、全身に氣を張り巡らす。

全開状態になった私は、通常時よりも数倍の氣を發揮する事が出来るが……その分、制御が困難になる。

まあ、それも最近は克服出来つつあり……現在は、それを攻撃に転化出来るように頑張っています。

「ふうふう……」

私が氣を高めたのに呼応する様に、アスナさんも咸卦の氣を増大させていく。

アスナさんの劍は、劍道を基本に私から模倣した神鳴流劍術を織り交ぜている。

よく遣われるのは、必殺の一撃を籠めた偽・斬岩劍や縦横無尽に周囲を薙ぎ払う偽・百烈桜華斬などだ。

どうやら、電気エネルギーを帯電させて用いる雷鳴劍などは遣えない模様で……一応、神鳴流劍士としての面目は保っている。

「……、いきます！」

私は翼を広げ、アスナさんに踊りかかった！

「いやー、負けちゃったわ……流石に愛の力には敵わないか」

「ア、アスナさん!？」

「やん、照れるわ?」

模擬戦を終えた私達は、別荘内の温泉で身を清めています。

勝負は何か私が勝ちましたが、両者共に深手を負う大惨事になってしまいました。

お陰でこのちゃんには泣かれましたし、エヴァさんには未熟者と罵られました……何故かチャチャさんは悔しがっていましたが。

「でも注意せなあかんで、二人とも? うちも思いつきりやりな、

とは言ったけど……治療が間にあわへんだら、下手すると障害を残したかもしれへんのやからね」

「ごめんなさい」

流石のアスナさんも、この状態のこのちゃんには勝てません。

私と一緒に、綺麗な土下座を披露しました。

お風呂上りの一杯を頂いていると、先日の話が持ち上がりました。

ネギ少年……話の通りなれば、少年ではなく青年でしょうが……どうやら、夏休み中に此方へと来るそうです。

「色々都合があつてね……」

そう仰る明日菜さんの表情には、些か驕りがありました。

何やら非常に複雑な事情があるそうで、その詳細は教えては貰えませんでしたけど……少し、気になります。

それはともかく、例の課題が何だったのかという話題になったので

すが……。

「えっ?! せ、先生ですか!？」

「うちの!？」

「そうなのよ、あからさま過ぎて呆れるでしょ? 本来、年下の子供を先生にする事もそうだけど……態々、二年生の貴女達の先生にするって言うのが」

「ああ、確かに……まあ、私達のクラスは魔法関係者が多数いますからね」

「それだけではないわよ……調べただけど、結構素質に恵まれた子が多いでしょ?」

あ、なるほど……仮契約による従者の量産か。

聞けば、魔力量が凄いらしいから……まあ、このちゃんには負けるでしょうけど。

「ネギは所謂イケメンで、その上天然で鈍感らしいからね……その^{ベスト}手の機会には事欠かないでしょうよ」

「「うわー」」

酷い言い様ですけど、アスナさんが此処まで言うなら気をつけておいた方がいいでしょうね。

ネギ先生自身にはその気は無くても、彼の嫌な持ち味で巻き込まれかねないですから……少なくとも、このちゃんの唇は死守しなければ!

「このちゃん! このちゃんの唇は、うちが護るから!」

「うん、護つてな せつちゃん?」

「……いや。まあ、いいんだけどね」

ネギ先生、貴方には不本意でしょうが……うちはこのちゃんを第一に考えて行動します。
もしものは、お覚悟を！

S I D E O U T

第二十三章 成果（後書き）

次回は9/15の0時です。

第二十四章 来訪

SIDE ノードウス

麻帆良学園都市、大樹の地下深くにある封印の塔。

その頂きに俺は転移してきた、イギリスのウエルズから。

俺の足元には共に転移してきた魔法球が鎮座しており、合図を送ると中から三人の男女が出てきた……ネギ達だ。

「ふう、何とも非常識なまでの能力じゃのう……まあ、助かるからよいが」

「……凄い、正に一瞬だったね」

「ノードウスさんが非常識なのは、今に始まった事じゃないでしょ……それよりこれからどうするの？」

ネギはともかく、二人とも酷い言い様だ……結構傷つくぞ。

「もう少ししたら本体が来るから、ネギ達は彼についていけ……まあ、その前にアリの封印の儀式があるが」

「そうじゃ、な。……そうじゃ、ネギ……一度、父の姿を見ておくか？」

「……父さん？」

『ああ、それがいいだろう……例えどんな姿でも、な』

「「わっ?!」」

アリカ達が振り向けば、ネギ達の背後にリアンが立っていた……相変わらず人を脅かす登場の仕方だ。
む、どうやらアスナもいるようだな。

「リアンか……まったく、脅かすでない」

『すまんな……まあ、そんな事よりも……アスナ？』

リアンが声をかけると、彼の背に隠れていたアスナが出てくる。

「……ア、アスナ？」

「……久しぶり、アリカ姉さん」

呆然とするアリカを他所に、彼女の前に進み出てその手を取るアスナ。

そう言えば、アリカはアスナの変わり様を知らなかったな。

「ほ、本当にアスナなのか？その髪と瞳は？」

「これは能力を封印して貰った時に、こうなっちゃったの……まあ、正体を隠す意味では、都合良かったから気にしてないけど」

「そ、そうなのか……」

アリカはアスナの言葉に頷きながらも、感慨深げにその頬を撫でたりしている……まあ、最後に見た時はまだ幼かったからな。

「……大きくなったな、アスナ」

「うん、パパとママのお陰……ごめんね、姉さんの力になれなくて」

「ふ、何を言う……妾はそなたが幸せに暮らしてくれていれば満足じゃ」

軽く抱きしめ合いながら、語り合うアリカとアスナ。

そんな二人を見詰めるネギは小さく呟いた。

「あの人が僕の……」

『そつだ、お前の叔母に当たる存在だな……まあ、此处では秘匿しているから口に出すのはNGだが』

「リアンさん……、僕はどう接すれば？」
「ん？ そうだな、別に隣のお姉さんのな付き合い方でいいのではないか？」

まあ、色々と複雑な間柄だからな……戸惑いぐらいは懐くか。

それにネギは年齢こそ18歳だが、魔法球に籠っている間は修行や勉強の時間の方が永かったからな……最近に至っては、アリカや俺あとアーニヤぐらいとしか顔を合わせていなかったし。

色々な裏事情や世界の現実を知って尚、擦れなかったネギだからそれほど心配は要らないだろうが……何故だろうな、嫌な予感がするのは？

そうこうしている内に、アスナとアリカは照れ合いながらも微笑みを交わし……ネギの方へと向き直った。

そして、アスナはネギとアーニヤを交互に見比べてから挨拶をする。

「貴方がネギね、初めましてアスナです……それで、隣の子は貴方の彼女か何か？」

「……は？」

「ちよ、ちよつとー?! 何言ってくれてんのよーっ!？」

「アレ……、違った? んー、微妙な距離感だったからそういう間柄かと思ったのだけど……違っていたのなら、ゴメンネ?」

「いえ、アーニヤはアーニヤですし……彼女、ではないですけど」

「あら、そうなの……ちっちゃくて可愛いと思うけど」

「小さい言うなあ ツー!!」

アスナの奴、アレは絶対ワザとだな……まあ、変な緊張感が抜けたからいいが。

弄くられたアーニヤは、ご愁傷様としか言えんが……アスナなら旨く宥めるだろう。

そんな三人を微笑ましそうに眺めているアリカが印象的な一幕であった。

何とかアーニヤの機嫌も治まり、改めて挨拶を終えた後……いよいよ封印の間に赴く事となった。

凍える空気が充満する螺旋階段を降り、辿り着いた其処にはリアンの記憶のままの状態が保存されていた。

「こ、此処が封印の間ままね……む、無茶苦茶、さ、寒いんだけど」

『まあ、此処の冷気は並みの防護膜では遮断出来ないレベルだからな……これでどうだ？』

「あ……寒くなくなった？」

よくよく考えてみれば、このメンバーの中でアーニヤだけが防御に乏しかったな……攻撃力はそれなりにあるのだが。

ネギはその地力で強化された防護膜で防いでいるし、アスナは咸卦法を纏っている。

アリカに至っては、王家の魔力で寒さなど寄せ付けていない……何気にアリカがチート臭いな。

「さて、ネギ……あの奥に鎮座しているのが、お前の父であるナギ・スプリングフィールドじゃ」

「アレが、父さん……」

『まあ、始まりの魔法使いに憑依されているから顔は窺えんが、な……でも、あそこにいるんだよね』

流石に一時は追い求めそうになった父の姿だけに、感慨深いようだ

な……今は見る影も無いが。

「手前の人は誰なの？」

『アレは、ナギの仲間のアルビレオ・イマという奴で……幼女趣味な上に、他人の半生を収集するという、真性の変態だ』

「酷い言い様じゃのう、否定出来んが」

「……アリカさんも否定しないって事は、本当に変態なんだ」

憐れ、アルビレオ。

知らぬ間に、少女に変態の烙印を押されるとは……いや、今更か。

「さて、それではアルと交代するでしょう……妾はどうすればよいのじゃ？」

『まず俺が開封するから、その後に以前と同じくナギに封印の魔力を施してくれればいいさ』

「それはいいのじゃが……時の大秘法とやらは、アルにしか行使出来んのではないのか？」

まあ、魔導書の精であるアルビレオのみに赦された魔法だからな……
…本来は。

『アルビレオに出来て、俺に出来ない事は基本無いぞ……あいつにしても今後は自由に動けてくれた方が、色々都合がいいしな』

「……お主という男は、何処まで規格外なのじゃ」

「姉さん、パパだもの……考えるだけ無駄よ」

「流石ノードウスさんの本体、と言うべきなのかしら？」

「アーニヤ……アスナさんの言う通り考えないのが一番だよ、多分」

何だか酷い言われようだが、そうこうしている内に……リアンはアルビレオを覆っている氷と封印を解き放った。

砕け散る氷の結晶は幻想的だったが、そこから摘出されたアルビレオは小鹿のように震えていた……まあ、無理矢理引き釣り出されればそうなるか。

『よし、それではアリカ……枷が弱まる前に、封印の魔力を』

「うむ」

「……な、何事も無く……は、話を進めないで、下さいよ」

アルビレオがか細く抗議の声を上げていたが、二人はそれに取り合わず封印の儀を進めていった。

王家の魔力がナギの封印を更に覆いつくした時、リアンは内に眠る友の力を発動させる。

『我が内に眠りし、時の大聖霊アイオンよ……我が導きの下、かの者らの流れを留めよ』

「……ネギよ、また会おう」

『エターナル・コリン
悠久の柩』

リアンの指先から放たれた光の粒子は、アリカとナギを包み込み……生ける彫像と成した。

その様を備に見ていたネギは息を呑み、一時の別れに涙を流す……その胸に、再会を誓いながら。

封印の再強化を終えた俺達は、家まで転移した。

そこでもエヴァンジェリンやチャチャらと挨拶を交わしたが、ネギの心情を思いその日は解散となった。

そして俺はと言うと、分かたれていた半身と融合し……とある密命を受けて、魔法世界へと旅立つ。

「まったく、人使いならぬ……式使いの荒い事だ」

俺はそんな事を呟きながら、リアンが齎した結果と合流する事となった。

S I D E O U T

第二十四章 来訪（後書き）

次回は9/16の0時です。

第二十五章〈誤解（前書き）〉

注意

若干、学園長を悪し様に言っている部分があります。

第二十五章 誤解

SIDE 近右衛門

それは夏休み最後の週が始まった頃の事じゃ。

先方で課題の正式発表が行なわれて間もないこの時期に、此処麻帆良へと話題の子の片割れがやってきた。

彼女の名はアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

本題である方の卒業生、ネギ・スプリングフィールドの幼馴染じゃ。まあ、そうは言っても彼女自身も中々に優れた魔法使いであり……ネギ君の傍にいた者としての意見も貴重であろう。

……いや、今はそんな事よりも聞かねばならぬ事があつたな。

「それで、アンナ君……来訪予定は来年の筈ではなかったかの？」

「え？ はい、確かにそうですけど別に予定も無かったもので……此方の空気に慣れる為、早く着ました」

「ふむ……まあ、此方の受け入れ態勢はほぼ整ってはおるが」

「別にいいのではないですか、学園長……早ければ早いほど、交流も深められるでしょうし」

同席しておったタカミチ君がそう口を挿む……相変わらず、子供には甘いのが。

しかし、まあよいか。

「分かったわい、それでは二学期より2-Aに転入して貰おうか……担任は此方の高畑先生じゃ」

「高畑・T・タカミチと言います、よろしくね」

「はい」

調書には活発で、我が強いとあるが……流石に緊張しておるのかの？

まあ、猫をかぶつ取るだけかも知れんが。
つと、そうじゃ……ネギ君の事を聞いておかねば。

「ところで、アンナ君……ネギ君の事で何か知っておる事はないかの？ 何故かは分からんが、向ここの校長に聞いても口を濁すのでな」

「え、ああ、ネギの事ですか？ 私が最後に見た時は、魔法薬の開発の大詰めに入っていましたけど？」

「ほっ？ 魔法薬？」

「ええ、既存の物より強力な石化解除薬です」

石化解除薬と言うと、村人のアレを解呪しようとしておるという事か？

まあ、中々に悲惨な事件だったようじゃしな……致し方ないかのう？

「ふむ……後、もう一つ。お主もじゃが、ネギ君が魔法球で大幅に年を重ねていると聞いたが」

「はい、私に関しては報告の通り14歳です。対してネギは、凡そ18歳と言ったところかな？」

「じゅ、18歳?! そ、それは本当かい!？」

やはり事実なのか……聞いた当初は、何の冗談だと思ったもんじやが。
む？

アンナ君の表情が翳りおった？

「ええ、焼けた村跡から回収した魔法球を修行の為に用いていますた……復讐の為に」

「ッ!!!」

「まあ、途中で私が気付いて一緒に籠る事で……何とか、落ち着か

せる事は出来ましたけど。……ただ、今度は魔法薬に熱中しちゃっていますか」

……そういう事か。

恐らく、知り合いの魔法使いの遺品だったのじゃろつな……その魔法球は。

ならば、この事をネギ君に問い掛けるのはNGかろう？

「いや、よくやってくれた！ 人として、礼を言わせて貰うよ」

「……そうじゃな、若い身空で暗い情念に囚われる事もあるまいて」

「いえ、幼馴染ですし……両親が無事だった私に出来る事なんて、これぐらいしかありませんから」

「そんな事はない！ 君が齎した事は、非常に好ましい事だよ！」

「……ありがとうございます」

ふうむ、苦労しただけに落ち着きを身につけたという事か……幸い、とは言えんな。

まあ、彼女が入るクラスは色々な意味で騒がしいし……上手く作用すれば、また快活な少女に戻りもするじゃろつ。

わしはそう願いながら、タカミチ君に麻帆良を案内するよう命じた。

これは、始業後に聞いた事じゃが。

彼女はクラスメイトと顔を合わせる前に、口調をガラリと入れ替え

……調書にあるような性格になったらしい。

……タカミチ君が言うには、恐らく彼女らに心配を掛けない為だろつとの事。

……まったく、儘ならん世の中じゃわい。

SIDE OUT

さて、学園長と高畑氏が勝手に誤解を深めている頃……ネギはグラントムール家でリアン達と話し合っていた。

内容は、学園長との会話で気をつける事や今後の予定などだ。

何せ、ネギは魔法使い達にとっては話題に事欠かない存在である……

…事前対処を取っておくのは当然であろう。

「では、課題の文面と生徒の未来を盾に副担任に納まる様に動けばいいですね？」

『ああ、そもそも元から無茶な内容だったのだからな……幸い、ガトウの働きでまともな連中も数が揃ってきているし、何とかなるだろう』

「タカミチも教職に専念するようになったからな……問題は、爺のゴリ押しか？」

高畑はリアンの教えを受けたガトウの勧めもあり、現在は教職に専念するようになっていた。

無論、ガトウに師事する事を止めた訳ではない。

しかし高みに至るまでに支払う時間と、それによって置き去りにされるものの事を考え……教師の鑑たる新田先生に相談した上で、教職を取ったのだ。

……今では鬼の新田、仏の高畑として有名である。

「……そんなに酷いのですか？」

『さて、な。今まで俺が裏で動いてきたから、お前が麻帆良の都合でどうこうされる事はないと思うが……あの爺は悪戯好きだからな』

「ネギを2・Aに配属するように決めたのは、爺だということからな……

…火薬庫に火種となりうるお前を放り込んで何をしたいのやら」

その言葉に、何とも言えない表情になるネギ。自身が火種と渾名された事はともかく、火薬庫と称されるクラスがどういったものなのか想像付かないからだ。もつとも、それも直ぐ知れる事となる。

「チャチャのクラスには、関西の重要人物である木乃香を始め……裏に通じている者が数名、出資者の娘、異種族と話題に事欠かないからな」

『ちなみに、他のクラスはごく普通だぞ……まあ、魔法生徒が紛れているクラスもあるにはあるが』
「……………」

思わず眉間を揉んでしまったネギだが、致し方ないであろう。気を取り直して、再度注意すべき事を聞き出すネギ。

「えーと、秘匿云々は厳守するのは当然なのですが……他に注意すべき事ってありますか？」

『そうだな、まず先生としての仕事を優先する事……爺が何かしらアクションをとってくるかも知れんが、基本撥ね除ける』

「あの爺なら実害さえなければ生徒も巻き込みそうだが、な……何かするとしたら、学年末か？」

「せ、生徒を巻き込むって……っ！」

その度合いは大きく違えど、自分を村人ごと始末しようとした元老院に似た性質を感じ……警戒と嫌悪感を顕わにするネギ。

「大事の前の小事……そのたまうだろうな、爺なら。もつとも、その大事が誰にとっての大事かは知らんが」

「……………」

「まあ、それほど警戒する必要は無い……要は回避すればいいだけだからな」

「確かに……クラスにはチャチャや刹那もいるから、頼めば動いてくれるだろう」

「分かりました……一人の先生として、生徒の事を第一に行動します」

「気負う事無く、自然体でそう告げるネギ……どうやら、感情操作もそれなりに身につけている様だ。」

「ふふ、それでいい。ところで、話は変わるが……修行の方はどの程度進んでいるのだ？」

「修行、ですか？ 師から主に習ったのは風と雷系の魔法全般と補助系魔法、あと基本的な戦闘技能です……その修得後は、師との模擬戦が主でしたね」

「ノードウスを通して見ていたが、錬度に関しては問題ないだろう……ナギレベルにまで高まっているのは確実だ。ただ、独自性に欠ける所がある……そこら辺をどうにかしないと、な」

対外的には修行漬けの様に思えるネギだが、実際のところそれに費やした時間はそれほど多くは無かったりする。

無論、遊び呆けていた訳ではないが……凡そ、修行と教職に就く為の勉強、そして母との語らいがほぼ同じ割合であった。

「まあ、それはこれからどうにかすればいいさ……それに難敵はいるが、何もネギばかりが相手にする必要は無いのだからな」

「……『完全なる世界』、ですね？」

「ああ、始まりの魔法使い……『造物主』ライフメーカーなどと呼ばれている存在

が創った組織だが、その設立は魔法世界の問題に気づいた時だ」

「流石リアン、よくそんな事知っているな」

妻の賞賛に、しかしリアンは浮かない顔で答える。

『……いや、これはナギに憑依した奴の記憶を覗き見たからこそ知りえた事だ……余計な事まで知ってしまったが、な』

「余計な事？」

『ああ……そうだな、話しておこう。これはキティにとっても、根幹を揺るがす大事な事だからな』

「……根幹、だと？」

余りにも真剣な彼の表情に、戸惑いを浮かべるキティ……そしてネギ。

そんな二人を前にして、リアンは語りだした……歪んだ愛の物語を。

第二十五章〈誤解〉（後書き）

次回は9/17の0時です。

第二十六章「情念（前書き）」

何とも、纏まりのない文章になってしまいました（、・・・、）／

流れが一部……と言うかかなり？ 前後しますので、解り難い所があるかも知れません。

あと、可笑しな所が多々見受けられるかも知れませんが……もし何かあれば、お知らせ下さい。

可能であれば、修正します。

……ただ、独自設定が含まれていますので、その所は考慮して下さい（、・・・、）／

第二十六章 情念

さあ、語ろう……歪んだ愛の軌跡を。

『始まりの魔法使いは魔界の出身だ……ふとした切欠で生まれた奴は、程なく孤独という物を知った』

「……まるで、リアンのようだな」

『俺には女王陛下がいたから、孤独ではなかったさ……種族的な意味では同じだろうが、な』

そんな奴も魔界を旅する内に、愛する者を娶る事となる。

その妻は……当時唯一の『完全魔法無効化能力者』であり、魔界では災厄を呼ぶ者として忌避されていた。

「完全魔法無効化能力者、だとっ?!」

「それって、アスナさんの!?!」

リアンの語りに出てきた言葉に、驚きの声を上げる二人……しかし、リアンは取り合わず先に進む。

完全魔法無効化能力者であったその女性は、災厄を呼ぶ者と忌避されていただけあり……魔界では安住の居場所などなく、身を隠し旅するより他なかった。

『そんな妻を護る為、その強大なる力と命の源たる霊樹を用いる事で魔法世界を創造……安らぎに浸れる楽園を作り上げた。それからだ、奴が『造物主』ライフメーカーと名乗りだしたのは』

そして、時は過ぎ……二人の子達が王国を築き繁栄させていく中、

始まりの魔法使いは愛する妻と死別する。

長寿の種族と云えど、永年の逃亡の日々は彼女の寿命にまで影響を及ぼしていたのだ。

その事に耐え切れなかった奴は、禁術を用い己を意識体に変換……妻の遺体に憑依し、共に在ろうとした。

愛する妻との繋がりを歪んだ形で維持した奴だったが、更なる災いに気づく事になる……そう、魔法世界を構築する魔力の枯渇だ。

『最初にそれに気付いたのは、奴がケルベラス山脈を訪れた時だ』

「……山脈？」

『そこに赴いた時、魔力が消失していく現象……魔法世界という虚像が剥がれて、現実世界の火星が剥き出しになる……を発見した時、妻との樂園を失う事を奴は恐れた』

奴は己の魔力を持って、空間を留めようとしたが……しかし規格が合わず、大爆発を起こす。

まあ、最終的に空間を閉じる事には成功したが……その地は渓谷となり、谷底には魔力を喰らう異形が住みつく様になってしまった。

「……アレはそういう経緯で出来上がったのか」

『本人にとっては不本意な結果だったのは言うまでもないが、な……で、この事から事態の重さを痛感し、対策に乗り出す事になる』

魔法世界における魔力は、奴が初めに用いた霊樹が世界に溶け込んだものである。

そして、その魔力は魔法世界を位相空間に留める源であり……魔法世界において誕生する幻想種の魂も、それによって賄われているのだ。

では、何故魔力が枯渇するのかという話だが……それは至極簡単な事である。

世界の維持に遣われる魔力は循環作用で保たれているが、幻想種が子を成し増殖すれば……循環している魔力はそちらに割り振られてしまふのだ。

無論、親が死ねばその分は世界へ返却されるのだが……人は増えるものであつて、減る事は無い。

「なるほど、要は風船と同じ事か……ある程度までは許容出来るが、一定以上を超えると表皮が張り詰め……いずれ破裂する」

「そして、破裂しないように修繕しても……いずれ、それすら追いつかなくなる……という訳ですね」

『ああ……そして、此処からキティにとっての本題だ』

「……？」

この問題に気づいた奴は、確実に子孫を生かす事を考えた……歪んだ方法で。

その当時、奴の娘アマテルが興したウエスペルタティア王国には……直系が二つ存在した。

一つは、現在まで続いているエンテオフュシア……つまり、アリカヤアスナの家系だ。

そして、もう一つが……マクダウエル。

「っ?!」

「え？」

『そうだ、キティ……お前はウエスペルタティア王家に連なる者だつたのだよ』

「ば、馬鹿な……そんな馬鹿な話があるか！ 私には魔法無効化能力は当然として、王家の魔力すらないぞ!？」

『……キティ、魔素の性質を忘れたのか？』

「……ッ、……変質させるといふアレかつ!？」

『奴は当時直系の子孫の内、もっとも愛する妻の面影を残すお前を

選んだ……そして、偽りの記憶と共に此方へと移り住ませ……不滅にする為の儀式を施した訳だ』

「……………」

その後、キティの記憶では奴を殺した事になっているが……それは仮初の分身体だったという訳だ。

「ッ」

ギリッ

「……………エヴァンジェリンさん」

「ふ、ふふ……大丈夫さ、ネギ。私はこの時代にまで生きてきたお陰で、愛しい者^{リアン}と出会えたのだ……今日までの日々を無駄などとは思わんさ」

『無論、俺はキティを手放す気など毛頭ない……ま、今のキティは俺と繋がる事で、奴の施した呪縛は切れているから影響を受ける心配などないさ』

「……………リアン」

次にそれを終えた奴は、残った子孫と幻想種達を救う術を再び模索し始める……それが、幻想種を魔力に還元して保存するという方法であった。

「え？ 全てではないのですか？」

『最初は、な……今の奴らは全てを還元するつもりで動いているよのだが』

そうして、それを実行する為に手足となる『完全なる世界^{かれら}』を大量に創造し……大戦を促した訳だ。

「え？ 彼らが創造されてから、大戦まで結構時間ありますよね……それに、何故そういう事に？」

「……そうだな、私になったのは1400年頃の筈だが」

『ああ、確かに……部下にしても、数名はもつと前に創造されていた……アマテルの番となったのも、その内の一体だし、な。そもそも、魔力の枯渇が判明したのはキティが生まれるよりもずっと前の話だ』

奴の妻、即ち初代女王アマテルの母が亡くなったのは……丁度、此方が西暦になった頃だった。

その頃には王国も発展し、女王の魔法で幾多の生命が生まれていた。

「女王の魔法……『神代の魔法』という奴か」

『要は、造物主の『創生』の力と魔法無効化能力者の『消失』の力だな……創造と破壊を自在に操れただけに、『神代』等と言われたのだ』

もつとも、創生の力は数代で消える事となる。

それは魔力の枯渇に気付いた造物主が、これ以上生命を生み出させない為に取り上げた故なのだ……が、時既に遅く。

そして、創生の力を失ったが為に……王国から離反する者が現れ始めた。

『それがヘラス帝国やアリアドネーの前身だ……まあ、離反したからと言って即対立した訳ではなかったが』

「力を失った途端、見離されるとは……憐れな」

ま、何はともあれ……そういう変化が起きている頃、造物主は魔法世界を維持する為に奔走していた。

だが、結果は思わしくなく……少なくとも、現状のまま救う手立てを見出すには至らなかった。

「でもリアンさんにはあるのですよね？」

「ああ、条件付とは言え、な……そもそも、アプローチの仕方から違うから、奴が気付かなかったのも仕方がないのだが」

奴は魔法世界を創造する時、此方の大樹に繋がるゲートを創設すると……命の息吹を位相空間に取り込んだ。

そうしてある程度空間維持に必要な力が集まった後、霊樹を空間に溶かし……莫大な魔力を発生させた。

「此処で霊樹を溶かさずに、維持の方向に持っていけば話は違ったのだろうが……奴にはそれ以外に方法がなかったようだからな」

「維持……つまり、霊樹とは魔力を生み出す存在なのですね？」

「まあ、魔力だけではないが……此処にある大樹もそうだが、霊木というものは命を育てる者だからな。大体、魔法世界が今尚存続できているのは……ゲートが繋がる度に、此方から命の息吹が流れ込んでいるからだ」

さて、話を戻そう。

何故、時間が空いたのか……何故、大戦を起こす事にしたのか……たな。

そもそも造物主にしてみれば、魔法世界とは妻の為に創った代物だ。しかし、その存在も失われ……残ったのは物言わぬ遺体と子孫、そして彼らが創りだした幻想種。

とは言え、子孫は愛する妻との間に生まれた慈しむべき存在であるし……幻想種にしても、そんな子孫の生み出したものだ。

早々粗雑に扱える筈もない。

最初は、造物主自らが各地を回って調査をした……もしかすると、救いの手があるかも知れないからな。

まあ、結局そんな事もなく……無為に時間が過ぎていったただけだが、次に行った事が、人に害する存在の消去……しかし、これも直ぐ行き詰る事となる。

『そもそも、その頃に人を害する存在など早々いなかったから……今では凶暴な幻獣にしても、その頃は大人しかった』

悩みに悩んだ奴は、とある決断をする……それが幻想種の魔力への変換。

その為の準備として、手足となる部下を創造し……各所に放った。そうして、少しずつ気付かれない程度に幻想種を魔力へと変換し……魔力が枯渇しないよう、調整してきた。

『しかし、幾ら気付かれないように行動しようと……同じ事が幾度か続いたら、疑いを持つ者も生まれるのは必然』

結果、帝国が王国を疑い始め……小競り合いが起こるようになった。そして、それによって問題となっていた魔力の枯渇は一時的とは言え、小康状態へと移っていく。

「……何とも、皮肉な結果だな。世界を維持する為に、動いた結果が……より多くの犠牲を生む事となるとは」

『まあ、奴がしていた事も所詮一時凌ぎでしかなかったが、な……ともかく、それを目の当たりにした奴は自分のしている事に虚しさを感じるようになった』

そして決意する。

ならば、己達で戦い合って……潰し合うがいい、と。
我はそれを見届け、それを受け入れた上で……お前達を夢の世界へと案内しよう、と。

『それからはお前達も知つての通り、各国の主要人物を操り……未曾有の大戦へと導いた、という訳だ』

リアンはそう纏めると、語りを終えた。

時間はもう夕刻、そろそろ子供達も帰ってくるであろう。

『何はともあれ、ネギ……お前は家族と共に暮らす為、受け持った生徒を導く為に頑張るといい』

「そうだな。こういう問題は、永く生きる我々が落とし前をつけるさ……私自身、奴には言いたい事もあるし、な」

「リアンさん、エヴァンジェリンさん……はい！」

此処に、一つの誓いは成った。

第二十六章 情念（後書き）

ふう、超 難産でした。 + ・ く) () ノ ・ + 。

あっちを立てれば、こっちが立たず……正直、自分が何を書いているか解らなくなりました。 ・ ・ () 、 () ・ ・ 。

次回は9 / 18の0時です。

第二十七章 変容

SIDE アーニヤ

2-A 転入から一週間ほどが過ぎた。

そして、その間に私は改めて屈辱感と危機感を募らせていた……主に極一部に対して。

「（……ぐぬぬぬ、何なのよこのクラスは！ 巨乳の巣窟じゃない！？） な、何とも、個性的なクラスねえー……」

「まあ、否定は出来ませんね……私としては、アーニヤさんの視線の行き先が気になるですけど」

「ゆ、夕映……、アーニヤちゃんの目が」

「（クラスの半分以上が、美乳が巨乳ってどういう事よっ！？）大丈夫よ、のどかに夕映……貴女達は仲間よ！」

「何故でしょう、喜ばしい言葉の筈なのに……反発したい衝動が」「え、え」と

私は現在、教室の一角で友達になった夕映達と喋っている……慎ましい淑女同盟と言う仲間と！

「……アーニヤさん？」

「や、やーねえ……め、目が怖いわよ、夕映」

「ゆ、夕映、落ち着いて」

「ふふ、のどか？ 私は至極落ち着いてますよ？」

不味い、不味い……夕映は怒らせると、弾幕の如く言葉の羅列で詰め寄ってくるからね。

その上、変なジュースでも飲まされたら洒落にならないわ。

それにしても、こんなクラスにネギが来たらどうなるのかしら？
あいつ自身はしつかりと目標立ててるから、生徒に手を出すなんて事は絶対ないでしょうけど……。

まず、顔はいいから注目されるでしょうね。

で、先生としても色々勉強しているらしいから頼られるでしょうし……天然入っているから、素でとんでもない事言っただけいさせそうだし。

……駄目だわ、ハーレムエンドかバッドエンドしか想像できない！

「うー、どうしたものかしらねえ」

「ア、アーニヤちゃん？　どうかしたの？」

「ん、ちょっとね……それにしても似ているわね、あのあやかっ
て人」

私は話題を逸らす為に、気になっていた事を呟いた。

それと言うのも、クラスの副委員長たる雪広あやかという子がネカネさんと瓜二つなのだ。

あのアスナって人も似ていたけれど、こっちはホントにそっくりよね。

「似ているって、誰にですか？」

「ん、私にとって姉と言ってもいい人よ……ほら、この人」

私はポケットに忍ばせているクリアケースから、ネカネさんの写真を取り出す……無論、ネギの写真を晒すような真似はしないわよ？

「ホントですー、そっくりー」

「確かに、雰囲気まで似てますね……そう言えば、彼女はクォータ

「だった筈ですから、もしかしたらそつちで繋がってるかも知れませんがね」

なんとも夕映らしい推理ね。

まあ、もしそうだったら面白いだろうけど……違っわよね？

「ところで、アーニヤさん……部活はもう決めましたか？」

「部活？ チャチャさんの勧めもあって、茶道部にしたけど？」

私って落ち着きがないからね……自分で言っただけ、悲しいけど。

それを矯正する意味でも、茶道部って選択はいいと思うわ……最近、音々も入ったみたいだしね。

ちなみに、顧問は非常勤として働き出したエヴァンジェリンさんよ。まあ、場所が場所だから……此処では偽名で通しているようだけど。

「そうですか、出来れば私達と同じ部活に入って貰おうと思っただけです」

「……そうなの？」

「はいー、廃部の危機なんですー」

確か、図書館探検部よね？

リアンさんの話では、最近になってまともな人が増えてきたお陰で……件の舞台になる、図書館島の見直しが始まっているらしい。

で、実際魔法先生主体で調査すると……顔面蒼白になるほどの罨や無造作にしまわれている禁書などが出てきたらしいのよねー。

そっとなつてくると、今までの体制に対する危機感も芽生えてきて……部活動の見直しにまで発展したというわけ。

「それって図書館探検部でしょ？ まあ、他の事でも言いたい事はあるけど……外来の私からしてみれば、余りにも非常識すぎる部活

だと思っわよ？」

魔法使いの私が言えた事じゃないけど。

「そうですか？」

「そうなの！ 大体、毘って何よ……それも致死率の高い毘って。しかもそれを知って尚、碌な装備もしないで探検するって……狂っているって言われても可笑しくないわよ？」

「く、狂っているって……そこまで可笑しいかなー？」

……っ。

駄目ね、幾ら認識障害が弱まっているって言っても……それにずっと浸かっていれば、影響も受けるか。

リアンさんが言うには、最初はもっと酷かったって言うけど……もしそのままだったら、どうなっていたのかしら？

「……私の見解をどう受け止めるかは、貴女達自身に委ねるわ。ただ、友達として言わせて貰うなら……もう少し危険のない部活に変更して欲しいわ」

「……忠告はありがたいですが、私は退屈でない非日常的な刺激を求めているので」

「……わ、私もー、本が好きだからー」

……駄目ね。

特に夕映なんかは、もしこっちの事を知ったら絶対関わろうとするでしょうね……要注意人物だわ。

「まあ、いいわ……でも、怪我なんかは絶対にしないでよね？」

「はいー」

「はいです」

まあ、最近は部活動中の見回りも多いつて事だし……大丈夫かな？

夕方、私はチャチャさんに連れられてグランタムール家にお邪魔している。

彼女が言うには、これからも週に一度程度会合する予定らしい……まあ、状況把握と言ったところだろう。ただ、今日はオプシヨンがついてきたが……。

「今日も相変わらず可愛くて凜々しいですわ、アステール君」
「ねえね、くすぐりたいよー」

「ああ！ 私の事を姉と呼んでくれるなんて、感無量ですわ」

まあ、あやかなんだけどね。

何でも結構常連らしくて、こうしてリアンさんのお子さん（主にアステール君）に会いに来ていらしいの……シヨタコンなのかしら？

「あやかは相変わらずねえ……まあ、アステールも懐いているからいいけど」

『……もつとも、ステラはご機嫌斜めのようなだけだな。ほら、拗ねてないで……アーニヤお姉ちゃんにでも構ってもらえ』

「……うん」

ステラちゃんはアステール君と双子だからか、彼と離れるのを嫌っているようなのよね……まあ、ご両親が傍に居ればその限りではないようだけど。

……って、こっちに来た？

「……ねえね？」

「ど、どうしたの？」

「……だっこして？」

「え、えっと……」

私は慎重に抱き上げて、抱っこしてあげた……あー、暖かくていいかも。

何だか、あやかの気持ち分かる気もするわね……癖になりそ。

結局、この日は特に連絡事項も無く……普通に食事を楽しんだだけだったわ。

……まあ、夕映達の事は伝えておいたけどね。

夜。

消灯時刻を過ぎた寮内の一室で、私はルームメイトにして同僚でもある子と話し合っていた。

彼女の名は龍宮真名……戦場仕込みの狙撃手で、凄腕の傭兵って話。まあ、纏っている空気からして普通じゃないわよねえ……巨乳だし。

「それでアーニヤ、転入から彼は一週間が過ぎた訳だけど……君は裏の仕事には関わるのかい？」

ちなみに今話し合っているのは、今後の裏の仕事について。

ある程度、話せる能力などについては教えてあるわよ……一応、仲間だしね。

「ええ、一応ね。課題は生徒をやるって言う、訳の分からないものだったけど……腕を鈍らせる訳にも行かないから、鍛錬のついでに

やるわ」

「ふむ、中々精霊にも愛されているようじゃないか……もし、実入りのいい話があったら、私にも乗らせてくれよ？」

「ん、それはいいんだけど……こっちってあんまり内部では無いんでしょ？」

実際、関西との不仲が解消されて以降……主に起こる裏の仕事は、図書館島や世界樹を狙った盗賊紛いの侵入者撃退ぐらいなのよね。霊地でもある麻帆良だから、妖怪や魔に属するものが発生する事もあったらしいけど……リアンさんがこっちに来て以来、それも滅多にないみたいだし。

「まあ、ね」

「だから、ついでよ。丁度、最強種が傍に居るんだもの……もっと上に上り詰めて見せるわ！」

ノードウスさんにお墨付きは貰ったけど、それで満足してちゃ駄目だしね。

ネギの近くに居るなら、もっと鍛えておかないと……あいつってば、結構抜けているから。

「ふふふ」

「ん？ 何よ、真名？」

「いや、君みたいな同僚が居てくれるなら、これからもっと面白くなるだろうな……と、思ってたね」

「ふーん？」

変な真名。

さて、夜も更けたしそろそろ寝ましょ……明日も晴れるかなあ

……。

S
I
D
E

O
U
T

第二十七章 変容（後書き）

次回は9/19の0時です。

第二十八章 準備

SIDE ノードウス

俺は今、リアンの命を受けて魔法世界のとある村にきている。

此処はリアンが大戦後に訪れた村の一つで、木精を自在に操る一族の集落だ。

リアンが此処に訪れたのは、今後の為に必要なピースだったからというのもあるが……不穏な空気を察したからでもある。

「え、リアン様っ?! ……いえ、ノードウス様ですか?」

「ああ、ノードウスの方だ……君はブリジットだったな、息災だったか?」

俺の前に現れたのは、一族期待の新人であるブリジットだった。

彼女の素養は、一族でも特に優れているようで……リアンも結構気に掛けていたようだ。

「はい! あの、どのような御用件で?」

「そろそろ準備を始める時期が来たので、な……経過の方を見に来たのと、補佐の為に来た」

「そうですね……あ、イグニスとお会いになれますか?」

「ああ、火精の嬢ちゃんか……そうだな、会っておくか」

俺はブリジットに先導されながら、付近の村人達と挨拶を交わしていく。

此処は先ほども言った通り、木精を操る一族の村だが……現在においては、その限りではない。

それと言うのも、リアンが戦後保護した精霊に連なる亜人達を此処に匿っているからだ……まあ、とは言ってもそう多くはないが。

この集落一帯には、リアンが施した特殊な結界が展開されており……外部からの侵入を阻止している。

「ふむ、結界の方に問題は無いな……まあ、相変わらず害虫は湧いている様だが」

「ええ、ですがリアン様の結界のお陰でこの通り無事に済んでいます……それに、精霊達も協力してくれていますし」

害虫と言うのは、ブリジット達を狙っている者の事だ……まあ、彼女の言う通り、結界がある以上手出しは出来んがな。

ん……あそこに居るのはイグニスか？

「っ！ ノードウス様!？」

「久方ぶりだな。ほう、ブリジットもそうだったが……随分と密度が増しているではないか」

「は、はい！ アグニ様の御指導の賜物です！」

「ああ、そう言えば 天火のアグニ に師事していたな……ふむ、もう戻った後という事は認められたか？」

「はい、アグニ様の 浄化 の御力を授けて貰いました……現在は、研鑽を積む毎日です」

イグニスもブリジットと同じく、危機的状況下で助けた子供だ。

当時、紛争に巻き込まれた彼女の村は壊滅状態に陥っていた。

しかし、そこに降り立ったりリアンによつて犠牲者は半数程度に抑えられたのだ……まあ、彼女の両親は助からなかったようだが。

で、此処に匿われた彼女はリアンに協力したいと願ったのだが……そのような事を易々と聞く訳にもいかず、試練を与えた。

『我が友である火の最上位精霊が一体、天火のアグニ……彼に認められたならば、その時は仲間として迎え入れよう』

……と。
まあ、見事乗り越えたようだな……もっとも、心境も些か変化した
みたいだが。

「まあ、お前はお前の望む道を往けばいい……火が司るのは、破壊
だけではないからな」

「っ、……はい！」

ふむ、いい目だ。

これならば、大丈夫か。

まあ、聞けばブリジットの両親に世話になっていると言っし……心
配は要らないかな？

「あの、ところで今日は？」

「ああ、例の経過を見に来たのと、その補佐をしに来たのだ……時
が迫ってきたのでな」

「っ！ 遂に、ですか」

「まあ、もう暫らく猶予はある……焦らず、確実にこなしていくさ」

「彼らの方は警戒しなくてもよろしいのですか？ 何やら、不穏な
動きがあるようですが」

彼らつてのは、『完全なる世界』の事だな。

まあ、此処には幾体かの精霊を逗留させているからな……その手の
情報には事欠かないか。

「ああ、それも見越して行動しているからな……元より、あいつ等
のやりそうな事には見当もついている」

当然、イレギュラーもあるだろうが……その見極めの為にも、俺が

来たのだしな。

「それよりも、アレを復活させる方が先だ……ジヴァもそう判断しているだろう？」

時の大聖霊に並ぶ、リアンの分御霊の一つでもある生命の大聖霊ジヴァ。

本来、リアンの許より離れない彼女を此処に逗留させてまで成そうとしている事は……この魔法世界に溶け込んだ、『霊樹』の復活。無論、既に世界を構成している霊樹そのものを抜き取る事は不可能だが……不謹慎ながら大戦で多くの命が無くなり、世界自体が不安定になっている今ならば……株分けも可能な筈だ。

「……はい、御身を削りながら」

「遺憾な事だが、何事にも犠牲はつきものだからな……最も力ある者が身を削るのは、ある意味当然の事であろう？」

「それは、そうかも知れませんが……」

「まあ、事を終えてリアンの中に戻れば……いずれ回復するさ。それよりも、復活後はブリジット達にも存分に働いて貰わねばならないのだから……しっかりと鍛えておけよ？」

「そ、それは勿論です！」

リアンが求めるのは、単なる救いではなく……救いのある救いなのだからな。

テコ入れされるのが『完全なる世界』か、それともまったく別のものになるのかは分からないが……生半可な妨害では済まない筈だ。まあ、やるからには完遂目指すだけだが。

S I D E O U T

『完全なる世界』の本拠地、墓守り人の宮殿。

ノードウスがブリジット達の村に訪れた頃、遠く離れたその地でも少なからぬ動きがあった。

宮殿の一室にいた少年、地のアーウェルンクスであるフェイトは従者である少女から報告を受けていた。

「フェイト様、ご依頼されたイスタンブールの魔法協会への偽造処理終了致しました」

「そうか……ご苦労様、栞さん」

「いえ……ただ、日本への研修工作が難航していますわ」

「……そう、やっぱり東西の融和が進んだ事が原因かな？」

窓から見える、濃霧に染まった街並みを見下ろすフェイト。

「恐らくは……なので、もう暫らく時間が掛かりますわ」

「まあ、いざとなったら強引に捻じ込むから焦らなくてもいいよ……」

……大詰め以外では、一回だけの訪問だしね」

「しかし、フェイト様……情報によりますと、関西は纏まりつつあるようですが……お一人で大丈夫ですか？」

調書を手にはフェイトへと心配げ視線を向ける少女、栞。

その調書には、関西呪術協会の現状が記されていた。

「構わないよ……召喚魔を数体連れて行くし、試作品の『シグナム・ピオレゲンス偷生の符』も持っていくからね」

「私達が付いて行ければ良かったのですが……」

「仕方ないよ……此方での情報操作もまだ残っているし、デユナミスの補佐も要るからね」

「……やはりネットクは『黄昏の姫御子』の不在ですか？」

朶の言う通り、完全なる世界は未だアスナ姫の所在を掴めていなかった。

唯一、それに繋がりそうな情報は大戦決戦時に現れたという男……魔法世界ではある意味、紅き翼以上に有名な『星の癒し手』だった。何故、それを知るに至ったかは極簡単な事で……フィリウスの体に憑依した造物主に、デュナミスが打ち明けられたのだ。

……己と比肩し得る存在がいる、と。

そこから調べた結果、上記の事を知るに至ったのだ。

まあ、造物主の部下でしかないフェイトやデュナミスからしてみれば……厄介すぎる相手だろう事は間違いない。

「まあね。最悪、予備を使う事になるかも知れないけど……保険はあるに越したことはないからね」

「……分かりました、では選りすぐりの召喚魔を手配しておきます」

「ああ、お願いするよ」

一礼した朶の持つ調書には、大鬼神『リヨウメンスクナノカミ』について……という文字が書かれていた。

第二十八章 準備（後書き）

次回は9/20の0時です。

第二十九章 転向

2003年1月、年明けの行事も恙無く消化したグランタムール家。その居間では毎度の如く、炬燵でチャチャがたれていた。

「アー、モウスグ始業式カ……タリイナ」

「毎年、同じ事言っているわね……はい、アーン」

チャチャの愚痴に返すのは、これまた同じくアスナ……皮を剥き、筋を取ったミカンをチャチャの口に放り込むのも変わらない。

「アム……同ジ事ダカラコソ、意味ガアルンジヤネエカ。違ウ事バツカリ言ツテイタラ、信用ナンカサレネエゾ？」

「いや、そこはもうちよつと前向きな意見を言うようになるとか……

……まあ、チャチャだし、無理か」

「オイ……何気ニヒデエナ、アスナ」

そんな感じでいつものように会話する二人だったが、決してキッチンの方には視線を向けなかった。

それは炬燵の傍で二人の子供を相手に、絵本を読んでいるリアンも同様だ。

で、キッチンの方で何があるのかと言うと……テーブルではエヴァンジェリンとあやかが向き合っていた。

「あやか、お前が家のアステールを慕ってくれるのは嬉しい……非常に、好ましい事だ」

「……お義母様」

「……発音に少し気になる部分があったが、まあいい。しかし、しかだ！ 同衾はいかん、同衾は！」

まあ、要するにそう言う事だ。

昨夜遅いからと言う理由で、グランタムール家に宿泊したあやかであつたが……まんまとアステールと風呂を共にし、同衾にまで持ち込んだのだ。

此処でリアンやエヴァンジェリンが気づかないのか、と言う疑問があると思われるが……そこはそれ、大人の情……もとい、事情の為である。

通常、両親であるリアン達と共に寝るか……即対応出来る音無、または音々と眠る子供達。

しかし、そのサイクルを何故か熟知していたあやかが……事もあるうにステラだけを音々に任せて、アステールを自身のベッドへと連れ去つたのだ。

上手く言い包められてしまった音々であつたが、夜中にステラが愚図りアステールを呼ぶようになって己の間違いに気付く……そこから話は早かつた。

流石に何やら励んでいる旦那様達の邪魔は出来ないと考え、あやかの部屋に突貫……彼女が抱きしめていたアステールを奪取したのだ。

「まあ、大事に至るような事はしていなかつたようだが……もう少し相手の事も考えよ」

「……はい」

意気消沈といった感じで、項垂れるあやか。

ただ、そこに後悔という色は見受けられない。

……と言うよりも、隙あらばまたしようと言う気配が駄々漏れだつた。

「……ふう、あやかよ……正直に答える」

「はい？」

「お前はアステールの事をどう慕っている？ 慈しむべき子供としてか？ それとも生涯を共にするべき男としてか？」
「命を共にすべき、愛する男性としてですわ！」

即答だ。

これ以上無いほど、即答だった。

「そ、そうか……う、うーむ」

流石に此処までハッキリと言われては、エヴァンジェリンも二の句を唱えられなかった。

しかし、そこで口を挿む者がいた……アスナだ。

「ねえ、あやか？ それはちゃんと、アステール本人を見て言える？」

「アスナお姉様？」

炬燵に入りながらも、視線はあやかを真っ直ぐに捉えていた。

「貴女が聡い子だって言う事は分かっているし、余り言いたくはないけれど……アステールを亡くなった弟さんと重ねていない？」

「………………。それは、確かに最初の頃はそうでありましたわ」

あやかは昔を振り返る。

産まれてくる筈だった弟が、亡くなってしまった日の事を……それを嘆き沈んでいる自分を、懸命に慰めてくれたアスナの眼差しを。そして、愛しい義理の姉に連れられてアステールと出会った日の事を……鮮明に想い帰す。

「ですが、今は違いますわ……私、雪広あやかはアステール君を、

心からお慕いしております」

「……………そう（でもねえ、流石に早すぎるでしょう……………まあ、私やママの問いかけ方も拙かったかも知れないけど）」

あやかの手を握り、眼を見て……………しかし、此処は修正が必要だと判断する。

主に、親友の妹の今後と……………可愛い弟の未来を考えて。

「でも同衾は駄目よ、同衾は……………あと、そういう対象としてみるのはもう少し経ってからにしないさ」

「お、お義姉様〜!？」

「……………私は突っ込まないわよ？ それに弟の貞操が掛かっているからね、せめて高校ぐらいまでは待ちなさい……………それでも早いかしら？」

「そ、そんな〜」

そんな二人を見ながら、リアンはキティに訊ねた。

『……………どうする？ あの子とアステールが本当の意味で結ばれる為には、此方側に迎え入れねばならないが。まあ、アスナの言う通り、そういう関係になるのはまだまだ先だが……………』

「……………それはそれで構わないさ、あやかにはその覚悟もありそうだしな……………同衾は早々認められんが」

『くつくつく、アステールも大変だな……………構ってくれるお姉さんと閨を共に出来ないとは』

妻の言葉に笑みを浮かべ、腕の中の息子に向けて呟く……………しかし。

「パパ？ 僕、あやかお姉ちゃんの事大好きだよ？」

『……………』

「……………」

息子の純真な反応に、固まらずにはいられなかった。

『……………これは真剣に、彼女と話し合わなければならんな』

「ああ……………嫁候補になるかどうかはともかく、な」

そう言つて、乾いた笑みを浮かべあつた。

「アス坊ヤモ大変ダナ……………ステラ、愛シノ兄様ガ奪ワレルゾ？」

「兄様が私の兄様である事は変わらないもの……………チャチャ姉さん、心配は要りませんわ」

「……………才前八本当ニ3歳児カ？……………ト言ウカ、何デ俺ダケ姉サンナンダ……………イヤ、構ワネエケドヨ」

ステラのありえないほど流暢な喋りに、秘かに戦慄するチャチャ……………そして姉としての呼び方が、己だけ様付けでない事に悩むのであつた。

所替わつて、此処は関西呪術協会……………その中庭。

そこには年明けの忙しい時期だと言つのに、幹部クラスが勢揃いしていた。

彼らの視線の先には、リアンの転移術によつて一時帰郷した木乃香が座しており……………その傍には刹那や神鳴流の青山姉妹もいる。

そんな中、木乃香の母である木乃葉が立ち上がり……………静かに口上を読み上げた。

「本日は御忙しい中、木乃香の為に集つてくれはつた皆様には感謝

致します」

「……ははっ!」「……」

「本日は、木乃香の修行の成果を一部披露したく思い……こうして場を設けさせて貰いました、木乃香」

「はいな……今日はうちが師であるリアン様に授けられた、古に潰えてしまった識神を披露したく思います」

そう言つて、懐から四枚の符を取り出す木乃香。

会場にいる一同は、その符に籠められた尋常でない力にどよめきを漏らす……それはこの場に居る誰しもが同じであつた。

「この特殊な符には、うちの霊力によつて編み上げられた識神が籠められております……それを呼び出します」

「あ、あのお嬢様……式神、ですよね?」

幹部の一人がそう尋ねる。

それはその場全員の疑問であつたのか、皆が固唾を呑む。

「識神……ある一定の方式に沿う式神やなくて、その全てを理解し御する識神や……まあ、まだうちは修行中やから完成はしとらんけどな」

そう言いつつ、一つの符に呼びかけ始める。

「我、近衛木乃香により呼び覚まされし五行四聖獣よ!

北天を司りし智霊よ! 我が前に現れ出でよ、黒帝・玄武!」

言の葉が紡がれると、符より清流が現れ……木乃香の前で四神として名高い玄武が顕現した。

「くくく」 おおっ?! 「くくく」
「か、亀」 ツ?! ドゴン ヘブッ!?

途端湧き上がる歓声……中には、慌てふためき姉に黙らされる者もいたが。

玄武はその尾である蛇で木乃香を巻き取ると、背中に乗せ一同に向き直った。

「うちの玄武や、水を担う霊獣やな。他にも、四神に相応する霊獣は創生したけど……まとめ役の麒麟だけはまだなんよ」

のほほんとのたまう木乃香だったが、幹部連中は最早声も出なかった。

それほど彼女のした事は、彼らに驚きを与えたのだ……喜びと言う驚きを。

その後、木乃香の偉業を称える会食が開かれ……一部を残して解散となった。

そして残った者……詠春や木乃葉、神鳴流の鶴子などは先ほどの事で話し合っていた。

中庭に未だ呼び出されたままの玄武の傍には、木乃香の他に刹那と月詠の姿があった。

「木乃香の成長には驚かされましたね……まさか、あのような存在を創りだすとは」

「ええ、リアン様に預けて正解でしたわ……それはともかく、鶴子さん?」

「はい……思ったよりかは少なかったのですが、やはりまだ居はりましたね」

木乃葉の問い掛けに、鶴子が神妙な顔で答える。
それと言つのも、今回の集まりは木乃香の力を示すだけでなく……
未だ内に潜む、膿を燻り出す為でもあったのだ。

「大方の過激派共は、うちらで拘束した後、力を封じて放逐しまし
たが……月詠？」

「はいー、お嬢様に薬物や呪具を用いようとしたお方達には地獄を
見て貰いましたけどー……今日訪れた方の中にも、同じ臭いを持っ
たお人が居ましたわー」
「……本当か、月詠？」

月詠の言葉に反応した刹那が、剣呑な思いに駆られて問い返す。

「はいー、ウチそう言つものには敏感どすから」

対する月詠は気負う事無く、簡潔に答えた。

「つつきー、あんまり危ない真似したらアカンで？　うちは助かる
けど、つつきーが怪我なんかしたら……うち泣くよ？」

「うふふふ、分かっていきますよー……ウチはお嬢様の物どすから。
あ、先輩は分け分けしましよーねー」

「つ、月詠……お前な」

「せつちゃんはずちの旦那様で、つつきーはずちの妻さんや……こ
れはゆずらへんでー？」

「……こ、このちゃんまで」

月詠と木乃香の言葉に、脱力する刹那。

しかし、月詠にしてみれば当然の言葉で……木乃香の運命があの日
変わった事で、月詠の運命もまた変わったのだ。

己の中の狂気に気付いて尚、受け入れてくれる木乃香の存在は彼女

にとつて救いとなった。

そして、それは共に高めあつた刹那の存在も同様であり……二人は彼女にとつて、命を賭してでも護るべき存在となつたのだ。

そして、その時を持つて…… 血に酔い狂気に浸る剣鬼 ・ 月詠は、

狂気を持つて絆を護る剣士 ・ 月詠に生まれ変わった。

……まあ、師であり家族となつた鶴子の尋常でない努力も影ではあつたのだが。

「何はともあれ、あの様子なればもう暫らくもすれば事を起こそうとしはるでしょう……その前に討てたらええのですが」

「ええ、リアン殿の警告の件もあります……燻り出す意味も込めて、あえて隙を作る必要もあるかも知れせんね」

「『完全なる世界』、どすか……一体どちらを目的としてはるのやるな」

「何にしる、このちゃんの平穩を脅かす者なら……うちと月詠の剣が討ち取つて魅せます!」

大人達の懸念に、刹那が剣を掲げて宣言する……それを見て、大人達は頷いて見せるが……。

「はいー、ウチがぬつ殺して魅せますー」

「殺しは駄目やよ? つつきーの剣が汚れてまうからなー……やるなら、焼き土下座や」

「はいー」

「こ、このちゃん……」

「(おしおきこわい、おしおきこわい)」

何処かずれている木乃香達のやり取りに、またもや脱力するのであった。

もつとも……ただ一人、詠春だけは木乃香の言葉に内心戦慄してい

たが。

第二十九章〈転向（後書き）

次回は9/21の0時です。

9/20、22…35…あやか関連の部分を少々修正

第三十章く着任（前書き）

9 / 2 2 2 3 … 0 5 …… 大幅修正版と差し替えました。

このようになりましたけど、如何でしょうか？

第三十章 着任

SIDE ネギ

それが成せたのは年が明ける前の事でした。

今まで偽装の為に励んでいた、石化解除薬を何とか完成させる事が出来たのです……永久石化をですよ？

中々に苦労しましたが、決め手は現場から回収しておいた悪魔の破片でした。

本来、悪魔のような他の世界から召喚される存在は倒されたら、元の世界へと送還されるだけなんだけど……何故かリアンさんによって倒された悪魔達は、その殆どが未帰還のまま亡骸を晒したんだ。

……多分、超上位存在であるリアンさんだからこそ起こりえた現象なんだと思うけど。

まあ、何はともあれ。

石化していた村の皆は、完成させた薬で解放済みです……と言ってても、本物の皆は魔法球から出てきただけなんだけどね。

あと、この事は直ぐにMM元老院に伝わって向こうから使者を送ってきたけど……功績など要らないと返答し、勝手に祭り上げられる前にクルトさんの方で大々的に伝えて貰いました。

只、そのせいでクルトさんは微妙な立場になってしまいました。

幸い、今は元の鞘に納まっておられるようです……その節は、御迷惑をお掛けしてすみませんでした。

さて、2003年1月も終わりに近づいてきた頃……僕は予定よりも早く、学園長室を訪れています。

……リアンさんと共に。

何でも、そろそろ表に出る為らしいです……と言っても、『星の癒

し手』としてではないですが。
訪れた学園長室には学園長先生の他に、ガトウさんと高畑先生がいました。

……ちなみに、これまで実際に二人と会った事はありません。

「初めまして、ネギ・スプリングフィールドです！」

「よく来たの、ネギ・スプリングフィールド君……わしが麻帆良学園長であり、関東魔法協会の理事を務めておる者じゃ……ところで、何故リアン殿が？」

『何、例の襲撃事件以来付き合いがあつてな……アリカとナギにも、こいつの事は頼まれていたから保護者として同伴したまでだ』

「ひよ?! そ、そうじゃったのか!？」

「ええ、今の僕の保護者はリアンさんです。あの時以来、右往左往する僕を導いてきてくれた恩人です……あと、大体の事は既に理解していますよ」

「っ! それは……一体、何を指して言うておるのかの?」

「大戦の結末の事実、そして村を襲撃させた者の正体……この程度は承知しています」

「っ……そうか」

ああ、やっぱり学園長も把握していたんだ……リアンさんの読み通りだね。

「すまないな、ネギ君……俺達が不甲斐無いばかりに」

「ガトウさん、でしたよね……僕は別に貴方を責める気も、その権利もありません」

人は神ではないのですから。

少なくとも、紛争を収めようと獅子奮迅の活躍をされた貴方に文句を言うつもりはありません。

それに、貴方は此処の魔法使いの正常化という偉業を果たされたのですから……お礼を言いたいくらいです。

まあ、元老院の腹黒さのお陰で憎しみは覚えられましたが、
っ……駄目だね。

アレの事を考えると、どうしても思考が濁ってしまっ。

『人は綺麗なままではいられない、善悪のみで全てが図れる訳ではない……その程度は、ネギも理解しておるよ。まあ、まだまだ若いから暴走する事もあるだろうが、な』

「……分かり申した。リアン殿、わしが言うのも筋違いかも知れませんが……ネギ君を導いてくれた事、感謝致します」

『構わん……俺にも益がある故に動いただけだ、礼を言われる事ではない。まあ、仮にも礼を言うなら……奴らと違い良き指導者としての姿を、ネギに魅せてやれ』

「っ、っむ……精進致しましょう」

どうやら、学園長先生はリアンさんに頭が上がらないようです……
まあ、実際凄い人だからね。

「ふう……さて、それでは本題に入るとしよう。課題は日本で先生をする事、じゃったな」

「はい……それを知った時には、正直理解に苦しみましたが」

正規の指導も受けていないし、教員免許も所得していないし……そもそも魔法球使ってなかったら、生徒さんより年下だったし。

……ハッキリ言って、不正のオンパレードだよ。

「じゃろつな……それで、まずは教育実習からとなるが」

「……という事は、最低5週間程度ですか？ 2月度から実習開始として、終了式が3月の25日だった筈ですから……まあ、期間としては充分ですね」

「うむ、ネギ君の思慮深さには感服するの……まあ、奴らの思惑はどうあれ、生徒との絆を深める意味でも終了式までを実習期間としようかの」

「それを終えたらどうなるのですか？ 教員免許を持っていない僕が担任をするのは、生徒の為にもならないと思うのですが」

それに、正直なところ……一般的な人生経験が無いに等しい僕が、女の子ばかりを相手取るのもきついものがあると思うけど。

「ふおおおお、気持ちはしつかり先生しとるようじゃがのう……とは言え、ネギ君の言う通りじゃ。いつまで教職に就く事となるかは分からんが……まずは、此方の高畑先生の下で副担任をしてもらおう」

「初めまして、ネギ君。僕が君の指導教員になる、高畑・T・タカミチだ……まあ、僕の事も既知っているかな？」

「はい、此処の事もある程度は理解していますから……あと、リアンさんの所に居候していますので」

「？ ……ああ、チャチャ君達か」

「はい、それに貴方の事はリアンさんに色々聴きましたから……後輩として尊敬していますよ」

「え？」

「生徒の事を第一に想い、教職一本に絞った貴方は素晴らしいです……僕も本来ならばそうあった方がいいのでしょうか」

実際問題、両親の事があるにせよ……教職に就いている限りは、魔法使いとしての役割なんて必要ないからね。

まあ、リアンさんが言うには近々向こうが仕掛けてくるみたいだから気は抜けないけど。

「ははは、そう言って貰えると嬉しいよ……生徒を見守るのは大変だけど、遣り甲斐はあるからね」

うん、普通にいい先生だ。

まあ、仏の高畑なんて呼ばれているぐらいだからね。

「さて、ネギ君や。此方も改めて紹介するでしょう……魔法関係でのまとめ役をしておるガトウ君じゃ」

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ……まあ、俺の事もリアン殿に聴いているかな？」

「はい、父さんのパーティメンバーの一人だった人ですよ……最高の咸卦法の使い手で、無音拳の達人だと」

「ははは、そう言ってくれるのはありがたいが……もう俺はロールだぜ？」

ガトウさんはそう言うけど、背はピンとしているし覇気もあるから……まだまだ現役だと思うけどなあ。

まあ、いいか……それよりも聞いておかないといけない事もあるし。

「ところで、僕も魔法先生と言う立場になるのでしょうか？ 出来れば、教職一本に絞りたいのですが」

「ふむ、そうじゃの……課題は先生をする事じゃし、警備も足りておるからの」

「では？」

「うむ、いいじゃろっ」

はあ、よかった。

チャチャさんや木乃香さん達に窺った限りでは、中々に元気のいいクラスらしいからね……副担任とは言え、苦勞しそっだし。……って言うか、幼馴染相手に教鞭をとるって恥ずかしすぎるよ。

S I D E O U T

「ところで、リアン殿……御主が今回出向いたのは、ネギ君の為だけかの？」

『いや……キテイも非常勤で茶道部の顧問をしているし、俺も非常勤の広域指導員として働こうかと思っただけ』

「ほ？ それは、わしとしては助かるが……」

『俺も最近までは色々動き回って忙しかったが、近々時間が余りそうなんでな……此処の環境をチエックするついでに、指導員をしようと思っただけだ』

要するに、麻帆良でうろついていたら騒動に巻き込まれる事もあるだろうから……治めるついでに、少しでもお小遣いを貰おうと思っただけだ。

何気にせこいリアンだった。

「……わし、今懐かしいんじやが」

『何、そう多くは要求せんよ……あくまで非常勤だし、な』

結局、リアンの給金は学園長のポケットマネーから支払われる事になった。

「うう……じ、爺にも愛をおくれえ！」

一人残った学園長室に、そんな哀愁籠った声が響いたとか。

……幸い(?) 誰にも聞かれる事無く、虚しく響くだけだった。

第三十章 着任（後書き）

次回は9/22の0時です。

第三十一章 対面（前書き）

前章では非常に見苦しい話を晒してしまい、真に申し訳ございませんでしたm) ——— (;) m

これからはもう少し時間を掛けつつ、話を練っていききたいと思います(、、、、、) (、、、、、)

……時間を掛けても、駄目な時は駄目でしょうけど。。。 (、、、、、) (、、、、、)

第三十一章 対面

SIDE チヤチヤ

麻帆良学園女子中等部、2年A組……それが今俺の所属するクラスだ。

ハッキリ言って、裏に通じている連中とそれに比肩する人材……後は、比較的才能がありそうな奴らばかりが詰め込まれている。

見たところ、体育会系クラブに入っている奴らは一般人が多いな……まあ、こいつらも才能溢れる奴らばかりだが。

それに才能なんてものは、どういう方面で発揮されるか分かったものじゃねえからな。

判りやすい奴もいれば、そうでない奴もいる……さて、此処に集った奴らはどういう基準で選ばれたんだか。

「……イヤ、偏見力？」

余り穿った物の見方をするもんじゃねえか……俺がそう思い、呟いていると。

「何がですの、義姉さん？」

今来たのであろう、あやかが後ろから声を掛けてきた。

「つか、俺を姉と呼ぶんじゃないやねー……周りの奴らが変な目で見るじゃねえか。」

……って言っている傍から、その触角っ！
百合だのレスだの言うんじゃないやねえ！

「……もぐぞ」「ボソッ

「ピイツ?!」「バタッ

「ハ、ハルナー?!」

ム力ついたので、咳きと同時に軽く殺気を飛ばしてやったら、面白
いように倒れやがった……ザマア。

周りでは「恐怖政治、再び?!」だの、「私刑執行者の復活だー!
?」だの言いたい放題言っつてやがる……これぐらいどうつて事ねえ
だろ?

「物騒……と言うより、大人気ないですわよ?」

「……フン」

「はあ……それで、何が偏見ですか?」

「ン、アア……クラスノ奴ラノ素性がダヨ。狙ツタカノヨウニ集メ
ラレテイル、ツテナ」

「……ああ」

あやかはそれで理解したのか、辺りにいるクラスメイトを見回し咳
く。

「確かに、そう思われても仕方ありませんわね」

そう言うあやか自身が、文武両道の才女だから世話ねえぜ。

それにコイツ自身、つい最近とは言え裏を知ったからな。

熱意溢れる故か、成長は著しいが……単に触れ合う機会を制限され
たが故に、鬱憤を晴らしているようにも観えたが。

「マア、ドウデモイインダケドヨ……坊主モ、生徒八生徒デス!

……ナンテ言ツテタシ」

「ええ、先生が自覚を持っていらっしやる以上……後は、私達がフ
オローすれば済む話ですわ」

まあ、とは言え……坊主は世に言うイケメンだからな。
この飢えた狼共の巢で、どれだけの抵抗が出来る事やら……ああ、
それと。

「アヤカ、フォロースルノハイイガ……ミイラ取りガ、ミイラニナルナヨ？」

「大丈夫ですわ、私の愛はアステール君だけに注がれていますから……最近は触れ合いが少なくなって寂しいですけど。そう言う義姉さんはどうなのですか？」

「ダカラ、姉ト呼ブナト……ツーカー、俺八端カラソノ事興味ネエヨ。マア、ソレデモアエテ相手ヲ拳ゲルナラ……旦那力？」

俺が認めている男ついたら、旦那ぐらいだからな。

紅き翼の連中？

ハン、あいつらは脳筋が変態ぐらいしかいねえじゃねえか……あえて挙げるなら、ガトウぐらいか？

どっちみち、俺は御主人に創られたキリングドールだからな……男の好みも御主人と被るだろうよ。

まあ、旦那は御主人一筋だし……どうせ、俺は子供も産めない体だしな。

「チツ、ラシクネエ思考ニ耽ツチマツタゼ……ツタク」

「チャチャさん？」

「何デモネエヨ……ツト、ソロソロ始業時刻ダナ」

遂に坊主がこいつらと対面する訳だが、どうなる事やら……まあ、少なくとも保険は掛けておくべきだよな。

「アヤカ、実地演習ダ……クラスノ奴ラニ気ツカレナイヨウニ、防音結界ヲ張ツテミロ」

「此処で、ですか?! ……わ、分かりましたわ」

さて、魔法関係者にばれずに張るのは不可能だろうが……勘のいい一般人に気付かれずに張れるかな?

まあ、あぶねえ奴らはフォローしとくか……朝倉とか、綾瀬とか。

S I D E O U T

さて、そんなやり取りが行なわれてから数分後……教室に高畑教諭がやってきた。

無論、前線を退いたとは言え……それなりに腕の立つ彼は、すぐさま結界に気づく。

「!(これは防音結界? ……ああ、なるほど) 皆、おはよう!

」「おはようございまーす!」「」

その理由に思い当たった彼は、内心で苦笑し……あえていつも通りに振舞った。

「先生、実習生が来ると聞いたのですけど?」

「ああ、連絡事項を告げてから紹介するよ……くれぐれも騒がないようにね?」

」「はい!」「」

どれだけ効果があるか分からないような注意をしつつ、連絡事項を述べていく高畑教諭。

そして……。

「それじゃあ、入って来てもらおうか……ネギ先生?」

「はい」

ガラッ

扉が開けられ、ネギが入ってきた瞬間……教室からは一切の音が消えた。

只一つ、ネギの歩く靴音のみが響き……彼の自己紹介が始まる。

「初めまして、今回教育実習生として此方に赴任してきたネギ・スプリングフィールドと申します」

「ネギ先生はイギリスから来てね、彼には英語の授業を担当してもらう事となる……実習期間は終業式までだよ」

ネギが自己紹介を終えた後、生徒の氣勢を削ぐようなタイミングで高畑教諭が声をあげた……此処らへん、彼は慣れたものである。

まあ、幾ら防音結界があろうと……それに頼りきりになるのもどうだと言う話だ。

「さて、君達の事だ……幾らでも質問はあるだろうが、記念すべき第一回目だからね……朝倉君に10分程度に纏めて貰おうか」

「はいー！」

そこから始まるのは、質問というなの尋問。

まあ、生徒の詳細は聞かされていたのでネギも慌てはしなかったが、好きな物や趣味など基本的な質問を矢継ぎ早に質問した朝倉は、残り一分となった時最終質問に入った。

ちなみにこの時点で、アーニヤと同郷である事がばれている。

「では、ネギ先生……恋人は居ますか？」

ネギにとって、その質問はもっとも注意を払うべきものであった。

幼少の時ならいざ知らず、今の彼はそこら辺の事も理解していた……自分の立場的に。
故に彼はアスナやアーニヤ達と考えておいた答えを述べる。

「はい、故郷に……婚約した人がいます」

「……え、え　　っ?!」「」「」

瞬間、教室内に悲鳴が響いた……まあ、防音結界のお陰で外には洩れなかったが。

そんな中、即座に質問を繰り出す朝倉。

「そ、その女性の名前は？」

「んー、あんまり個人情報晒すのは好ましく思わないので……」

「そんな事を言わずに!」

「いえ、僕にとって大事な女性の情報ですから……ちなみに、結婚は再来年ぐらいになる予定です、その時には教えてもいいですよ?」

あくまで普通に、しかし若干熱を籠めて……そんな風に語るネギに、流石の朝倉も疑いを持つ事は無かった……今のところは、だが。
まあ、そんなこんなでネギへの質問タイムも終わり……恙無く、初授業を開始する事が出来たのだった。

その後、授業を終えたネギは初日という事もあり……早々に帰路についていた。

まあ、既に諸々の書類整理や引継ぎも終わっていたからでもあるが。

そんな彼が図書館島への通路との境目に来た時であった。

「ん？ アレは、うちのクラスの？」

視線の先には2 - Aの生徒である、宮崎のどかが本を抱えて階段を下りようとしていた。

「って、あからさまに危ないっ！」

咄嗟に駆け出したネギは、即座に階段まで辿り着くとのどか呼び止めた。

「宮崎さん、止まって下さいー！」

「ふえ？」

静かに、しかしハッキリ聞こえるように告げたお陰で、のどか自身慌てる事無くその場で立ち止まった。

「ネギです……とりあえず、その抱えている本を降ろしてくれませんか？」

「えっ、ネギせんせいー！？ は、はいー！」

……どうやら相手を認識してなかったただけだったようだ。
のどかはアタフタしつつも、石畳の上にハンカチを敷き、その上に本を置いた。

「すみません、宮崎さん……どうしても危なく見えたもので」

「あ、危なく……ですか？」

「ええ、見ての通りその階段は柵も無く……宮崎さんは多くの本を抱えて、フラフラしていましたからね」

「あう」

見られていたのが恥ずかしかったのか、途端真っ赤になるのどか。

「ところで、何でこんなに多くの本を？」

「あっ、その（うう、せんせーの歓迎会って知らせちゃ駄目だよね……みんな、驚かせる気満々だったから）こ、この本の返却日が今日まででしたので……その、この後も用事があるので」

「えっと、友達に手伝ってもらうとかは？」

「夕映達は私の代わりに、用事（教室の飾りつけとか、買出し）をやって貰っているのよ」

「そういう事でしたか……ふむ、では僕が手伝いましょう！」

「ええ?!」

驚くのどかを他所に、ネギは本の大半を抱え……のどかを促した。

「さ、この後用事があるんですよ？　なら、急がないと」

「は、はいー」

こうして、恥ずかしがるのどかを促しながら手伝いを終えたネギは……その後、歓迎会へと招かれるのであった。

第三十一章 対面（後書き）

次回更新は未定です。

第三十章を修正次第、次章作成に移りたいと思います。

第三十二章 模索

ネギが実習生として着任してから、早一月が経過した。

その間、特にこれと言った事も無く……なんて事も無く、大小様々なトラブルが起こった。

まあ、主にその被害に遭ったのはネギぐらいなので……問題は無いと思われる。

「……何か、今僕の存在が路傍の石の如く扱われたような」

「何を言っておるのだ、ぼーや？ ほら、茶を点ててやったぞ」

「あ、ありがとうございます」

現在、件のネギは茶道部に訪問という名の避難をしていた。

それと言うのも、最近恒例になりつつあるネギ先生追っかけ隊がまたもや発足したのだ。

ネギ先生追っかけ隊……それは、イケメンなネギを籠絡しようとする傍迷惑なメンバーの事である。

主なメンバーは、明石裕奈・朝倉和美・和泉亜子・柿崎美砂・釘宮円・佐々木まき絵・椎名桜子・鳴滝姉妹の合計9名だ。

まあ、とは言え……その内、朝倉はネタ欲しさで、釘宮は友達付き合いで、明石と椎名と鳴滝姉妹は面白さ優先で参加しているだけだ
が。

ちなみに、アーニヤは自重して傍観している……助ける気は一切無いようだ。

「……で？ また、追っかけられているのか？」

「は、はい……何で皆さん、僕なんかを追っかけるんでしょうか？」

故郷に許嫁がいる、って言ったのに」

「さて、な……面白半分と言うのが、大体の正解ではないか？ 只でさえ、女ばかりの所だからな……葱が鴨を背負って来たと思っ
ているのだからさ」

「僕はネギであって、野菜の葱じゃないですよ」

茶を差し出しながらのエヴァンジェリンの言い様に、ネギは脱力しながら答える……これもまた、恒例となったやり取りだったりするのだが。

彼女にしてみれば、ネギは弄り甲斐のある存在なので丁度いい暇潰しになっているようだ……まあ、本人にとって不本意なのは間違いない。

「まあ、いいではないか……それに、学校の成績の方は問題ないのであろうか？」

「……ええ、そちらの方は問題ありません。高畑先生が舵を取ってくれていますし、僕の言う事もしっかり聞いてくれますから……ただ、プライベートの時間だけは何故か問題ばかり起こすんですよ」

「日頃抑圧された物が、噴き出しているだけだろうさ……規則正しい学園生活の為に、息抜きは必要だから諦めて弄られるのだな」
「そ、そんな」

我が身を惜しむとは言わないが……生徒の為とは言え、それは何かが違うと思うネギであった。

お茶を頂き、一息ついたネギは魔法球の方に赴いていた。

鍛えた体が鈍らないように、魔法の腕を鈍らせないように……定期

的に行っている事であった。

そしてそんな彼の相手を務めるのは、専らエヴァンジェリンである。

「ふむ、魔力配分や魔力の練りは相変わらず申し分ないな……それで、今回はどんな成果を披露してくれるのだ？」

麻帆良に来て以来、ネギはその独自性の無さを解消する為、様々な可能性を模索してきた。

ちなみに此処に来るまでに習得していた主な魔法や戦闘の技術は、以下の通りだ。

？・風系統魔法……基本的なところは網羅しており、使用頻度の高い物は最高レベルにまで練り上げている。

また、ノードウスに師事していた為か風精や雷精に働きかける魔法に精通……限りなく最上位に近い精霊を使役出来る。

？・光系統魔法……主に治癒・破魔系を修め、限界レベルにまで極めている。

此方も光精に働きかける魔法に精通しており、常時一体の精霊を体内に宿している……ちなみに、この精霊は外部に影響を及ぼさない。

？・遅延呪文……風系統に精通している為か、遅延させる時間・魔法の数・レベル全てが極悪なまでに高められている。

ちなみに、ネギ自身の詠唱速度はそれなりに速い。

？・戦いの旋律……基礎能力底上げに使用。

？・瞬動術、虚空瞬動、浮遊術……主に相手との距離をとる方向に使用。

？・八極拳……此方も緊急離脱用に使用。

全て師であるノードウスより授かったもので、魔法学校では基礎理論の反復ばかりしていた……まあ、校長である祖父が黙認していた為問題には成らなかつたのだが。

そんなネギが見出した、新たな可能性とは……新たな魔法の開発であつた。

その考えに至つたのは、魔法薬の開発が背景にあつたりする……まあ、要は「好きこそ物の上手なれ」と言う事だ。

「えっと、まだ実戦で使用するには難がありますが……こういうものを編み出してみました」

そう言いながら魔力を練り上げたネギは、両腕に魔法陣を浮かび上げながら……二つの魔法を顕現させた。

「むっ、それは氷楯レフレクシオキフレクシオと風楯の魔法陣か？ ふむ、一時的に腕に刻む事で効果時間を延長させたか……しかし、それだけではないのであるろう？」

「はい、魔法と言うものはそれぞれが独自の術式で成り立っていますが……こうして、術者の体を経由する事でその効力を一体化出来ないかと模索したのです」

「！ まさか、術式統合ユニオンかつ！ 確かに、独自性を追い求めると言う意味では良い観点かも知れんが……幾ら体内を経由しようと、人の体では限界があるぞ？ 私やリアンのような存在ならいざ知らず、ぼーやは真正銘人であろう？ いや、アリカの血を継いでいる以上生粋の人とは言えんか？」

実際幾ら術式状態とは言え、体内で魔法を合成などすれば……編まれた魔法の余波で、内側から破裂してしまうであろう。

しかしそこは手本が身近に居たのが幸いしたのか、ネギには抜け道を用意する術があった。

「まあ、確かに普通ならそうなのですが……僕は体内に常時一体の精霊を宿してしまって、戦いの旋律と併用すれば何とか誤魔化せます」

そう、それは擬似的な精霊との融合であった。

無論、完全な同化は人の身を辞める事になってしまうので早々出来ないが……一時的な憑依もどきならば、十二分に可能だ。

その上で、戦いの旋律による肉体強化を施せば、合成した魔法に耐える事も出来るという訳である……まあ、精霊と余程懇意にしていなければ、そもそもからして不可能な事だが。

「……はっ、また無茶な事をする。まあ、その探究心は見上げたものだが……それで、どの程度なのだ？」

「とりあえず、この氷楯と風楯による『魔法反射鏡』リフレクターを始め……回復系と防御系を考案してみました。攻撃系は考え出すときりが無さそうだったので、一点突破の投擲系魔法を二種編み出すに止めます」

本来、氷楯自体が攻撃魔法を反射出来る特性を持っているが……風楯と融合させる事で、倍加して反射させる事が可能となったのだ。

あと、回復系と防御系の統合魔法は共に遠距離対応型だったりする。

「そうか……しかし、ぼーやは氷系も使用出来たのだな」

「あ、いえ……これは一時的に腕に刻んだ結果行使出来る様になっただけで、詠唱魔法としては無理です」

「ふっ、使える事には変わりはあるまい……とは言え、術式統合か……ふむ」

オリジナル・アーキア・エレベア
エヴァンジェリンが思い浮かべるのは、自身の固有技能『闇の魔法』の事であった。

かの技法を紐解き、試練を乗り越える事が出来れば、精霊に頼る事無く術式統合を行使する事も可能であろう……もつとも、馴染み過ぎたら魔物と化してしまうが。

そして彼女の見たところ、ネギにはその可能性が大いにありそうに思えた。

「（アリカの息子を、魔に変じさせるのは忍びないが……まずはリアンに相談してみるか）まあ、いい……とりあえず今日も精神に負荷を掛けた状態で、いつもの鍛錬に励んでもらうぞ」

「はい！」

事が事だけに、エヴァンジェリンはまずリアンと相談する事に決めた。

この先に待ち受ける、両親の宿敵との対峙……その時にこの技法が彼に必要かどうかを。

第三十二章 模索（後書き）

次回更新は10/2の0時です。

第三十三章 辞令

三学期も残り僅かとなった頃、生徒達にとって歓迎できない期末テストがやって来た。

それは最近成績を伸ばしている2・Aも同様だったが、高畑先生とネギ先生がお祭り騒ぎなど起こさせる筈もなく……テスト勉強に励んでいる。

まあ、チャチャがいる以上そのような事は滅多に起きないのだが。

「これならうちのクラスもいいところ狙えるかな？」

「そうだね、最近は成績不振の子達も頑張っているし……もしかしたら、一番になれるかも知れないね」

周りのクラスがピリピリしている中、2・Aも熱心に勉強していた……頭から煙を出す者も数名いたが。

このように真面目に取り組むようになったのは、先生の働きによる効果もあつたのだが……つい最近、またもや現行の部活動の問題に関する決議がなされたのだ。

……その結果、図書館探検部と格闘技関連の一部が廃部を決定された。

無論、生徒達は抗議したが……その危険性と外部での乱闘、そして成績が思わしくない事を楯に取られては認めるしかなかった。

「廃部が決定した時の落ち込みようは凄まじかったけど、どうやら折り合いもつけられたようですね」

「まあね……正直、図書館島の改築が決行されるとは思わなかったけど」

そう、それこそが図書館探検部廃部に繋がる一因でもあつたりする

のだ。

各所に仕掛けられている罫の撤去はもちろんの事、無造作に置かれた禁書類の保管場所変更など……短期間では行えない事なので、図書館島自体を閉鎖する事になった。

まあ、授業で使用する程度の資料などは校舎内の図書室で賄える為……改築に踏み切ったのだが。

「お陰で、最近は魔法先生達が疲労困憊の体だよ……まあ、リアンさんの言う通り、今までのつけと言えなくもないけどね」

改築が難航する事は目に見えていたので、幾人かの魔法先生が異を唱えたのだが……（リアンの意見を代弁をした）ガトウの言葉でこれらの意見が通る事は無かった。

「日頃から正しく管理していないから、いざという時に困る事になるのだ……これは積み重なった負債とも言つべき物だから、君達に直接の責任がある訳ではないが。少なくとも、一般生徒を危険に晒しうる施設をそのままにしているいい筈無かるう？」

リアンの言葉をそのまま伝えたので、傍で聞いていた学園長は似合わない口調に思わず吹き出しそうになったとか。

「まあ、その内ガス抜きは必要だろうね……生徒も魔法先生も」

「僕としては、自重の精神をもっと持って欲しいところだけど……これから忙しくなりそうだし」

「……そうだね」

高畑は己が手放した領分でも足掻くネギに、申し訳ない気分になった。

もったも、思うだけで今更そちらにも手を出そう等とは思わないが

……そんな事をすれば、頼ってくれる生徒に対する裏切りになってしまうのだから。

「（少なくとも、僕にはネギ君のような世間のしがらみは無い……ならば、僕に出来る事は二足の草鞋をしなくてはならない彼の補佐ぐらいだ）さて、それじゃあ……生徒の為に頑張るとしよう」

「はい！」

裏を知り、裏に関わって尚……表を貫くと決めた彼の意思は強かった。

期末テストも終わり、高畑先生の予想通り見事一位の栄冠を物にした2・Aは……テストからの開放感に湧き上がっていた。

学業に一生懸命になったとは言え、ここら辺は直ぐに変わるような事も無さそうで……ネギとしては相変わらずなのを喜んでいいのか、嘆くべきなのか判断に迷っているようだ。

そんなネギも新年度から3・Aの副担任になる事を通知され、それも祝って食事が模様される事となった。

「　　そうですね……では超さん、費用は出すので超包子メンバーにお願いしてもよろしいですか？」

「構わないネ！　　ついだから、五月のライバルにも出張って貰おう力？」

“音無さんと料理の腕を競うのは久しぶりですね、楽しみです”

ネギの言葉に超は快諾を示し、この機会にリアンとクラスメイトの接点を作る事にした……ちなみに、これは予め決められていた事であって、彼女の独断ではない。

「えー？ 五月ちゃんのライバルー!?」

「そんな人がいるの?! …… って言うか、超包子の料理が食べられるの!?!」

「やったーっ!」

「えー、それじゃあ…… お昼に、寮の傍の桜に集合して下さいね」

「…… はい!」

SIDE 超

やれやれ、相変わらずご先祖様本人とその周辺の変化は著しいネ。私の知っているご先祖様、ネギ先生は本来数えで10歳だったのに対し…… 此方ではまさかの青年ぶり、まったく無茶するヨ。

まあ、方向性はどうかあれ無茶をする所は似通っているとと言えるかな?

「いや、正史で伝わっている修羅場を思えば…… 此方の方がずっとマシカ?」

正直、10歳児がハーレムを築くのはどうかと思うヨ…… それも、元教え子相手に。

更に、その結果生まれたのが自分なのだから…… 笑うに笑えないネ。

「どうかしましたか、超?」

「何、我が身の可笑しさに笑いが零れただけヨ…… そっちは大丈夫なのか?」

「はい、一通り皆様のご注文は完了致しました」

私が乾いた笑いを漏らしていると、近くに来た音々が話しかけてきた。

…… 思えば、この子もとんでもない存在になったものネ。

正史でも魂は得たらしいが、この世界みたいに生まれて直ぐに得ら

れた訳ではない筈……まあ、リアン様絡みだから気にしてもしょうがない力。

「む、超から旦那様に秋波が送られているような気配がします……駄目ですよ、旦那様は私の御主人様ですから」

「ね、音々？ 私は別に秋波など送ってはいないゾ？」

最近の音々は言動が少々可笑しいような気がするネ………どっかの触角みたく、変な電波を拾っていたりしないだろうナ？

………と言つか、御主人様ってなんネ？

「御主人様は御主人様ですよ？ 本来ならば、私の全てを使ってでもお仕えしたいのですが………生憎、奥様がいらっしやりますから」

「………心を読まないで欲しいネ」

お前は本当に、ガイドノイドなの力？

あと、裏方とは言え御主人様御主人様と言わないで欲しいネ………聞かれたら、私まで変な目で見られるヨ。

現在私達は学年TOPと副担任の辞令を受けたネギ先生を祝う為に出張版の超包子で腕を振るっているヨ。

まあ、主に腕を振るっているのは五月とリアン様の所の音無さんだけドネ。

「それで、リアン様達の紹介は済んだの力？」

「ええ、恙無く………古さんや長瀬さんは強者の匂いに目を光らせていましたか」

「また、無謀な………気分を害するような事はさせてないだろうナ？」

「勿論です。手渡して薬を盛ったジュースを差し上げましたから……古さんは撃沈しましたし、長瀬さんは口元を引き攣らせてくれましたよ？」

……愛しの旦那様の為とは言え、平気でクラスメイトに薬を盛るとは。

これは少し、リアン様と相談する必要があるネ。

「超？」

「な、何でもないネ……ところで、クラスメイトの中で変な挙動をする子はいなかったか？ ほら、前に教えた長谷川さんとかどうだったネ？」

正史の方では、ここら辺りからご先祖様に関わり始めた筈だが。

「確かに、長谷川さんだけが周りのテンションについていけない風な感じがありましたか……」

「ガ？」

「チャチャ姉さんと旦那様の取り成しで、平静を取り戻されたようです」

ふむ、やはり此方では一般人は巻き込まれる事は無いのか？

まあ、リアン様がそのような事を許すとは思ってもいないが……あの才覚を潰すのは惜しい気もするナ。

「平静を取り戻した、という事は……何か遭ったら、再度ぶり返すのではないか？」

「いえ、旦那様と少しお話された結果……服飾関係に造詣が深い事が分かりまして、奥様と会話に花を咲かせておられますよ」

「……そうか、彼女が裏に関わらないのは惜しい気もするが仕方な

「いネ」

まあ、人の幸せなんて他人には計れないものなのかも知れないネ。

「いえ？ 長谷川さんは此方に迎え入れられましたよ？」

「ハ？」

「無論、戦いの場に出すような事は絶対ないそうですが……魔法世界救済において、必要な才覚だと旦那様は仰られました」

「そ、そうなの力？」

「ええ、旦那様御自身は乗り気では無さそうでしたが……余りにも、電子の精霊に好かれているようなので」

なるほど、精霊関係から彼女の才覚を看破したという事力……まあ、リアン様なら別の才覚にも気付いていそうだが。

しかし、裏を知ったにしては……。

「……見る限り、錯乱したりしていないようだが？」

「それは当然です。旦那様と奥様が懇切丁寧に説き明かしましたから……それに超に教えられた未来とは違い、此方ではそれほど追いつめられてはいなかったのも、早々に受け入れる事が出来た要因だと思います」

「なるほど……世界が違えば、人が抱きうる感情もまた違う力」

毎度毎度、色々気づかされるネ。

確かに、今の私は中華料理だけでなく和食にも精通するようになってるし……そのお陰で、超包子もより繁盛しているヨ。

ふむ、今度は洋食にも手を出してみるべきかな？

ふふふ、何となく未来のビジョンが見えて気がするネ！

食の世界は我が超包子がTOPに立ってみせるヨ！

……アレ？

SIDE
OUT

第三十三章 辞令（後書き）

次回は10/3の0時です。

第三十四章 侵入

SIDE 長谷川

3年生になった。

春休み前には、信じられない事実を教えられもしたが……まあ、何とか折り合いをつける事も出来た。

それはリアンさんのお陰と言うのが最もな要因だったりする。

何せ、彼がこの麻帆良の異常を薄めてくれていたお陰で、周囲から孤立する事無く過ごせてきたのだから。

で、何故私がそういう事になってしまったのかも知れないと言うと……どうやら私は認識阻害と言うものが効きにくい体質らしい。

まあ、言われるまで気づかなかったし……リアンさんも私を直接見るまでは気付かなかったようだけどな。

何でも、私には常人以上に電子の精霊が纏わりついて……そのせいもあって、阻害される筈の情報が認識出来てしまうのだそうだ。リアンさんが言うには……精霊自身に悪気はなく、その可能性を知った今ではある程度距離をとってくれているらしい。

まあ、好かれるのは悪い気はしないけどな。

んで、そんな事実気付かされた私が何をやっているかと言うと……。

「これでいいのですか、随分大雑把ですけど？」

『ああ、千雨にして貰いたいのは正確な情報の構築ではなくて……感覚的な情報の構築だからな。音々だけではカバー出来ない部分を、君にフォローして貰いたいのだ』

リアンさんの下で、情報の構築をしていたりする。

より詳細を言うなら、現実世界の火星と位相空間に存在する魔法世界の寄り合わせをシミュレートしているんだ……こういうのは割りと得意だから、中々楽しいけどな。

『正確な情報の構築だけなら、音々がいれば事足りるのだが……感覚的な物となると、な。すまないな、こんな事に巻き込んでしまつて』

「い、いえ……それは構わないのですけど」

実際戸惑いはしたし、ファンタジーなんて勘弁してくれとは思いついたけど……それ以上に、リアンさんの平穩を求める姿勢に惹かれたんだよな。

奥さんのエヴァンジェリンさんとも趣味の話で、結構気が合うし……まあ、相手が美人さん過ぎて気後れする事もあるけど。それに……。

「……この子の事も気に入っていますから」

ニヤーン

私は膝の上で丸まっている子猫を撫でる。

この子はリアンさんに紹介された、電子の上位精霊だ……名前はユビキタス。

何でも電子の精霊はその高度な能力とは裏腹に、成長がとても遅いらしい……存在自体は遙か昔から在ったらしいのだけだな。

その為、未だ最上位の位階に至った者は存在せず……それもあって私や音々のようなフォローが必要なのだそうだ。

『そう言つて貰えると、助かる……お陰で何とかピースが揃いそうだ』

「魔法世界崩壊阻止、並びに幻想世界の現実化……ですか」

『ああ……まあ、此方からは観測出来ないように手を打つ必要はあるがな』

「それはまあ……火星に人が存在した！ 何て知られたら、大変ですからね」

宇宙に進出した際に、発見される恐れもあるし……その辺はどうするのだろうか？

まあ、私の考える事ではないか。
……ん？

「リアンさん、学園に張ってある電子結界に反応があったのだけど」
私は自身の支配下に置いていた情報端末の一つ、学園の電子結界を通過した存在に気付いた。

『何？ ……こいつは』

んー、何だかまた厄介ごとが起こりそうな予感が……ま、リアンさんの傍にいれば問題ないかな。

S I D E O U T

S I D E カモミール

や、やつと麻帆良に着いたぜ。
最近のムシヨは妙に警護が固くてイケネエ……お陰で、脱獄に時間が掛かつちやまった。

まあ、此処まで来れば後は……むぎゅ？！

「だ、誰でえい！？ 俺つちを踏み潰そうとするふてえ奴は！」

『……ほう、いい度胸だな、エロオコジヨ』

「げえっ?! あ、あんたは!?!」

ノードウスの旦那?!

い、いや、その本体のリアンの大旦那か!?

ど、どっちにしてもえれえ奴に見付かつちまった……ど、どうする?!

「リアンさん、そのオコジヨは一体? ……って言うか、オコジヨが喋るって」

おお、天の助け!?

「そ、その姐さん! イタイケナおいらを助けてくださいませ!」

「……うさんくせえ」

「ひ、酷え?!」

『……俺を前にしてそういう態度をとるとは、な』

ま、不味い!

「み、見逃してくださいませ! 俺うちにはやらなきゃならねえ事があるんでさあ!」

『……ほう? 下着泥棒のお前に、どんな崇高な使命があると言っただ?』

「し、下着泥棒って……マジですか、リアンさん?」

『ああ、マジだ……向こうのネカネって子から聞いた話では、2000枚の下着をかつぱらったって話だ』

「に、2000枚……」

ひ~~~~っ?!

す、既に知られてらっしやる!?!

「ア、アレは無実の罪だったんでさあ！ おいらには病弱な妹が、
『いないのは分かっているぞ？』 ツ?!」

『お前の履歴は既に洗ってあるからな……ウエルズの方でやら
した事を考慮すると、とてもではないが放置は出来んな』

「……何をやったんですか、コイツ？」

『まあ、初犯で見つけたから良かったのだが……魔法学校に忍
び込んで無垢な子供達に仮契約を結ばせたり、金を得ようとしたり
したな』

「か、仮契約って……アレですよ、キスして云々って言う？」

『まあ、別にキスに限った訳じゃないが……そういう事もあって、
こいつは一度捕まった筈なのだ』

つつても、それも事になる前にノードウスの旦那に察知されてしま
ったんだけどな……お陰で懐が寂しいぜ。

『どうにも反省の色が見えんな、しても塵ほども信じられんが……
ふむ』

「か、堪忍してくださいえ……おいらには兄貴のパートナーを見つ
けるという、大事な役目が！」

『ふん、そうやってまた金を得ようという訳か……言っておくが、
ネギのパートナーは既に決まっているぞ（暫定だが、な）』
「なっ?!」

そんな、馬鹿なっ?!

『とりあえず、気でも失っている』

「ちよ、まっ ツ！」

そこで俺たちは意識を失った。

ああ、何でこんな事に……

S I D E O U T

強制的に気絶させられ、グッタリしたカモを掴んだリアンは一息吐いた。

『やれやれ、碌な物じゃないな』

「リアンさん、そいつはどうするのです？」

『んー、向こうに送り返してもいいのだけど……それはそれで、向こうでまた何か仕出かすかも知れんし……とりあえず』

そう言つて、何かを呟くとカモの体に複雑な紋様が浮かび上がった。

「……今のは？」

『悪さが出来ないように、^{ギアス}制約をかけた……魔力封印と女性に近づけなくなる呪いを、な』

「なるほど……」

『しかし、刑務所の檻はコイツに突破出来るような物じゃない筈なのだが……誰かが手引きしたか？』

リアンの脳裏に思い浮かんだのは二つの可能性……学園長とMM元老院だ。

『爺はもう悔い改めた筈だから、可能性としては無いと言つてもいいか……となると、チッ』

「リアンさん？」

カモを寄越したのがMM元老院だとすると、一つの可能性が出てくる……それを思い舌打ちするリアン。

『幸い、今の所観られてはいないが……直ぐに場所を移動する必要があるな、千雨』

「はい？」

『すまんが、転移するから？まっしてくれ』

「あ、はい」

その一瞬後、その場に二人の姿は既になかった。

場所は替わって、グランタムール家。

リアン達が転移したそこには、ネギを除く家族が勢揃いしていた。

「ん？ ああ、リアンか……帰りが遅かったが、何か遭ったのか？」

『ああ……いや、これからあるかも知れないと言っべきか。とりあえず飯にしよう……千雨、君も食っていくといい』

「はい」

やがてネギも帰ってきて、夕食が始まった。

「え？ カモ君が着たんですか！？」

『ああ、来れる筈がないのだが……何故か、な』

「それで？ これから何が起こるかも知れないのだ？ お前がそこまで警戒するのだ、余程の事であろう？」

事情を聴いたネギが驚く中、エヴァンジェリンが静かに問う。

もともと、大体の目星はついているようだが。

『あの警備が嚴重な刑務所から脱獄するなど、コイツ個人ではまず

不可能だ……で、それを手引きした存在がいる筈なのだが』

「まあ、思いつくのは二つだな……爺か元老院と言ったところだろう。で、爺は遅すぎるとは言え改心したから可能性としては薄い……となると、元老院だが」

『そうなる、此処に奴らの息がかかった監視者がいる事になる……今まで俺達に勘付かれないほど慎重な奴が、な』

「ああ、それで急いで転移してきた訳ですね」

事の次第が理解出来たのか、納得したように頷く千雨。

「それで、どうする？ ネギの使い魔にでもなるように、暗示がかけられているようだが」

「オイオイ、マジカ？ ソンナ厄介ナ奴ヲ取り込マナキヤナラナイノカヨ、勘弁シテクレ」

主の言葉に先が見えたのか、チャチャが脱力しながら呟く。

その言葉を聞いた木乃香や刹那も事の次第が理解出来たのか、未だ気絶中のカモを睥睨する……肝心のネギは、そんな彼女達の態度に恐縮しまくっていたが。

『とりあえず、女性に近づけなくなる呪いは強化しておこう……此処でも下着泥棒なんてされては堪った物ではないからな』

「ふっ……その時は、私が直々に挽肉にしてくれる」

『キティが手を汚すまでもないさ……後は、一般人の前では口が聞けない様にしておくか』

そう言って、軽く呟き制約を施すリアン。

言うのは簡単だが、実際に施すととなると手間がかかる筈の制約を軽々とやってのける様は……妻であるエヴァンジェリンにしても、呆れるしかない手際の良さである。

「……今更だけど、リアンさんってチートだよな」
「千雨ちゃん、本当に今更だよ」

魔法使いより魔法使いらしいリアンに、千雨は呆然と呟くのであった。

第三十四章 侵入（後書き）

次回は10/4の0時です。

第三十五章 試練

SIDE 木乃香

4月も半ばが過ぎて、そろそろ修学旅行と言う時期になった。うちはせつちゃんと共に、リアン様の執務室にお呼ばれしている。

「リアン様、今日はどないな用ですか？」

「来たか……今日はお前の修行の成果を確認するのと、この後に控えている試練について教えようと思っただけ」

「試練？」

「リアン様、それはもしかやこのちゃんが幼少の折告げられたと言っただけ？」

「その通りだ。時も迫っているからな、少し早い気もするが……厄介ごとを済ませてしまおう」

リアン様はそう言うと、一枚の紙を取り出し、机の上に広げた。

その紙は関西呪術協会の見取り図のようで、うちの知っている通りの物だった。

「さて、木乃香は既に100を超える式神を従え……更に四神に相應する識神を創り終えていたな？」

「はいな！ 式神さん達は、日々鍛錬に励んでもらうとるよ……お陰で、うちの治療術も鍛えられとるえ」

「このちゃんの式の皆さんには驚かされますよ、会う度に巧みになっていきますから……うちも良く練習相手になって貰っています」

そうそう、せつちゃんと鬼さん達はよく剣を交えとるんよ……それはええんやけど、よく血塗れになるんはいただけんわー。

『ほう？ まあ、式と仲良くする事は好い事だ……それで、五行のまとめ役である麒麟はどうなのだ？』

「う……そ、それは」

何や知らんけど、どうにも上手くいかんのよね……四神の制御なんかは、問題なく出来てんのやけど。
やっぱり格が違うもんでかな？

『ふむ、まあ、ある意味当然の結果か……まあ、事に及ぶ時に目覚めさせる事が出来れば問題ないが』

当然の結果？

どういう事やる？

「あの、リアン様……当然とは、どういう意味ですか？ このちゃんは今まで必死に修行してきました、それこそ血反吐を吐いてても！」

せ、せつちゃんってば。

ややわー、私の事を思ってやるうけど……そういうんは、言わぬが花やで？

『ふ……そう気色ばむな、木乃香の頑張りは俺も承知している事だ』
「で、では何故？」

『木乃香は確かに頑張ってきた……しかし、それはあくまで鍛錬レベルでの話だ。実際に死に直面した訳でもないし、な』

リアン様が言うには、人と言うものは殻を被って生まれてくるらしい。

その殻が脱げられるかどうかで、本物になれるかどうかが決まる……

…と言う訳ではないようやけど。

それでも一つの切欠ではあるようや。

それで、私が未だ創生出来ない麒麟さんは生半可な……それこそ一流どころが一生かけても、届かへんかも知れんぐらい超高位の存在だと言う。

まあ、それは四神も同様やそうやけど。

『木乃香には才がある、近年では稀に見ぬほどの才がな……しかし、今回はその有り余る才が邪魔をしておるのだよ』

「あー、そういう事が」

せつちゃんは血反吐を吐いてまで、とか言うてたけど……うちの場合はそれでも足りひんちゅー事か。

自分で言うのも何やけど、大き過ぎる才も考えもんやなー。

『まあ、それでも見た感じいい所までは来ている様だからな……後は、どれだけ魂を搾り出せるかってところだ』

「うん、うち頑張る！……で、試練ってなんなん？」

『それは此方を見て説明しよう……』

リアン様はそう言うと、机の上の見取り図を示した。

『さて、木乃香に刹那……この場所に、何が封じられているかは知っているな？』

「此処、ですか……ッ、この場所は！」

リアン様が示した場所は、池に浮かぶ大きな大岩やった。確か、あそこには……。

「リヨウメンスクナノカミ、ですか？」

『そう、大鬼神リヨウメンスクナノカミが封じられている……不本意な形、でな』

「不本意、ですか？」

『アレは本来飛驒の国に都落ちした二人の皇子が、向こうで祭られ神格化したものだ……それを昔の魔法使いが利用しようと担ぎ出し、しかし失敗して此処で封印される事になったのだ』

リアン様が言うには、実際に封印されているスクナの記憶を読み取って分かった事らしい。

まあ、裏の歴史なんて大体が歪められて伝えられとるもんやからない。

「そ、そのような事が……では、本来は善鬼であるか？」

『いや。封印された後結構早い段階で復活して、その時に暴れ回った事もあるからな……一概に、害がない存在とは言えん』

「は、はあ？」

何やよう分からんな？

結局、大鬼神がどないしたんやろ？

『まあ、それはともかくだ……木乃香にはこのスクナを識神化して貰う、大鬼神としてではなく双鬼神としてな』

「……え、ええ　　っ?!」「」

マジかいな?!

「た、確かスクナは身の丈十八丈はありますが……そんなものをどうやって?!」

『いや、実際はそれ以上だ……どうやって識神化するかと言えば、木乃香が取り込んで体内で分解……その後、二つに再構成するのだ』

いやいや、そんな大きな物うちの中には入らへんよ?!
そんな事したら、うち壊れてまう!?

『……まあ、何を考えているか大体想像付くが、取り込むと言つても肉体にはではなく、精神にだぞ? 木乃香ほどの霊力持ちならば、その魂魄は巨大なものとなる……それこそ、スクナを取り込んでも問題ないぐらいに、な』

「……しかし、取り込めたとしてその後に影響は無いのですか?」
『識神化さえ、完了すれば問題ない……それが終わるまでは四神の護りで身を固めればいいし、俺も全力で護ろう』

まあ、そこら辺は心配してないけど……うちが識神化出来へんだら、台無しちゅー事やな。

『無論、簡単に出来る事ではない……今回は別口でスクナを狙う奴もいるようだからな』

「……え?」

『しかしスクナを識神化する事は、奴にとつても好ましい事の筈だ……まあ、今の奴は理性をなくしているだろうから、そんな事理解出来ないだろうが』

要するに、うちがスクナを識神化して飛驒に帰せ……そう言う事な
んかな?

『呪術協会にしても、何時までもアレを膝元に置いておくのは災厄の種にしかならん……アレのせいで、京の結界に支障が出ているからな』

何や、悪い事しかあらへんなあ?

確かにそんなんやつたら、何とか出来る可能性のあるうちが何とかせなあかんわ……うちも本意とは言え、呪術協会の長の娘やら。

「あ、あの……それはリアン様にお任せ出来ないのでしょうか？」

流石に、このちゃんには荷が重すぎるような気がしますが」

「駄目だよ、せつちゃん……これは良くも悪くも、こちら呪術協会の問題やからな」

『そう言う事だ……手伝いぐらいはどれだけでもしてやれるが、事を成すのは木乃香でないと駄目だ』

「……そんな」

せつちゃん、過保護やな……気持ちは嬉しいけど、もっとビシッとして欲しいわ。

『木乃香にはこれを見越して、五行聖獣結界を授けてある……後一体、麒麟さえ目覚めていれば問題は全く無かったのだがな』

「五行聖獣結界……そう言えば、あの四体を持ってしてもスクナを抑えるのは難しいのですか？」

『木乃香の才はあくまで治癒と防御だからな……攻勢が全く無い以上、四神もスクナを抑え込むには至らんだらう。逆に、木乃香の力で召喚してしまえば制御は容易だらうが……その場合、木乃香自身がスクナを識神化するだけの余裕は無くなるだらう』

「儘ならんよな……まあ、土壇場で何とかしてみるわ」

何だかんだで、うちも実戦を経験したらんからな……多分、これが今後の運命を決める事になるんやろうな。

リアン様がさつきチラツと言った、別口っていうのも気になるけど……そっちはせつちゃんらに任せる事にしよう。

うちはうちにしか出来ひん事に集中せなあかんからな。

S
I
D
E

O
U
T

第三十五章 試練（後書き）

次回は10/5の0時です。

第三十六章 出陣

4月20日日曜日。

グランタムール家はその日は朝から活気があった。

「ふむ、とりあえず私とリアンの着替えはこれでよし……パンフレットの類は、音々もいるし必要ないか？」

居間には、旅行用の鞆に着替え用の服や歯ブラシを詰めているエヴァンジェリンがいた。

「御主人、気合入ッテルナー……ソナニ楽シミナノカ？」

「む？ まあ、久しぶりの遠出だしな……それに行き先は京都だぞ？ 何時ぞやの分も堪能せねば、な」

そう、彼女も京都へと行く事になったのだ。

「……まあ、その前に厄介ごとを片す必要はあるがな。チャチャ、恐らく久方ぶりの大戦になる筈だ……しっかり刃を研いで置けよ？」

「ケケケ、望ムトコロダゼ！」

「……まあ、別に修学旅行を楽しんでもいいがな」

「何言ッテナダ、御主人……俺ハアクマデ御主人ノ従者ダゼ？ 今ノ生活モ悪カネエケド、ヤッパリ物足りネエカラナ……精々、暴レテヤルサ」

二人がそんなやり取りをしていると、双子とアスナを連れだりアンのがやって来た。

『暴れるのは構わんが、公共物まで破壊するなよ？ ……それはと

もかく、キティ』

「どうした？」

『どうやら、向こうの動きが予想より早そうだ……予定を繰り上げて、今日出発するぞ』

「……何？　しかし、木乃香達は火曜日からだぞ？」

修学旅行の日程は、火曜日から5日間だ。

つまり、月曜日は普通に授業があったりする。

『何、身代わりを立てておいたら問題ない……本人達も了承しているし、な』

「まあ、別に構わんが……誰が先行するのだ？」

『木乃香と刹那は勿論だが、チャチャにも来て貰うか……後の連中は、身代わりのフォローをして貰おう』

「……それが妥当か」

今回の件はあくまで呪術協会内で収束させる予定なので、ネギやア
ーニヤが関わる事は無い……無論、他の魔法先生などは論外だ。

ただリアンやエヴァンジェリンは呪術協会と懇意にしているので、
客分として特別扱いとなる。

「パパ、ぼく達は？」

『ん？　アステールとステラも後からだな……アスナと音無の言う
事をしっかり聞いて、大人しくしているのだぞ？』

「はい」

「分かりましたわ、お父様」

「二人の世話は任せて貰ってもいいけど、行く時は学生さんと同じ
？」

『いや、念の為俺が召喚する……もしもがあったらいけないからな』

この家にいる以上は心配もないが、双子もアスナも大き過ぎる問題を抱えている以上、過剰な配慮を取るのも致し方ない事であろう。まあ、実際のところ……精霊の盟主たるリアンの子供達は世界中の精霊に見守られているも同然なので、それほど心配は要らないのだが。

「リアン様、準備出来たえー！」

「私も完了しました！」

どうやら既に事情を聞いたらしい木乃香達が、鞆を背負ってやって来た。

『さて、それじゃあ行くとするか』

「エ……ダ、旦那?! オ、俺ハマダ準備終わってナイゼ!？」

『……後でアスナに持って来て貰え、行くぞ』

「チヨツ?! ア、アスナ! タ ……」

チャチャの待ったの声は聞き入れられず、虚しくその残滓が居間に響いた。

「……はあ、それじゃあチャチャの荷造りでもしましょうか」

「ぼくもー」

「お姉様、私もお手伝いしますわ(……それにしても、本当に締まらない姉さんだこと)」

疲れたような声で呟くアスナに、双子も同意を示した……約一名、内心毒を吐いていたが。

SIDE リアン

俺達が転移した先は、何時ぞやに訪れた詠春の執務室だった。本来は門前にも転移して迎え入れて貰おうと思ったのだが、どうやらずれてしまったようだ。

『（……ふむ、やはり半身が傍にいないと力の加減が上手くいかな）仕方ない……まあ、詠春か木乃葉がその内やつてくるだろう』

「……何だ、やはり具合が悪かったのか？」

『ん……ああ、半身たる大聖霊を魔法世界の方に送っているからな。とは言え、それほど問題はないさ』

やはり、キティにはばれてしまっていたようだ。

まあ、木乃香の試練には丁度いいだろう……余り頼りにされても、成長出来んからな。

「リアン様、調子悪いん？」

『別に調子が悪い訳ではないが、力が制限されていると言った方が正しいか？ 本来の3分の2程度まで、能力が低下しているから』

「そ、それほどまでにですか?!」

「言つて置くが、それでもスクナの数倍は強いぞ?」

キティ……いや、事実ではあるが。

『まあ、何にせよ……今回のメインは木乃香であり、その護衛の刹那だ。余り、俺を頼るのではないぞ?』

「……せなね、一皮も二皮も剥ける為に来たんやから」

「こ、このちゃん……」

「何だ、護衛される側の方がしつかり認識出来ていないか……くつくつく、これではその内どっちが護衛か解らなくなるやもな」

「ケケケ、ソレハソレテイインジャネエカ?」

「そ、そんな」

やれやれ、緊張感が無いと言うか何と言うか……まあ、適度に柔軟な思考を持つのはいい事だが。
む？

『どうやら、詠春が気付いたようだな』

「やっとか……やれやれ、腑抜けは治ったのではなかったのか？」

「ケケケ、一度鈍ツタボンクラ八早々鍛工直セナイツテナ」

そうこう言っている内に開けられる襖……その先には、荒い息を溢す詠春がいた。

やれやれ、鈍っていた訳ではないようだが……相変わらず仕事には追われているようだな。

『ふ……凄い隈だな、ちゃんと寝ているのか詠春？』

「や、やはりリアン殿でしたか……ええ、寝れていませんよ」

「くつくつく……木乃葉よ、お前の旦那は相変わらずか？」

「ええ、そうなんですよ……エヴァさんの旦那様と違って、苦勞が絶えまへんわ」

「こ、木乃葉……それはあんまりです」

まあ、その苦勞に見合った成長はしているようだが……ふむ。

『詠春、協会内に気配が少ないが……』

「ええ、招かざる客が来ると解っていましたので……わざと外に出張らせています。無論、合図すればすぐさま帰還出来るよう準備してあります」

「現在協会内に居られる戦力は、治療術に秀でた方が数名と神鳴流の方が1名ですわ」

ふむ、確かにそれなら向こうも食いつくだろうが……此処の地形を考えると、な。

『詠春、外に出ている者には転移符か何か渡してあるのか?』

「いえ? 確かに総本山までには、長大な千本鳥居がありますが……道はそれだけではありませんし」

「確かに、無間方処の咒法や隔離結界の類は注意すべき点ですけど……その程度の事で遅れをとる様な、柔な方はそれほどいませんよ?」

『いや、それは俺も分かっている……ただ、奴らの規模と目的を考えると、な』

この感じだとまだ時間に余裕はありそうだが、向こうが目指すべき場所は此処ではなく……大鬼神の大岩だからな。

とは言え、早々に呼び戻しては要らぬ警戒をされてしまうし……どうしたもののか。

「ところで、向こうの戦力は把握出来ているのか?」

『ああ、大まかには……例の組織の幹部一人に、放逐された過激派共総勢50余名だ。無論、封印されていた能力は解放されているぞ……操られているようだが、な』

「「なつ?!」」

「それはまた、大掛かりな戦力だな……召喚魔なんかを含めたら、更に十数倍に膨れ上がるぞ。木乃葉、此処に残留している神鳴流は誰だ?」

「こ、木乃香の友達の月詠ちゃんどす」

……まあ、青山姉妹などが残っていてはそれだけで抑止力になってしまつか。

「……ふむ、では此処の護りは近衛夫妻と私達従者で務めよう。リアンと残りは敵の目的地である、大岩に向かつてくれ」

「それで往くか。まあ、敵の伏せ札で状況も変わるかも知れんが（……それもまた、試練とするか）」

「やはり向こうの目的は、大鬼神の復活ですか」

『正確に言つと、スクナの奪取みたいだがな……まあ、復活自体はどうでもいいのだ』

「え？」

おっと、試練の事は知らせない方がいいな。

木乃葉はともかく、詠春は煩く言つたらうから……ッ！

『どうやら、向こうは動き出したようだ……こうなれば、もう向こうを呼び戻しても影響はなかるう』

「！ 来ますか、それでは早速連絡を入れておきます」

「ふむ、此処を包囲するように陣を組んでいるが……一箇所だけ、あからさまに薄い部分があるな」

「まあ、畏でしょうなあ……どうします？」

『構わんさ……伏兵がいるなら、蹴散らすまでだ。月詠、お前も往けるな？』

俺は数瞬前から襖の裏に現れていた、月詠に声をかける……気付いていなかったのは、木乃香と木乃葉だけだが。

「はいー、お嬢様と先輩の露払いはお任せ下さい」

『よし、それじゃあ往くとうしようか……キティ、余りはしやぎ過ぎるなよ？』

「ふっ……ああ、解っている。精々、詠春を扱き使つてやるさ」

「お、お手柔らかに頼みますよ……リアン殿、娘を頼みます」

『ああ、護つてやるよ』

……命だけはな。

S I D E
O U T

第三十六章 出陣（後書き）

次回は10/6の0時です。

第三十七章 迎撃

SIDE フェイト

結局、日本への研修工作は旨くいかず……強引に事を進める事になった。

その為もあってか、僕の動向は向こうに知られてしまったみたいだけど……とりあえずは、問題ない。
所詮、一度限りの事だしね。

現在、僕はリヨウメンスクナノカミが封印されている大岩で、時を待っていた。

傍には、意識操作した呪術協会の過激派の人達20名が祝詞を唱えている……まあ、起こす為の力が足りないから時間が掛かりそうだけど。

とは言え、極東最高の力を持っていると目されている近衛木乃香の傍には、厄介な存在も居る様だし……本当、儘ならないね。

一応、向こうを包囲する人の中にもそれなりの使い手は居るし……
罨も幾つか張らせて貰ったけど、旨くいくな？

「むっ？ 包囲を抜けた者がいるね……罨だとは気付いていると思っけど、それでも尚そこを選ぶか」

まあ、時間がないのは向こうも同じか……とは言え。

向こうに真祖の吸血鬼まで付いていたのは、誤算もいい所だけど……間に合うかな？

戦力の方は予想以上に集められたからいいのだけど……それでも相手のレベルを考えると、安心は出来ないね。

あの子達が用意してくれた召喚魔もいるとは言え、アレを相手にするのは心許無い事に変わりはないし……ふう。

僕が溜め息を吐いていると、祭壇の光に呼応するかのように大岩が光りだした。

「……ふむ、やっと口が開くか」

制御も何もないから、出た瞬間に暴れるだろうけど……僕が封印具に取り込むのが先か、向こうが先に来てしまうか。
最悪、魂魄の情報ぐらいは手に入れたいところだけだ。

……とりあえず、保険をかけておくか。

S I D E O U T

リアン達が屋敷の外に出ると、そこには既に術者20名程と大量の鬼族が周囲を包囲していた。
鬼族は大小様々で、中には上位クラスの数も少なくはなく……地上だけでなく空にも召喚魔は存在しているようだ。

「な、何と言う数だ……鬼族だけでも、軽く1000はいるぞ!？」
「……ふん、雑魚ばかりかと思っただがそうでもないようだな」

無論、エヴァンジェリンに届くような傑物は皆無だが……数も揃えば厄介な事は確かだろう。

「空ニイルノガ、厄介チャ厄介カ……マア、俺八遊撃ニ徹スルゼ？」
「構わん、精々蹴散らしてやれ……詠春、術者はお前が片付けるよ？」

「はい、組織の後始末は私の領分ですから……皆さんの御手を汚させはしませんよ」

「屋敷の方は、うちが結界で護ります……」

流石に木乃香の母なだけにはあり、瞬く間に屋敷は強固な結界に覆われる。

もつとも、敵も待つてくれはせず、木乃葉目掛けて波の様に押し寄せてくるが……。

「……があああつ！」「」

「堪え性のない奴らだ……お前ら如きに、木乃葉はやらせん」

チャチャの大刀が、エヴァンジェリンの糸が……迫ってきた鬼達を一匹残らず微塵斬りにした。

「エヴァさん、ありがとう……リアン様、そちらの事は宜しゅう頼みます」

『ああ、今後の為にも旨くやるさ……よし、往くぞ』

「はいな！」

「はい！」

「はい！」

リアン達の往く手には鬼が大量に立ち並んでいたが……エヴァンジェリンが無詠唱で放った、闇の吹雪によって蹴散らかされる。その穴を抜けていくリアン達……当然、それを追う輩もいたが……悉く、糸による斬首の刑に晒された。

「ふん、我が夫の邪魔はさせんぞ……来るなら此方に来い、畜生共」
「サア、狩リノ時間ダ！ 俺二斬ラレタイ奴八、前二出ナ！」

「……「ごがああああつ！！」「」」

「この後には、愛しい者達との観光が控えているのだ……邪魔する者は、潰す！！」

黒い津波のような鬼達が押し寄せるも、それを迎え撃つエヴァンジェリンの顔には変わりない笑みが浮かんでいた。

森の中を駆け抜けるリアン達の視界に、薄い結界が見えてくる。

その結界は周囲一帯を覆う巨大なもので、どうやら認識阻害の類のようだ。

ちなみに、これまでの間に月詠は木乃香の試練について教えられていた。

『対スクナ用の認識阻害結界が見えたという事は、あと少しだな』

「はいー、でも招かざる人達がいるようですよー？」

月詠の言う通り、結界を越えた直ぐ傍に犇めく影が見える……その数、約500。

ただ、此方に術者はいないようだ。

「くっ、何て数だ……まさか此処までの数がまだいるとは」

「こっちは狗族や烏族も結構おるね……リアン様、どないしょ？」

『恐らく、これ呼び出した術者は祭壇の方にいるのだろう……数が向こうより少ないのも、儀式の為に控えたと言ったところか』

そこまで言っつて、リアンは刹那と月詠を見やる……彼我の戦力差を計るように。

そして、それ以上にその心を見透かすように。

『ふむ……木乃香、お前が持つ式の中で選りすぐりだと思っ奴を三
体召喚しろ』

「？ 三体だけ？」

『お前にはこの後、力を振り絞らなくてはならない試練があるのだぞ？ 俺が手を貸すのは、敵方の幹部を相手にするぐらいだと思っておけ』

「っ……そうやったな、魂振り絞らなアカンのやった」

「……このちゃん」

幾ら決意を固めようと、彼女がまだ年若い少女である事に変わりなく……その身は微かに震えていた。

しかし、それも数瞬の事……幾ら年若かろうと、今まで積み重ねてきた思いが、確かな物である事も変わりはない。

「よし、もう大丈夫や！ それじゃあ召喚するで！

出で

ませ、豪腕鉄槌鬼！ 羅刹烏！ 白髪狐！

現れるのは自身の身の丈程もある鉄槌を持った大鬼と太刀を掲げた烏族、そして狐面を被った白髪の狗族だった。

「よう呼んでくれはったな、姫さん！」

「ほう、中々に倒し甲斐がありそうな奴らが揃っているやないか…

…杯は交わしたくない様な奴らばかりやけど」

「そうやねえ、どいつもこいつもいけ好かない顔しとるわ……まあ、呼ばれるんは術者に似るって言うし、お似合いかも知れんけどな」

それぞれが相手を睥睨し、得物を構えて啖呵を切った。

「オヤビン、らっくん、きっちゃん……敵さん多いけど、せっちゃん達と一緒に戦ってな？」

オヤビンの手を取って、真っ直ぐお願いする木乃香……何気に、呼び名をつけているようだ。

「がはははは！ 姫さん、いつも言うところが……もつと偉そうにしてくれてかまわんのやで？」

「そやねえ、そんじよそこらの術者ならいざ知らず……杯交わした仲間んやから、遠慮は要らんよ？」

「まあ、姫さんが憤み深いんは今に始まった事やない……呼ばれたからには、全力で戦うだけや！」

「何一人でかっこつけているんや！」よ！

ボカッ！

「い、痛いかな！？」

何とも軽い感じの三体だが、その身に纏う空気は一流以上のものが感じられた。

『中々いい式ではないか、見たところ……歴史に名を残す奴らの二歩手前つて所、か？』

「ぐわはははは！ 大旦那殿にそこまで認めて貰えるとは、嬉しい限りやなあ！」

「オヤビン、大旦那様に失礼やよ！」

『ふ、構わんよ……と言うか、大旦那は止めてくれ さて、それでは此方は任せるぞ……月詠』

「！ ふふふ……はいー、お任せ下さい」

リアンの眼差しを受け、その中にある考えを理解した彼女は素直に頷いた……己もそれが一番だと分かったから。

「せつちゃん、つつき……気をつけてな」

「大丈夫ですよ、このちゃん……私と月詠、そしてこのちゃんの式

の皆様がいれば……この程度の群れに負けはしません」

「そうですよー、お嬢様は心配せず御自分の試練を果たして下さい

ー……そうすれば、ウチらも安心できますから」

「……うん！ 絶対、成し遂げて魅せるよ！」

『よし……往くぞ、木乃香』

「はいな！」

リアン達が目指す先では、天を衝く極光の中に……光り輝く巨躯の大鬼が現れようとしていた。

第三十七章 迎撃（後書き）

次回は10/7の0時です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8022v/>

ネギま！～星の申し子～

2011年10月6日00時30分発行